
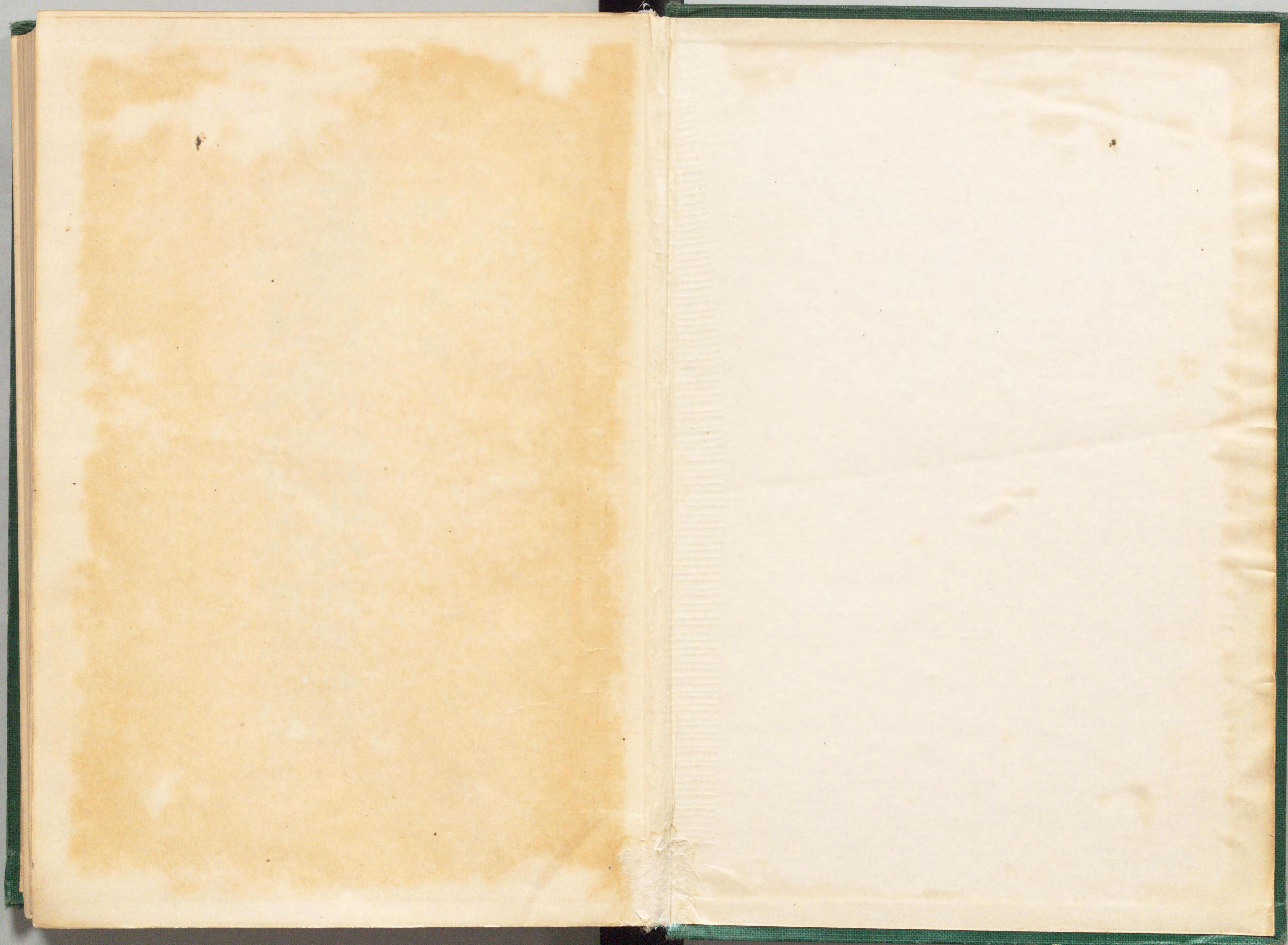


121.3
N691
S



00236261

〇
複写



關儀一郎編纂

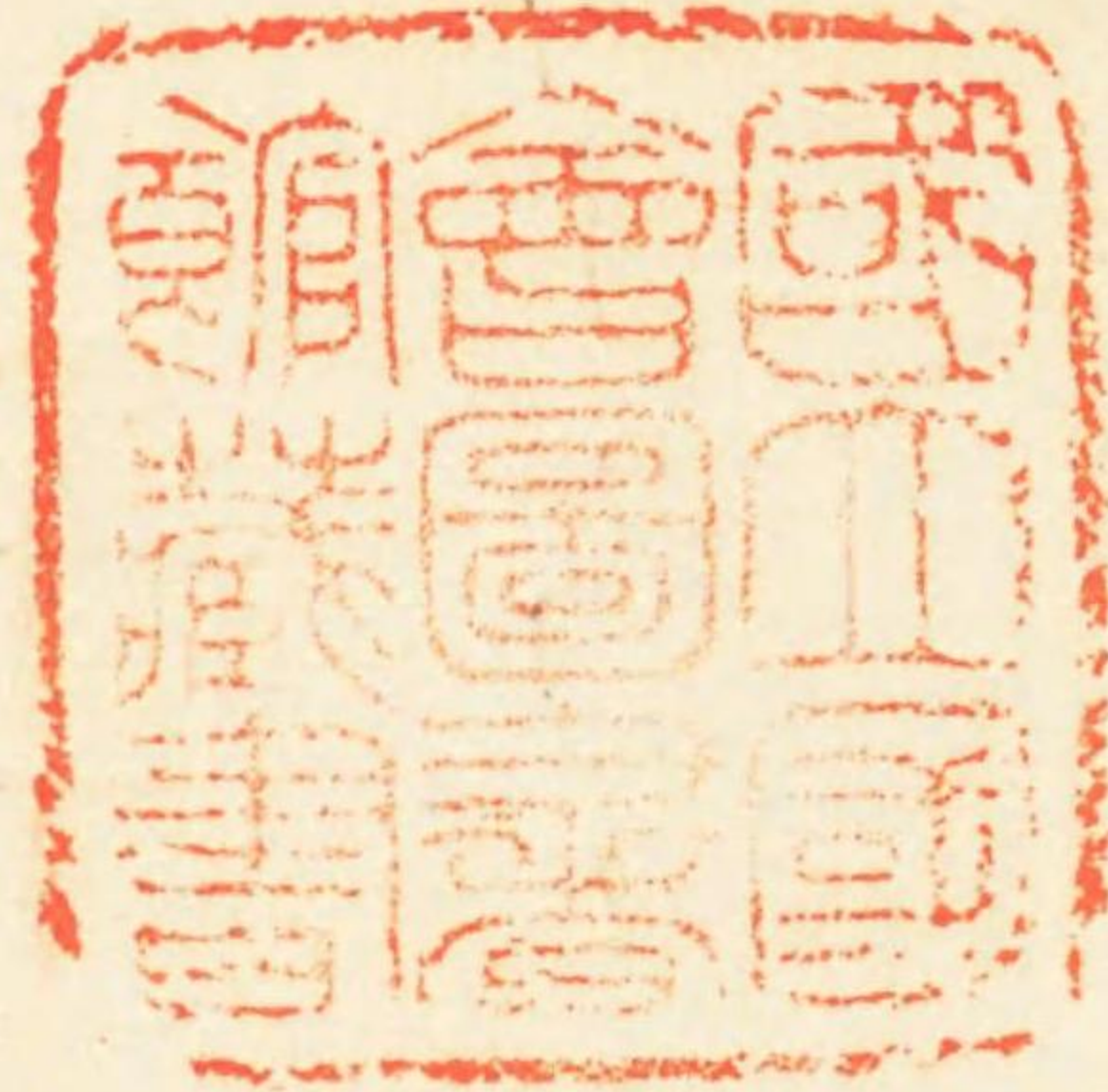
續續日本儒林叢書

121.3N691S

續續日本儒林叢書第二册

隨筆部及雜部

湖亭涉筆	四卷	安積澹泊齋著	一三二頁
霞亭涉筆	一卷	北條霞亭著	三〇頁
抱關休暇漫筆	一卷	矢部騰谷著	一六頁
鳩居語	一卷	尾崎稱齋著	一六頁
知非編	一卷	三浦清陰著	一四頁
蟻亭撫言	二卷	大井雪軒著	三八頁
學範後編	一卷	東條一堂著	一六頁
一堂讀書法	一卷	同著	二〇頁



236261

學問源流	卷一	一
胡註通鑑	卷二	一
人物異事	卷三	一
俗語出典	卷四	一
老詩臆	卷五	一
朱文恭遺事	卷六	一
澹泊齋	卷七	一
水戸藩	卷八	一
大日本史	卷九	一
西山遺事	卷十	一
朱氏談綺	卷十一	一
澹泊齋文集	卷十二	一

例言

湖亭涉筆 四卷 安積澹泊齋著

本書は主として 胡註通鑑に就て、人物異事奇語等を抄録し、加ふるに評言を以てせる者なり。而して卷四には俗語出典、老詩臆、朱文恭遺事の三種を收めたり。享保十二年（七十二歳）の自序あり。所收本は刻本に據る。

著者澹泊齋は名は覺、字は子先、通稱は覺兵衛、澹泊齋、老圃等と號す。常陸の人なり。少くして朱舜水に従學す。博學能文、最も史學に長ず。水戸藩に仕へ、大日本史編修の總裁となり、元文二年十二月歿す、年八十二。著す所、列祖成績、澹泊史論、西山遺事、朱氏談綺、澹泊齋文集等あり。

霞亭涉筆 一卷 北條霞亭著

本書は經説、史談、人物評、異聞奇事等を録せるもの。文化七年（三十一歳）の題言あり。所收本は刻本に據る。

著者霞亭は名は讓、字は子讓、讓四郎と稱す、霞亭又天放生と號す。志摩の人なり。少くして京に入

り、釋大典、皆川淇園に學び、又菅茶山に從遊す。其學宋學を主とし、最も詩に長ず。福山藩に仕へ、文政六年八月歿す、年四十四。著す所、小學纂註、助辭辨、嵯峨樵歌、歲寒堂遺稿等あり。

抱關休暇漫筆 一卷 寫本 矢部騰谷著

本書は仁義禮智信、及び性命兵刑等の目を掲げて解説をなせる者なり。所收本は前嶋懸次郎氏所藏本に據る。

著者騰谷は名は保惠、字は海父、通稱を爲八郎と云ふ。江戸の人なり。經歷歿年未詳。著述は學庸集義、論語三家定說考等あり。

鳩居語 一卷 尾崎稱齋著

本書は専ら人を訓諭せんがために作れる者にして、譬喩その半を占む。天明四年、同門原狂齋の序あり。所收本は刻本に據る。

著者稱齋は名は修平、字は子成、稱齋又鳩居と號す。江戸の人なり。井上金峩に學び、中村藩に仕ふ。歿年未詳。著す所、鳩居紀年録、牧民忠告譯解等あり

知非編 一卷 三浦清陰著

本書は經義より鬼神五行、天文曆象、佛道等に涉りて論述せるものにして、處々に朱子の説を非斥し、

徂徠の説を稱賛せるを見る。所收本は延享元年の刻本に據る。

著者清陰は名は與稽、字は元卿、石見の人。瓶山の父なり。山縣周南に從學す。經歷歿年未詳。

蟻亭撫言 二卷 大井雪軒著

本書は經義の解説を主とし、旁ら史傳詩文諸子等に論及せる隨筆なり。書中處々宋學を排撃せるを見る。所收本は延享二年の刻本に據る。

著者雪軒は名は守靜、字は篤甫、蟻亭、汝山、雪軒の諸號あり。攝津の人なり。經歷歿年未詳。著書は本書の外に、蟻亭閑言、孔聖生卒考等あり。

學範後編 一卷 東條一堂著

本書は孟子の人之有道也乃至父子有親君臣有義云云の條を解釋して、我邦の道は即ち堯舜周孔の道なることを示し、且つ道の出る所と始まる所とを明かにせるものなり。所收本は刻本に據る。本書の初編は、本叢書續編第二冊解説部第一及雜部に收めたれば、并看すべし。

著者一堂の略傳は、本叢書正編第五冊解説部第一の例言に見えたり。

一堂讀書法 一卷 寫本 東條一堂著

本書は先秦古文の字義文理を考究するに資せんため、文字の宗名族名、及び連言映略等を解説せる

者、以て著者の讀書法を知るに足れり。所收本は前嶋懸次郎氏所藏本に據る。

視 志 緒 言 二卷 壩谷岩陰著

本書上卷には立志、儒、檢身、讀書法、夏誦説の五篇を收め、下卷には文十一篇を採録せり。何れも學徒に躬行活用を勸勵せる有用なる文辭たり。天保七年（二十八歳）の著に係れり。所收本は慶應二年の刻本に據る。

著者岩陰の略傳は、本叢書正編論辨部の例言に見えたり。

續 三 教 要 論 一卷 松宮觀山著

本書は前著三教要論に繼いで、三教の要義特長、及び末流の弊等を叙述せる者なり。書中に犬馬の齒八旬に垂たりと見え、卷末に寶曆十二年孟春の語ありて、最も晩年の著に屬せるを知る。本書の前編は、本叢書解説部第二に收められたれば、並看すべし。所收本は刻本に據る。

著者觀山の略傳は、本叢書正編解説部第一の例言に見えたり。

三 之 逕 一卷 瀧 鶴臺著

本書は死生及び安心の問題に就て、儒佛老莊三家の説の概要を述べ、三教は何れも我見を捨て世を救ひ人の爲になることを第一となせること、及び三教各長所あり偏廢すべからざることを論述せる者なり。

り。所收本は寶曆六年の刻本に據る。

著者鶴臺は名は長愷、通稱は彌八、鶴臺と號す。長門の人なり。初め業を小倉尙齋に受け、後山縣周南、及び服部南郭に従學す。又醫方に通じ、佛典を窺ひ、旁ら筆札を善くす。長門藩に仕へて祭酒となれり。安永二年一月歿す、年六十五。著す所、長門癸申問槎、鶴臺遺稿、鶴臺漫筆等あり。

管 仲 孟 子 論 一卷 松村九山著

本書は管仲孟子の爲にその冤を辨せるもの。即ち管仲の九合一匡の仁徳を美し、（論語の如其仁を其の仁の如しと訓じ、管仲位なしと難も、能く桓公をして仁を行はしむ、是れ仲自ら仁を行ふと同じとの意なりと解せり。）孟子に對する太宰春臺の非難を反駁せり。享和三年皆川淇園の序あり。所收本は文化十年の刻本に據る。

著者九山は名は良猷、字は孔凱、栖雲と稱し、九山と號す。越前の人なり。大野藩に仕へて儒醫たり。文政五年五月歿す、年八十。著す所、論語古訓餘義、義臣解難、天民耦語、唐宋詩論、藝園鉅秀、九山遺稿等あり。

朱 王 學 辨 一卷 二山時習堂著

本書は問答躰に王學の説を擧げて之を排撃し、朱子學の中正至當なるを論斷せるものなり。寛文十一

年（四十九歳）の著なり。所收本は刻本に據る。

著者時習堂は名は義長、字は伯養、彌三郎と稱し、時習堂と號す。石見の人なり。少くして江戸に來り、壯なるに及び中川侯に仕ふ。幾くもなくして辭し去り、専ら學問を事とす。初め釋老を好み、又王陽明の學を奉せしが、終に朱子學に歸す。寶永六年八月歿す。年八十七。著す所、論語精義、良知要旨、ここの葉ぐさ等あり。

啓蒙辨 一卷 寫本 源敏通編

本書は垂加翁の神道及び道義に就て、竹内式部と三宅尙齋及び久米訂齋との間に行はれし往復問答の文書を纂輯せるものなり。所收本は帝國圖書館所藏本に據る。

封建論 一卷 寫本 伊藤鳳山著

本書は明治初年の當時、封建の舊制度を謳歌する者ありしに對して、統制對外の大策、及び當時の狀勢に照して、郡縣制の封建制に優れる所以を詳論せる者なり。所收本は前嶋懸次郎氏所藏本に據る。著者鳳山の略傳は、本叢書續々編第一冊解説部の例言に見えたり。

士大夫節儉論 一卷 龍草廬著

本書は士大夫の守るべき節儉の要目二十二條を掲げて、一一之に説明を加へたるもの。而して卷末に

要務は只徳を本となすにあるのみと説く、著者の意の在る所を観るべし。所收本は寛政三年（七十八歳）の刻本に據る。

著者草廬は名は公美、字は君玉、通稱は彦二郎、草廬、竹隱、鳳鳴等の諸號あり。山城の人なり。徂徠春臺等の學を喜び、後宇野明霞に従學し、遂に儒となり、京師に帷を垂る。草廬才思秀麗、詩を善くし、和學を好み、兵學に達す。彦根侯の文學となり、寛政四年二月歿す。年七十九。著す所、名詮、典詮、論語詮、詩文集等二十餘種あり。

貧政附雜文 一卷 寫本 勝田半齋著

本書は著者自身の安貧知足の生活法を語録躰に叙述せるものにして、著者二十五歳の時の著に係り、文化十一年古賀侗菴の跋あり。本書も二三餘隨筆と題し、貧政及雜文を收む。今また雜文を並收したり。所收本は前嶋懸次郎氏所藏本に據る。

著者半齋は名は獻、字は成信、半齋と號す。幕臣にして昌平校の事務吏たり。歿年未詳。

傳疑小史 一卷 中井履軒著

本書は戰國以來徳川氏初期に至る史談を、武篇以下九篇に分つて類抄せるもの。而して豊太閤、徳川

家康公に關するもの多きを占む。文化元年（七十三歳）の著に屬す。所收本は嘉永年間の刻本に據る。

著者履軒の略傳は、本叢書正編解説部第二の例言に見えたり。

寤 眠 錄 一卷 中村栗園著

本書は近古に於ける、忠孝節義武勇智略の美談を輯録せる者。書名は世人の昏睡を覺醒せしむる意なりといふ。所收本は慶應三年の刻本に據る。

著者栗園は名は和、字は子臧、栗園又は半仙子と號す。豊前の人なり。業を帆足萬里に受け、洛閩の學を修む。上國に遊びて諸名士と交り、學愈々進む。水口侯の儒員となり、維新の際、主君を輔翼して王事に勤む。明治十四年十二月歿す、年七十六。著す所、孝經翼、日本智囊、栗園文鈔、栗園詩稿等あり。

東 征 稿 一卷 中井竹山著

本書は安永元年四月（四十三歳）京都より江戸に至りし時の旅中の詩を録せるものなり。所收本は嘉永六年の刻本に據る。

著者竹山の略傳は、本叢書正編第四冊論辨部の例言に見えたり。

西 上 記 一卷 中井竹山著

本書は安永元年八月、江戸より郷里大坂に歸れる二十六日間の記行文なり。所收本は東征稿に同じ。

報 桑 錄 二卷 齋藤竹堂著

本書は天保十一年（二十六歳）八月一日より同年十一月三十日に至る、四ヶ月間の西遊中の文詩を録せるもの。經歷する所三十州に涉り、山川都邑名所故蹟及び遭ふ所の人物等、巨細記述せり。所收本は初刻本に據る。

著者竹堂の略傳は、本叢書續編第二冊解説部第一及雜部の例言に見えたり。

俟 采 擇 錄 一卷 久坂江月齋著

本書は忠臣烈士孝女等の言行を録せるものなるが、幕末志士の記事多きを占む。所收本は刻本に據る。

著者江月齋は名は通武、字は實甫、通稱は玄瑞、後義助と改む。江月齋又秋湖と號す。長州の人なり。業を吉田松陰に受け、後芳野金陵の門に學び、詩文を善くす。又藩校に入り洋書を學び、業成りて本藩に仕ふ。外人の跋扈を憤り、同志と謀りて馬關に碇泊中の洋艦を襲撃して大功あり。朝廷賞し

て參議に列せしむ。後倒幕をはかりて果さず、元治元年七月十九日、京師に戰死す、年二十六。

文論詩論 二卷 太宰春臺著

文論は文の意義沿革より、修辭の道、四法三要等を解説し、古文辭を痛撃せるもの。又文論の附録には李王等の文疵三十一則を擧げて排斥せり。元文四年（六十歳）の著なり。又詩論は詩の起原沿革、唐詩明詩の比較批評等より、明人の擬作の詩を排斥せるもの。詩論の附録は、徂徠の選集に係る唐後詩に就て、李于鱗の七絶の瑕疵を指摘せる者なり。所收本は文化二年の刻本に據る。著者春臺の略傳は、本叢書正編第三冊史傳書簡部の例言に見えたり。

夜航餘話 二卷 津坂東陽著

本書は前著夜航詩話の續編と稱すべく、詩話百十二條を録したる者なり。所收本は刻本に據る。著者東陽は名は孝綽、字は君裕、通稱は常之進、東陽は其號なり。伊勢の人なり。刻苦勉勵して經業を攻め、常師なし。遂に古學を以て一家を成す。津藩の文學たり。文政八年八月歿す、年七十。著す所、孝經發揮、古詩大觀、杜律詳解、聽訟彙案等三十餘種あり。

詩史 顰 一卷 市野迷庵著

本書は南北朝の諸將十五人の事跡を詩に詠じ、且一一評論を附し、以て忠邪を明かにし、大義名分を正せる者なり。寛政四年（二十八歳）の著に屬す。所收本は明治年間の刻本に據る。著者迷庵は名は光彦、字は俊卿、迷庵は其號なり。學を黒澤雉岡に受け、宋學を奉せしが、後力を古書の校勘に盡せり。文政九年八月歿す、年六十二。著す所、正平本論語集解割記、大永本論語集解割記、讀書指南、迷庵遺稿等あり。

律詩天眼 一卷 熊坂臺州著

本書は律詩を觀察する方法を述べたるもの。而して附言七則には前輩の説を擧げ、餘論十則には近世詩家の流弊を痛論せり。天明八年（五十歳）の著なり。所收本は寛政十年の刻本に據る。著者臺州は名は邦、字は子彦、通稱は宇右衛門、臺州、曳尾堂等の號あり。陸奥の人なり。松崎觀海に學ぶ。享和三年三月歿す、年六十五。著す所、論語徵補、古文尙書直解、道術要論等二十餘種あり。

學問所創置心得書 一卷 寫本 佐藤一齋著

本書は侯國の學校設立に就て、教學の主旨、教科目、試業方法、必備書目等の考案を記したるものなり。天保三年六月（六十一歳）の述作に係れり。所收本は松雲堂主野田文之助氏所藏本に據る。

著者一齋の畧傳は、本叢書正編第三冊史傳書簡部の例言に見えたり。

湖亭涉筆序

通古今。博聞見。必於史。而世之薦紳先生。常苦史學之難。何也。夫史自歷代王朝。紀傳編年之籍。至偏記小錄。閭胥之藏。極爲簡帙浩繁。不易窮詰。其爛然爲辭者。蔓衍於蘭臺石渠。圖書之府。其犁然爲事者。盤錯於上下數百千載之間。今廼蒐獵而綜核之。非必得彊幹絕倫之人。假以歲月之久。莫之能焉。若夫汰精金於流沙。探玄珠於罔象。目營心匠。旁取荒逸幽眇之言。鼓吹之。陶鎔之。抒爲詞賦。播爲論說。此必藉蓄積之富。肆斡旋之力。恢恢乎其有餘地者邪。吾友安積君老圃其人也。君蚤仕水戶。以博史見稱。自西山公時。橐筆直史館。總裁本府修撰事。遂以功闕授右職。至今屹爲士林之望。君旣超擢。猶以今職兼領脩史事。凡館下之諸生。遇有疑難。輒就諮決。而褒貶是非。待於序論者。舉皆資其文。僉頤然仰成於君。而君以高邁之年。矍鑠乎其間。赴窾應節。利刃不鈍。歷三十年。若新發於鏘。今歲春。君因吾甥小池友賢。以其所著湖亭涉筆四卷。伴來觀余。且使言曰。吾公署餘日。讀史每遇奇事僻語。輒標揭而品論之。不覺積累至此。顧歲月所得。欲棄之。亦有似雞肋者。於是合採其餘所手疏。并集錄之。臚列成編。友人讀而愛之。皆請刊行以廣其傳。吾初志方欲自備遺忘。且貽諸家庭。以授童蒙。非敢務觀美。

求表見於世也。然書中有文恭遺事，晦沒不傳。良可惜也。今傳於世，使人觀之。於吾心得不一擇然。況此書亦可託遺事而不朽者乎。遂許之。吾子為我擇數語，以弁卷端，亦剖闕氏之意也。余得其書而讀之數日。既卒業。迺謂友賢曰。此崑山之片玉耳。其於君之史學，不足觀大全。而又非以余之文辭軒輊者。徒為喋喋多言，以損君謙挹之意。將焉用之。雖然。余有二說。請為君言之。易之九卦。稱小而辨物。詩之國風。譏美而無度。吾取焉以為評隲諸子之法。嘗論古今稗史小說。有小而辨物者。有美而無度者。小而辨物。如短刀曲削。雖小矣。利於斷物也。美而無度。如金弓玉矢。雖美矣。無當於用也。隋唐以來。諸家記事纂言。亦為當時肄業所及。而其書存筌蹄於獲魚兔之後。雖不可與命意立言者同倫。然剖疑解難。以資多聞。亦小而辨物者也。至於近世材子。多好著述。聘巧舞文。擬古作者。率皆以荒唐無根之辭。飾堅白異同之說。鉅卷大冊。雖多亦奚以為。豈非所謂美而無度者乎。今是編不獨鈞奇索隱。使人愛玩。而考據的確。辭理俱勝。有辨物之可稱。無虛美之可譏。亦善志也。夫聚衆狐之腋以為裘。固為希世之珍。雖扁輪於篋笥中。不要千金之價。然世之好奇者。將聞其美而購求之。欲秘而不出。其可得乎。今此書一行於世。世將愛玩而嘆美之不暇。豈特為狐白之裘哉。君其無多讓焉。

享保十二年歲次丁未春三月十五日

鳩巢老人室直清序

序

讀經不依傳注。自古推為上等識見。經且如此。況於史乎。史除三史外無注。唯裴松之注三國志博采群說。以補陳壽之闕略。徐無黨注五代史。不規規於訓詁。發揮義例。裨益本史。二子之注史為不虛作。其可少哉。資治通鑑文義平易。不假注解而自明。胡三省作音注。正史炤之誤。辨司馬康之誣。纖悉備矣。至於成敗利鈍之機。賢愚邪正之分。或下冷語。或著數十言。議論精覈。無復餘蘊矣。綱目書法發明。雖議論剴切。頗有傷於苛酷者。設使其人面聞之。必有辭焉。豈心服哉。胡氏之論則不然。審其事實。度其時勢。如與其人相對。諭告婉順。引而歸之於正也。蓋當宋元革命之際。封疆日蹙。志士扼腕腐心之秋也。故遇前朝事迹。適與時事相類者。必三復致意焉。姑舉一二。餘可概見。周郎上疏文章。言宮闈之侈麗。則曰。嗚呼。我宋之將士。其習俗亦如此。吾是以悲二宋之一轍也。韓擒虎宵濟采石。守者皆醉。遂克之。則曰。咸淳甲戌十一月。沙武口之事。亦猶此。後晉出帝降契丹。李太后上表。稱新婦李氏妾。則曰。臣妾之辱。惟晉宋為然。嗚呼痛哉。南唐李景達遙為壽州聲援。擁兵五萬。無決戰意。則曰。嗚呼。比年襄陽之陷。得非援兵不進之罪。當時目擊身歷。滄桑之感。不能自已。其縫綵於國事。可推而知也。其餘論信陵君為縮

高縞素。班超通西域。大學諸生。互相標榜。曹操料袁尚。資融張軌。威著西土。姚泓非撥亂才。憲宗罷太子侍讀韋綬。周德威失榆關之險。楊承勳囚父歸命。馮導李愚盧導之優劣。皆中肯綮。其於君臣父子之間。與廢盛衰之迹。可謂深切著明矣。是豈可以凡書注釋觀邪。覺承乏館職。與修史書。懵然弗知所措。涉獵諸史。依倣其躡裁。而鞅掌蠶午。日不暇給。故讀通鑑。粗志治亂之綱要。以為筆削之資。而於胡氏之音注。不能割之於懷。殆有類乎劉義真所謂性情所得。未能忘言於悟賞者焉。性又鹵莽善忘。隨得抄錄。附以己見。盈積篋笥。徒供蠹魚。長夏炎蒸。兒輩展之暴涼。乃取而閱之。則得於通鑑者什七八。得於諸史者僅二三。旁及稗乘叢說。釐正成編。名曰湖亭涉筆。鳩巢先生序而獎之。不幾於昌歎之嗜乎。夫穎邁特達之士。傳注且不經意。而況於通鑑音注乎。其志趣之汗下。不可自足於此而不奮發。然胡氏注玄宗立表南北候晷極曰。溫公作通鑑不特紀治亂之迹而已。至于禮樂歷數。天文地理。尤致其詳。讀通鑑者。如飲河之鼠。各充其量而已。覺老矣。雖欲自奮。庸能及乎。鼯鼠伎倆。不過如是而已。

享保十二年丁未之春

水戶府 澹泊齋安積覺叙

湖亭涉筆目次

卷之一

春華秋實	一	器識才藝	一
嗽欲谷尙婢婢	二	代北儒學	三
許魯齋劉靜修	四	三楊	四
吾戴吾頭來	五	夫已氏	五
虞箴	五	得隴望蜀	六
伯有嗜酒	六	全用成語	六
按問水神	六	菟裘	七
持	七	興廢	七
莒婦人	八	昭烈上諡獻帝	八
爾欲吳王我	九	豺狼狐狸	九
王沈	九	司馬師	九

陳騫辛毗	一〇	檀道濟	一〇
朱桓	一一	腹中鱗甲	一一
三國志 十四事	一一	三國典略	一八
太郎二郎	一八	太后攝政	一九
二聖	一九	聖人	二〇
新唐書 十事	二〇	奉天之詔	二三
銅山大賊	二四	裴行儉	二五
高力士	二五	李鄴侯	二六
杜牧之	二七	馮道	二八
張承業	二九	李存審	二九
卷之二			
司馬溫公 五事	三一	避諱用之字	三三
四皓	三三	五代史闕文	三四
魏博牙兵	三五	河朔三鎮	三六
宋三鎮	三七	阻水布陣	三八

戰鳥圻	三八	據守失險	三九
螳螂黃雀	三九	段匹碑	四一
慕容恪	四一	王猛	四二
崔浩	四二	源賀	四三
高澄	四三	韋孝寬	四四
朱异許敬宗	四四	安祿山	四五
史思明	四六	家事	四七
官家大家	四七	謝道蘊	四八
勾當內侍	四九	李克用訟冤	四九
真假	四九	玉體	五〇
豆盧	五〇	杜詩	五〇
大言無實	五一	我甲在心	五一
居士	五二	四六 三事	五二
酒顛童子	五四	尊勝隊	五四
滕元發	五五	陳簡齋	五六

霍光傳	五六	洪忠宣	五七
滕茂實	五七	汪水雲	五八
謝壘山	五八	陶南村二事	五九
冬青行	六〇	林景熙	六〇
郝文忠	六二	余忠宣	六三
卷之三			
內道場	六五	奉爲	六七
法王	六七	總持	六七
不空三藏	六八	三門	六八
禪學二事	六九	知幾	七一
龜山論唐亂	七一	夫從妻諡	七一
若鞮	七二	復讐	七二
守成	七三	臥護	七三
文吏	七三	丙吉問牛喘	七四
子雲論漢臣	七五	張禹	七五

傅介子斬樓蘭王	七六	何奴闕氏	七七
石勒論光武	七七	郭伋張佚	七八
趙熹	七八	馬伏波	七九
嚴子陵	七九	賣官	八〇
政論	八〇	溫公論東漢	八一
陽平橋詩	八一	司馬氏篡魏	八一
力戰持重	八二	石頭城謠	八二
縱敵自資	八三	僞稱使者	八三
將帥爭功	八四	確鬪	八五
馭臣以術	八六	得失自我	八六
盾鼻磨墨	八七	杜弼檄	八七
梁元帝	八八	戒石銘	八八
聶夷中詩	八九	清慎勤	九〇
天定勝人	九〇	南渡奏議	九一
夏二子傳	九二	因敗得勝	九二

飢鷹	九二	一體	九三
平章事	九三	稱人以坊里	九三
版授	九四	中謝	九四
女侍中	九四	牛羊	九五
韓瞳眼	九五	碑文書年號	九六
爲法自弊	九六	有罪改姓氏	九六
劉夫人	九七	王淑妃	九八
帝王多子	九八	顧憲成	九九
魏忠賢	一〇〇	高攀龍周順昌	一〇一
鹽國魯王	一〇一		

卷之四

○俗語出典

一〇三

新錢。休息。祈禱。停止。生類。名馬。寶劍。惡馬。拜賀。堪忍。連判。還俗。運漕。落髮。布施。下髮。武藝。藝能。金字。乘具。管領。供養。正本。修理。評議。御前。人別。智略。一人當千。名目。宥免。天下第一。上手。木樣。連名。連署。連名狀。別紙。本意。宿意。本

望。私宅。弱年。平愈。墨迹。手迹。公用。要用。雜用。先日。發足。路次。違背。臨月。大慶。感悅。支配。遺骨。粉骨。材木。傳馬。行列。珍物。面談。勘當。誓文。誓狀。誓書。批判。乳母子。樂人。要人。役人。白徒。土民。近例。在城。同類。辨口。向後。進上。火事。板本。儀式。口傳。

握汗	一〇七	因緣	一〇七
將無同	一〇八	從父昆弟	一〇八
叔祖	一〇九	養息	一〇九
徵君	一〇九	佛屋	一一〇
百六公	一一〇	二建	一一〇
獅子舞	一一〇	妥貼	一一一
砥糠	一一一	眞價	一一一
漿酒糞肉	一一一	頭子	一一二
過所	一一二	招提蘭若	一一三
申上	一一三	委曲	一一三
京都	一一四	穀杖	一一四

芳宜宴	一一四	納隍	一一四
腦子	一一五	御筆	一一五
鬼脉	一一五	蘭錡	一一六
陸	一一六	媼	一一六
蝸	一一六	釵	一一六
竺	一一七	去	一一七
泊	一一七	阿字入聲	一一七
欺字訓陵	一一八	昆布	一一八
茶	一一八	火飯	一一九
蕎麥	一一九	○老圃詩癡	一二〇
○朱文恭遺事	一二七		

(以上)

湖亭涉筆卷之一

澹泊齋安積覺 著

春華秋實

魏劉楨諫陳思王曹植曰。君侯採庶子之春華。忘家丞之秋實。家丞邢顒。庶子楨也。顒能防閑以禮。無所屈撓。故不合於植。楨美文辭。所謂建安七子之一。故為植所親愛。而所言如此。陳宣帝太子叔寶。欲以江總為詹事。吏部尚書孔奐曰。江有潘陸之華。而無園綺之實。太子怨之。自言於帝。以總為詹事。其後君臣酣飲。賦詩達旦。陷君於辱井者總也。楨與奐。華實之論所見畧同。而楨為庶子。自貶以揚人之善。尤可貴也。

器識才藝

魏吏部尚書盧毓。論人及選舉。皆先性行而後言才。隋吏部尚書牛弘。選舉先德行而後文才。務在審慎。唐裴行儉。論王楊盧駱曰。士之致遠。當先器識而後才藝。夫無行而有才。所謂華而無實。

者也。以之進用。卒誤邦家者。歷世相踵。蜀丞相掾姚弋仲。並進文武之士。諸葛孔明稱之曰。忠益者。莫大於進人。進人者。各務其所尚。今姚掾並存剛柔。以廣文武之用。可謂博雅矣。世之所謂博雅。多稱博洽文雅之士。武侯所謂博雅。文武相濟之謂也。陳壽稱其循名責實。虛偽不齒。良有以也。行儉之言。小學亦採之。宋宰相蘇頌議貢舉。先行實而後文藝。劉摯教子孫。先行實。後文藝。每曰士當以器識為先。一號為文人。無足觀矣。皆行儉之意也。

噉欲谷尙婢婢

資治通鑑唐玄宗開元初。突厥牙官噉欲谷年七十餘多智畧。國人信服。毗伽可汗引為謀主。毗伽欲築城立寺觀。噉欲谷曰不可。突厥人徒稀少。不及唐家百分之一。所以能與為敵者。正以逐水草居處無常。射獵為業。人皆習武。彊則進兵抄掠。弱則竄伏山林。唐兵雖多。無所施用。若築城而居。變更舊俗。一朝失利。必為所滅。釋老之法。教人仁弱。非用武爭勝之術。不可崇也。毗伽乃止。偉哉噉欲谷之見也。突厥即古匈奴地。逐水草。業射獵。人皆習武。此其所以為生。而能與中國抗衡也。後世遼金元之興。皆莫不由此。而釋老教人仁弱。非用武之術。梁武帝宋徽宗之亡社稷。皆可鑑焉。世謂儒釋道為三教。儒專言仁。然則儒亦非用武之道歟。曰不然。經傳所載聖賢之法。炳若日星。今不復言。請學夷狄之氣類以明之。武宗朝吐蕃尙婢婢好讀書。不樂仕進。國人敬之。彝泰替普彊起之為相。婢婢寬厚沈勇有謀畧。訓練士卒多精勇。討擊使論恐熱欲篡國。

大舉兵擊之。婢婢犒以金帛牛酒。致書以驕之曰。婢婢資性愚癡。惟嗜讀書。惟求退居。相公若賜以骸骨聽歸田里。乃平生之素願也。恐熱得書喜。徧示諸將曰。婢婢惟把書卷。安知用兵。遂引兵歸。其後婢婢設謀擊之。恐熱大敗。單騎遁去。蓋婢婢所讀非釋老之書。故其功效如此。宋虞允文采石之捷。劉錡執允文手曰。朝廷用兵三十年。一技不施而大功乃出一儒生。吾輩媿死。此亦可以證為用武之道矣。然此皆姑舉事功之末。其迹之麤者。以曉世俗之紛紜致疑者耳。若夫聖賢之道。治國平天下之要。則非此之謂也。

代北儒學

元魏道武帝始稱王。從崔宏之議。置五經博士。增國子太學生員。問博士李先曰。天下何物最善。可以益人神智。對曰。莫若書籍。王曰。書籍凡有幾何。如何可集。對曰。自書契以來。世有滋益。以至于今。不可勝計。苟人主所好。何憂不集。王從之。命郡縣大索書籍。悉送平城。道武專以戎馬立基。而崇文如此。太武朝常爽教授七百餘人。立賞罰之科。由是魏之儒風。始振代北。傳至孝文。尤崇儒術。而孝文非儒緩之主。有齊力。少善射。長而不復射獵。手不釋卷。治道可觀。遷都洛陽。文物盛興。南朝人主。皆所不及也。遼太祖太宗皆有雄傑之姿。以晉高祖稱臣于遼。不血刃而得燕雲十六州。收華人而用之。則其耳目所習。既與代北不同。然得張礪韓延徽文學方振。金太祖起于女直。未有文字。始使谷神製國字。粘沒喝攻宋。陷集慶府。軍士有欲發

孔子墓者。粘沒喝問其通事高慶裔曰。孔子何人。曰。古之大聖人。粘沒喝曰。大聖人墓安可發。遂殺軍士。粘罕不知孔子。而知尊聖人。可見天理之存乎人心者。自然有不容泯滅者。太宗嗣位。華人韓企先等在左右。文學之士。稍見拔擢。是後科舉得人。才俊輩出。世宗大定之治。號為小堯舜。莫非右文之效也。若元太宗建太極書院于燕京。收集伊洛諸書。尊尚濂溪之學。以姚樞趙復為之師範。道學盛行於河朔。則立國規模。又非元魏遼金之所能及也。

許魯齋劉靜修

元世祖召許魯齋。一聘而起。曰。不如此則道不行。劉靜修召不起。曰。不如此則道不尊。至今論者紛紜不已。蓋以魯齋大儒。得道統之傳也。然其言竊有所疑。顏子陋巷箪瓢。不改其樂。君子何患乎道之不行哉。孔子曰。道之將行也。其命也與。道之將廢也。其命也與。孟子曰。枉己者未有能直人者也。夫行與尊。以道自任者。所當審擇。而處與出。固十君子之大節。魯齋道大。雖非後生晚輩所可擬議。而以世祖之時為天下有道而殉之乎。抑以道殉乎人乎。二者必居其一。蓋非其招而往。與不由其道而往者。皆孟子之所惡。魯齋欲以孔孟之道。格君心之非。難矣哉。後之君子。不幸而居革命之世。寧為靜修而不為魯齋。則庶乎能得出處之正矣。

三楊

晉武帝楊皇后父駿。及弟珧濟。交通請謁。勢傾內外。時人謂之三楊。唐楊凌與兄憑凝。踵進士第。

時號三楊。明楊士奇楊溥。亦稱三楊。晉三楊招權藉勢。終為賈后所殺。唐三楊特以文士著名耳。明三楊歷事三朝。銓總朝政。多所毗輔。事業文章。又過於唐三楊矣。鄧邠代醉編舉李固杜喬李雲杜秉李膺杜密李白杜甫為四李杜。按宋理宗時。李韶杜範並在禮部。二人廉直。中外稱為李杜。亦可謂曠世而齊名也。

吾戴吾頭來

柳文段太尉逸事狀。殺一老卒。何甲也。吾戴吾頭來矣。邵氏聞見錄曰。宋景文修新史。曰吾戴頭來矣。去一吾字。便不成語。吾戴頭來者。果何人之頭邪。通鑑亦作吾戴吾頭來。伯溫之譏新史當矣。按左傳桓六年。鬬伯比言於楚子曰。我張吾三軍而被吾甲兵。柳文蓋有所本矣。

夫已氏

左傳文十四年。齊公子元。桓公子惠公。不順懿公之為政也。終不曰公。曰夫已氏。杜預注曰。猶言某甲。宋元凶劭將舉大事。與始興王濬往來書疏。常謂文帝為彼人。或曰其人。亦猶夫已氏之稱也。劭濬弑逆之罪。天地所不容。宋書立傳曰二凶。宜哉。

虞箴

襄四年。魏絳對晉悼公虞人之箴曰。獸臣司原。敢告僕夫。朱子釋詩文王篇。王之蓋臣。無念爾祖曰。蓋以戒王。而不敢斥言。猶所謂敢告僕夫云爾。即謂此也。張蘊古大寶箴。諍臣司直。敢

236261

告前疑 王有左輔右弼 前疑後丞 亦不敢斥尊 故云告前疑 句法全祖虞箴

得隴望蜀

漢光武詔岑彭等曰 人苦不知足 既得隴 復望蜀 魏武效其語曰 人苦無足 既得隴 復望蜀邪 然光武此語 似從左傳昭七年楚大宰遠啓疆何蜀之敢望語中來者

伯有嗜酒

襄三十年 鄭伯有嗜酒 子皙以駟氏之甲伐而焚之 伯有奔雍梁 醒而後知之 遂奔許 履中帝之為皇太子也 住吉仲皇子舉兵襲之 太子醉而寢 左右扶掖上馬而走 仲皇子焚宮 火通夕不滅 太子至河內殖生坂而醒 其事殆與伯有相類 唐李克用上源驛之變亦此比 而非得大雨震電之助 則克用幾不能免 周公作酒誥 衛武公戒耽樂 匹夫酗酒 必至喪軀 酣營之過 可不警哉

全用成語

文十三年 繞朝贈士會以策曰 子勿謂秦無人 吾謀適不用也 魏志于禁傳 吳虞翻謂禁曰 卿勿謂吳無人 吾謀適不用耳 通鑑元魏楊侃移梁曰 佗人有心 予付度之 勿謂秦無人也 王維送綦母潛詩 吾謀適不用 勿謂知音稀 襄三十年 周成愆勸靈王使殺王儋季之子括 王曰 童子何知 王勃滕王閣序曰 童子何知 皆用成語也

按問水神

後唐莊宗使魏王繼岌 莊宗子 伐蜀而克 繼岌遣押牙韓珙等 部送蜀珍貨金帛四十萬 浮江而下 荆南節度高季興殺珙等於峽口 盡掠取之 至明宗時 遣使詰之 對曰 珙等下峽 行數千里 欲知覆溺之故 自宜按問水神 此用左傳楚人答齊桓公問昭王南征不復之辭 而悖慢之甚 宜其觸明宗之怒而來問罪之師也

菟裘

南史陳陳暄嗜酒 復兄子秀書曰 速營糟丘 吾將老焉 此以文滑稽 不可以訓者也 通鑑楚王般之謀主高郁 與馬希聲 殷之子 有隙 謂所親曰 亟營西山 吾將歸老 獅子漸大 能咋人矣 希聲聞之怒 矯以殷命殺之 皆用隱公菟裘之語 而郁發言輕易 卒罹橫逆 豈非自取其禍歟

持

昭元年 鄭子羽謂子皮曰 子與子家持之 杜注曰 持之言無所取與 按子羽公孫揮 子皮罕虎 子家蔡公孫歸生也 列國大夫 皆譏楚公子圍 靈王設服離衛 而子皮子家之言 無所輕重 故子羽云然 今俗謂無勝負曰持 亦此義也

興廢

昭四年 司馬侯對晉平公曰 齊有仲孫之難而獲桓公 至今賴之 晉有里丕之難而獲文公 是以為盟主 漢路溫舒上宣帝尚德緩刑書曰 齊有無知之禍 而桓公以興 晉有驪姬之難 而文公用伯

蓋用女齊之語。而其意則里克不有廢也。君何以興之義也。秦苻堅伐燕滅之。燕舊臣高弼言于慕容垂曰。大王遭值連厄。棲集外邦。今雖家國傾覆。安知不為興運之始邪。亦里克之意也。

莒婦人

昭十九年。莒子奔紀鄆。齊高發使孫書伐之。初莒有婦人。莒子殺其夫。已為姦女婦。及老。託於紀鄆紡焉。以度而去之。及師至。則投諸外。或獻諸子占。子占使師夜縋而登。杜注曰。因紡纈連所紡以度城而藏之。以待外攻者。欲以報讎。子占孫書。陳無宇之子也。南唐樊若水舉進士不第。因謀歸宋。乃漁釣於采石江上。乘小舟。載絲繩其中。得江之廣狹。及太祖伐江南。詣闕上書。請造浮梁以濟師。太祖然之。若水請試舟。乃先試於石牌口。移置采石。不差尺寸。潘美因帥步兵渡江。若履平地。若水不必假莒婦人之智。而其所為則相類也。

昭烈上諡獻帝

漢獻帝建安二十五年。禪位於魏。魏封為山陽公。明年三月。魏黃初二年。蜀章武元年。蜀中傳言漢帝已遇害。於是漢中王發喪制服。諡曰孝感皇帝。此雖起于傳聞之誤。未崩而奉諡。古今一人而已。若南越王趙佗東越王餘善。並稱武帝。後周太祖冊命北漢主劉昺為大漢神武皇帝。皆非諡而生前所稱也。鶴林玉露載。左傳衛侯賜北宮喜諡曰貞子。賜析朱鉏諡曰成子。蓋生前豫賜之也。今考左傳靈公賜二人諡。而以齊氏之墓予之。杜注曰。皆死而賜諡及墓田。傳終言之。則非生前豫賜者。玉露誤矣。

爾欲吳王我

定十年。叔孫武叔圜人以劔過朝。公若曰。爾欲吳王我乎。胡澹庵上高宗封事曰。今者無故誘致虜使。以招諭江南為名。是欲臣妾我也。是欲劉豫我也。句法蓋祖此。通鑑晉安帝紀。王國寶曰。將曹爽我乎。亦公若之語意也。

豺狼狐狸

豺狼當道。不宜復問狐狸。本前漢孫寶故吏侯文對寶語。後漢張綱曰。豺狼當路。安問狐狸。魏杜襲曰。方今豺狼當路。而狐狸是先。蔣濟曰。虎狼當路。不治狐狸。先治大害。小害自己。皆用侯文語也。

王沈

魏王昶名其兄子。曰默。曰沈。名其子。曰渾。曰深。為書戒之。後皆有名。沈與裴秀。為高貴鄉公所重。謂秀為儒林丈人。沈為文籍先生。及帝欲討司馬昭。沈與王業。韓走告昭。遂有成濟車下之變。叔父之戒。人臣之義。一無所顧。甘心失身於司馬氏。而恬不知恥。文籍雖滿腹。不如一王經矣。姓氏錄曰。山田御方。魏司空王昶後也。據續日本紀。御方事文武元明二朝。豈渾深之裔耶。

司馬師

魏大將軍司馬師。三道伐吳。王昶母丘儉聞東軍敗。各燒屯走。朝議欲貶黜諸將。師曰。我不聽公休。以至於此。此我過也。諸將何罪。悉宥之。公休諸葛誕字也。習鑿齒論曰。司馬大將軍。引敗以為己過。過消而業隆。可謂智也。東關之敗。安東將軍司馬昭問僚屬曰。近日之事。誰任其咎。安東司馬王儀對曰。責在元帥。昭怒曰。司馬欲委罪孤邪。引出斬之。通鑑不載於魏紀。因書王哀事。併見晉紀。合而觀之。同時事也。師則引咎責躬。昭則逞忿濫殺。故王應麟謂昭之惡甚於師。然師之引咎。非出于誠。特欲取攬魏朝之人心。為移鼎之漸耳。究其心術。恐師之惡。更深于昭。鑿齒晉人。殆非公論。而曰業隆。曰智。大有劑量。

陳騫辛毗

魏劉曄諱尚書令陳騫。矯懼以告其子騫。騫曰。主上明帝明聖。大人大臣。今若不合。不過不作公耳。辛毗對其子傲曰。吾之立身。自有本末。就與劉孫不平。不過令吾不作三公耳。劉孫。劉放孫資。明帝時怙寵有權勢。毗以硬直名于魏朝。不負所言。騫阿附司馬氏。卒為佐命之臣。語言皆同。而制行迥異。何其言之不相副也。蓋二子之言。未免有計較之心。觀夫桓魋其如予何。臧氏之子。焉能使予不遇哉。聖賢安於義命之語。不啻霄壤矣。劉宋蔡興宗與顧凱之善。嫌其風節太峻。凱之引毗語對之。亦特立之士也。

檀道濟

吳孫峻將殺諸葛恪。與吳主亮謀。置酒請恪。恪將入之夜。精爽擾動。通夕不寐。劉宋謝晦與徐羨之傅亮謀廢少帝。夜邀檀道濟同宿。悚動不得眠。道濟就寢便熟。以此服之。恪之精爽擾動。天奪之魄。將死之徵也。晦之悚動不得眠。懼怯而失其常度也。若道濟者。便有過人之量。宋真宗在澶淵。使人覘寇萊公之舉動。就寢則鼾息如雷。帝意乃安。此亦有過人之量者也。

朱桓

吳鄱陽太守周魴。譎挑魏揚州牧曹休。吳王權以陸遜為大都督。以朱桓全琮為左右督以擊休。桓言於吳王。欲以萬兵扼休走路。乘勝長驅。進取壽春。割有淮南。以規許洛。吳王以問陸遜。遜以為不可。乃止。按此與蜀魏延欲以精兵五千出褒中。循秦嶺。直襲長安之計相同。武侯不從延計。史載其言。遜之言。史不載。無所考據。蓋明智之士。所見畧同。遜之不用桓言者。亦猶武侯不欲乘險僥倖。欲以萬全制勝之意也。

腹中鱗甲

武侯與蔣琬董允書曰。孝起前為吾說。正方腹中有鱗甲。鄉黨以為不可近。吾以為鱗甲但不當犯之耳。不圖復有蘇張之事。出於不意。孝起陳震字。正方李嚴字。嚴改名平。即為武侯所廢者。余謂腹中鱗甲。可對皮裏春秋。

三國志 十四事

魏志文帝紀。延康元年。漢建安二十五年。魏黃初元年。十一月。漢帝禪位。裴松之注。載獻帝傳禪代之事。符命圖讖。勸進再三。文帝固辭不敢當。皆虛文不足觀。謝少連季漢書。一概削去是也。其中有魏王侍中劉虞辛毗劉曄。尚書令桓階。尚書陳矯陳群等。陳符命之文。辛毗評弟。初事袁氏。後歸曹氏。直言讜論。為魏名臣。引裾之諫。尤為皎厲。而篡奪之間。亦至翊戴。蓋當時士習。知有魏而不知有漢也。困學紀聞載孫燭湖讀通鑑詩曰。清濁無心陳仲弓。圓機聊救漢諸公。末流不料兒孫誤。千古黃初佐命功。朱文公甚稱之。此譏陳群以太丘之孫而與勸進之列。語婉而旨深。宜為文公所稱也。

少帝紀。嘉平五年。追封故中郎將郭脩。按脩有刺費禕之功。故魏室厚加褒卹。詔中有脩於廣坐之中。手刃擊禕。勇過肅政。功逾介子。可謂殺身成仁。釋生取義之文。裴松之以為脩西州之男子耳。始獲于蜀。既不能抗節不辱于魏。又無食祿之責。不為時主所使。而無故規規焉。糜身于非所。義無所加。功無所立。此論甚當。蓋魏室之褒贈。即司馬氏之所為。而所以勸發來者。以弱敵國之謀也。朱子綱目大書盜殺大將軍費禕。其義始正。又通鑒及綱目。脩訛作循。通鑑漢姜維獲中郎將郭循下注。胡三省辨之詳矣。

文昭甄皇后傳。黃初元年十月。文帝踐阼。踐阼之後。山陽公奉二女以嬪于魏。按建安十八年。魏公操進三女憲節華於獻帝為貴人。中女立為皇后。即穆曹皇后也。至是獻帝嬪二女於魏。則獻帝之於

文帝。姊妹之夫而妻之父也。不知於禮為何如也。

任城王彰傳曰。太祖在長安召彰。彰自代過鄴。太子謂曰。卿新有功。今西見上。宜勿自伐。應對嘗若不足者。彰到。如太子言。歸功諸將。太祖喜。捋彰鬚曰。黃鬚兒竟太奇也。吳質傳裴注引郭頌世語曰。魏王嘗出征。世子及臨菑侯植。並送路側。植稱述功德。發言有章。左右屬目。王亦悅焉。世子悵然自失。吳質耳曰。王當行。流涕可也。及辭世子泣而拜。王及左右咸獻歎。於是皆以植辭多華而誠心不及也。噫文帝之教任城善矣。任城志氣慷慨。涿郡之戰。所向無前。卒能破走強胡。威名大振。使之於伐武帝之前。則不幾啓嫌隙之端乎。歸功諸將。卑謙自牧。此卻伯范叔對晉侯之意。而可謂善處功名之際矣。然文帝之為此言。亦用吳質之教。流涕而拜。應對常若不足。俱一拙也。其為拙。巧之至也。果能拙者也哉。夫武帝之機警權畧。以巧應之。立見其敗。故反其用而示之拙。豈為八子之道哉。其為任城謀也則忠。其自為謀也則過。孰謂武帝之料敵如神。而反不能料其子哉。蓋大巧似拙。而明有所蔽。苟非誠心。巧拙一也。如此用拙。不如用巧之為愈也。

袁紹傳。裴注引英雄記曰。是時年號初平。紹字本初。自以為年與字合。必能克平禍亂。後白河朝。藤原信賴之亂。平重盛勵士卒曰。年號平治。地曰平安。我為平氏。此三者協吉。何憂不克。二事正相類。而袁紹割據青冀。朶願神器。重盛激勵將士。敵王所懼。其所設心。則大

不同矣。

臧洪傳。太祖圍張超於雍丘。超曰。惟臧洪當來救吾。洪從袁紹請兵。將赴其難。紹不與。雍丘遂潰。超自殺。洪由是怨紹。絕不與通。紹與兵圍之。力屈被執。紹殺之。徐衆評曰。洪本不當就袁請兵。又不當還為怨讎。為洪計者。苟力所不足。可奔他國以求赴救。若謀力未展以待事機。則宜徐更觀變。効死于超。何必誓守窮城。而無變通。身死殄民。功名不立。良可哀也。余竊謂此論非是。蓋子源洪字。天下義士。當時固已稱之。特所遭不幸耳。當海內糜沸之時。朝袁暮曹。舉世皆是。而洪特敦故舊之義。不以生死負張超。獨守孤城。外援不至。力屈被執。臨死不撓。曠日責紹。千載之下。凜凜猶有生氣。能使城中男女七八千人相枕而死。莫有離叛。固奇矣。能使陳容同日而死。又奇矣。能使司馬二人出求救于呂布。比還城陷。皆赴敵死。益奇矣。苟非撫養有素。義氣感人。則焉能致之哉。其答陳琳書。每登城勒兵。望主人之旗鼓。感故友之周旋。主人謂袁紹。故友謂陳琳。琳洪之邑人。故紹使琳以書喻之。撫弦擲矢。不覺流涕之覆面。至今讀者淒楚。至如行矣孔璋。吾子託身於盟主。臧洪策名于長安。子謂余身死而名滅。僕亦笑子生而無聞焉。陳琳讀之。能無媿乎。要之臧洪漢末烈士。非以權略變通自濟者。晉韓延之復書宋武帝曰。當與臧洪遊於地下。柳子厚南霽雲廟碑曰。烈士抗詞。痛臧洪之同日。觀之則徐衆之評。是非自見矣。宋沈攸之舉兵敗死。邊榮感攸之之恩。歡笑赴死。榮客程邕之。乞先榮而死。皆為張荷兒所殺。此又可謂與臧洪

同日者也。

賈詡傳。袁紹圍太祖于官渡。太祖糧方盡。問詡計焉出。詡曰。公明勝紹。勇勝紹。用人勝紹。決機勝紹。有此四勝。而半年不定者。但顧萬全故也。苟或傳。太祖怒袁紹書辭悖慢。問或曰。今將討不義而力不敵。何如。或陳四勝曰。公度勝。謀勝。武勝。德勝。郭嘉傳表注引傅子曰。太祖謂嘉曰。本初數為不遜。吾欲討之。力不敵。如何。嘉陳十勝曰。道勝。義勝。治勝。度勝。謀勝。德勝。仁勝。明勝。文勝。武勝。此三人所言。不謀而同。豈昭烈所謂天下智謀之士。所見略同者歟。抑史筆緣飾。遷就其辭乎。通鑑唯載郭嘉之言。不載賈詡苟或之語。必有一定之見。然魏武亦謂諸將曰。吾知紹之為人。志大而智小。色厲而膽薄。忌克而少威。兵多而分畫不明。將驕而政令不壹。土地雖廣。糧食雖豐。適足以為吾奉也。此即四勝十勝之說。而知彼知己。明確透徹。目中已無袁紹可知矣。江淹為齊高帝。述五勝五敗。此亦三國諸子之流耶。袁煥傳。煥卒。太祖為之流涕。賜穀二千斛。一教以太倉穀千斛。賜郎中令之家。一教以垣下穀千斛。與曜卿煥字家。外不解其意。教曰。以太倉穀者官法也。以垣下穀者親舊也。後漢蘇章謂故人清河太守曰。今夕蘇孺文與故人飲者。私恩也。明日冀州刺史案事者。公法也。魏武所謂官法親舊。亦此意也。諺云。官不容針。私通軍馬。雖非公正之道。自古既有此言。後周世宗時。李守貞客朱元仕於南唐。樞密使查文徽妻之以女。後以恃功偃蹇。後主將奪其兵。元怒而降周。後主械其妻。

欲戮之。文徵方執政。表乞其命。後主批云。只斬朱元妻。不殺查家女。竟斬于市。後主此舉差可觀。不以私恩廢公法。亦蘇章之遺意也。

張遼傳。遼與樂進李典等。將七千餘人屯合肥。太祖征張魯。教與護軍薛悌。署函邊曰。賊至乃發。俄而孫權率十萬衆圍合肥。乃共發教。教曰。若孫權至者。張李將軍出戰。樂將軍守。護軍勿得與戰。遼典出戰。遂破權。通鑑宋武帝使益州刺史朱齡石伐蜀譙縱。指授方略。別有函書。封付齡石。署函邊曰。至白帝乃開。齡石等至白帝發函。書曰。衆軍悉從外水取成都。臧熹從中水取廣漢。老弱乘高艦。從內水向黃虎。於是諸車倍道兼行。果克成都。此與魏武密教相類。宋武算定謀決。特慮聲勢先馳。故爲密教。使之速赴。此猶易耳。若魏武者。料敵未至。決機未萌。張遼能解其旨。果以八百之兵。摧十萬之吳軍。孫盛所謂事至而應。若合符契者。比之宋武。尤爲難也。

典韋傳。太祖討呂布於濮陽。布身自搏戰。相持急。韋手持十餘戟。大呼起。所抵無不應手倒者。按典韋膂力過人。壯武勇傑。軍中有帳下壯士有典君。提一雙戟八十斤之語。然手持十餘戟。則力雖能舉。不可運用。必無此理。通鑑去十餘二字。良是。

華歆傳。裴注引華嶠譜敘曰。文帝受禪。朝臣並受爵位。歆以形色忤時。徒爲司徒。而不進爵。文帝久不釋。以問尚書令陳羣曰。我應天受禪。百辟羣后。莫不入人悅喜。形于聲色。而相國及

公。獨有不怡者何也。群起離席長跪曰。臣與相國。華歆曾臣漢朝。心雖悅喜。義形其色。亦懼陛下實應且憎。帝大悅。遂重異之。按陳羣當時名臣。傳稱在朝無適無莫。惟仗名義。不以非道假入。袁子稱其長者。而心雖悅喜。義形其色。即色厲而內在者。至於陛下實應且憎。則患得患失。鄙夫之態。孰謂長文而爲此言哉。蓋爲佐命之臣。則喪失操守。一至此乎。本傳所稱。未可盡信。李翰蒙求亦載盛容之事。而無實應且憎之語。豈爲長者諱耶。孫資傳。資對明帝曰。武皇帝聖於用兵。察蜀賊棲於山巖。視吳虜竄於江湖。皆撓而避之。魏畧文帝罷征吳蜀詔曰。今將休息棲備高山。沈權九淵。語皆夸誕。猶南北朝互稱高夷索虜。蓋蜀依山。吳阻水。故魏人之言如此。

諸葛亮傳。裴注引漢晉春秋。載後出師表曰。此表亮集所無。出張儼默記。儼吳大鴻臚。作默記。關羽傳。裴注引江表傳曰。羽好左氏傳。諷誦略皆上口。夫侯之精忠神勇。至今牧豎樵童亦知其名。而孰謂其能讀書哉。宋史岳飛傳贊。史稱關雲長通春秋左氏學。然未嘗見其文章。正謂此也。劉氏鴻書載關壯繆侯贊曰。嗚呼。漢者瞞也。成瞞篡者權也。瞞名漢臣也。實漢賊也。權陽瞞敵也。陰瞞翼也。公批元於前。而不虞姦於腋。七軍甫淹。六師隨厄。使永安之恨。不在許昌而在公安。建興之師。不出樊城而出祁山。安樂之戩。與歸命之璧而相後先。惜哉。雖然不以間關而廢兄弟。不以亂離而廢君臣。其時如者山嶽。澄如者川流。而炳如者日月星辰。嗚呼。此其所以亘萬古而猶神也耶。本書逸名氏。不知誰作。蓋明人也。筆力雄健。能誅孫權之狡猾。而旌侯之忠節。

故附于此。

三國典略

洪容齋忠宣季子。博極羣書。與二兄迺遵有盛名。容齋尤以博洽受知孝宗。所著容齋五筆行于世。見本傳。今總曰容齋隨筆。野客叢書稱其出入經史。考據甚新。可謂博洽矣。然其間不能無舛誤。四筆曰。三國雜史至多。有王沈魏書。元行冲魏典。魚豢典略。張勃吳錄。韋昭吳書。孫盛魏春秋。司馬彪九州春秋。丘悅三國典略。員半千三國春秋。虞溥江表傳。今唯以陳壽書為定。是為三國志。按文獻通考引崇文總目曰。三國典略二十卷。唐汾州司戶參軍丘悅撰。以關中鄴都江南為三國。起西魏。終後周。而東包魏北齊。南總梁陳。凡三十篇。關中西魏北周。鄴都東魏北齊。江南梁陳。據其所都。定為三國。而非魏吳蜀之謂也。故通鑑梁紀陳紀考異。亦引用之。蓋容齋偶失於考索。因書名而遂為魏吳蜀之三國。亦猶通鑑綱目引蕭方等三國春秋。誤削等字。綱目之誤。困學紀聞已辨之矣。又隨筆論曹操殺楊脩曰。袁公四世宰相。為漢宗臣。固操之所忌。彪之不死其手。幸矣。按彪脩父子與袁氏無所干涉。蓋袁氏五世三公。楊氏四世三公。或容齋以此偶誤。不然傳寫訛耳。

太郎二郎

溫大雅創業起居注。收在津逮秘書。曰。大業十三年六月甲申。命大郎二郎。率衆取之。除程。命齋三

日之糧。時文武官人。並未署置。中軍以次第呼太子秦王。太子隱太子建成。秦王太宗。為大郎二郎焉。秋七月壬子。以四郎元吉為太原郡主。留守晉陽。按世俗呼長子次子為大郎二郎。亦此義也。如張昌宗稱六郎。李輔國稱五郎之類。皆以行第呼之。而非長幼之序。又次子亦稱次息。通鑑晉安帝紀。劉裕慰諭三秦父老曰。今以次息。與文武賢才共鎮此境。次息謂武帝第二子廬陵王義真也。三代實錄光孝紀。仁和三年八月立太子詔。匪劉匪姬。竟妙其選。第七息定省。宇多天皇。年二十一。便侍朕躬。未曾出閣。可見詔書亦用息字。

太后攝政

蔡邕獨斷曰。少帝即位。太后即代攝政。羣臣上書奏事。皆為兩通。一詣太后。一詣少帝。蓋東漢明德馬皇后臨朝以來。循用為故事。晉褚太后。康獻皇后即崇德太后。朝臨攝政凡三。以穆帝哀帝海西公皆幼冲即位也。日本紀神功皇后紀書攝政元年。即此義也。若王莽之居攝。乃竊周公之攝政。篡賊之事。不足道也。關白二字。自見霍光傳以來。往往有之。唐肅宗時。李輔國專掌禁兵。常居內宅。宰相百司。非時奏事。皆因輔國關白承旨。及程元振謀奪其權。輔國出居外第。上表遜位。於是罷輔國兼中書令。進爵博陸王。此又似準霍光故事。甚可怪也。輔國以關豎竊大權。離間骨肉之親。使明皇悒鬱而崩。罪不容誅。肅宗不能正其罪。而使盜殺之。前哲之論備矣。

一聖

唐高宗每視事。武后垂簾於後。政無大小。皆與聞之。中外謂之二聖。按元魏楊椿謂其子昱曰。當以吾意啓二聖。此謂胡太后明帝母子。隋文帝獨孤皇后雅好讀書。言事多與帝意合。宮中稱爲二聖。則二聖之稱。非昉於高宗則天也。

聖人

唐人謂主上曰聖人。安祿山問中使馮神威曰。聖人安穩。肅宗在靈武。與李泌出行軍。軍士指之竊言曰。衣黃者聖人也。衣白者山人也。其餘頗多。史思明將駱越蔡文景勸史朝義殺父。朝義泣曰。諸君善爲之。勿驚聖人。此雖當時臣子稱其君父之語。施之亂賊。則不勝捧腹。魏博節度使田承嗣爲安史父子立祠堂。謂之四聖。悖逆極矣。

新唐書

十事

宋仁宗命歐陽脩宋祁刪修唐書。永叔爲紀志。景文爲列傳。其進書表曰。其事則增於前。其文則省於舊。劉元城謂事增文省。正新書之失處。陳直齋曰。本紀用春秋法。削去詔令。雖大略猶不失簡古。至列傳用字多奇澀。殆類虬戶銑谿體。識者病之。唐徐彦伯爲文多求新奇。龍門爲虬戶。金谷爲銑溪。時人謂之澹牀。直齋指此。西尤不喜新書。其言雖過激。而學文者亦不可不知也。何蘧春渚紀聞載其言曰。司馬遷敢亂道。却好。班固不敢亂道。却不好。不亂道又好是左傳。亂道又不好是唐書。八識田中若有一毫唐書。亦爲來生種子矣。事文類聚亦載此語。宋僧珍藏叟介石住淨慈疏。敢亂道却好。不亂道又好。似史記左

傳文章。才開口便知。未開口已知。有古德宗門眼目。上句正用子西此語也。

李密傳。較他傳敘事頗詳。然通鑑所載尤詳。傳甚簡略。如釋徐文遠而問計。新書都不載。蓋通鑑據隋書。北史。新舊唐書。革命記。壺關錄。劉仁軌河洛行年記。賈閏甫蒲山公傳等書。參覈折衷。故欲究密之始終。非通鑑不可得也。蓋閏甫爲密謀主。方略施爲。不遺餘力。及密叛。唐苦諫不聽而去。其所見聞得實。亦猶梁王詔在江陵作太清記。述臺城之敗耳。故通鑑取之。而閏甫之諫亦新書所不載也。楊玄感敗。李密亡去。變姓名。教授諸生自給。爵爵不得志。舊書密傳載密詩全首。新書不載。但云哀吟泣下。蓋詩賦非有關係。不著於史。新書之見卓矣。薛舉傳。劉文靜殷開山敗於淺水原。死者十六。通鑑士卒死者什五六。新書去五字。頗難讀過。然史漢書什二什五之類儘多。新書蓋有所據也。竇建德傳。滑州刺史王軌爲奴所殺。奴以首奔建德。建德曰。奴殺主人。大逆。不可賞。賞逆則廢教。將焉用。爲命斬奴而返軌首。滑人德之。文治中藤原泰衡敗走。部將河田二郎斬其首。獻源賴朝以希賞。賴朝責其不忠。執而戮之。亦有建德之風。若平羣木兔勸。反正帝誅刺領巾。則上世已有此比。而可以爲萬世之法。

隱太子建成傳。秦王以美田給淮安王神通。高祖從父弟。而張婕妤爲父丐之。帝手詔賜田。詔至。神通已前得。不肯與。婕妤妄曰。詔賜妾父田。而王奪與人。帝怒。召秦王讓曰。我詔令不如爾教邪。

按高祖此語。絕與後鳥羽上皇寵信龜豹。責北條義時語相似。高祖遭禁門喋血之變。而克其終。上皇以順討逆。師出有名。而謀謨不臧。將相非其器。一敗塗地。竟罹播遷之禍。悲夫。
永王璘傳。是夜李銑。璘玄宗子。銑河北招討判官。陣江北。夜然束葦。人執二炬。景亂水中。覘者以倍告。璘軍亦舉火應之。通鑑其夕江北之軍。多列炬火。光照水中。一皆為兩。璘軍又以火應之。通鑑文義易曉。而新書似得事實。

盧奕傳。奕黃門監懷慎少子也。與兄奐名相上下。而剛毅過之。拜御史中丞。自懷慎奐及奕三居其官。清節似之。時傳其美。俄留臺東都。安祿山陷東都被執。不屈而死。子杞別有傳。顏真卿謂盧杞。先中丞傳首至平原。真卿以舌舐面血。即此事也。杞子元輔少以清行聞。累進兵部侍郎華州刺史。端靜介正。能紹其祖。故歷顯劇。而人不知杞之惡為累云。按李湛以義府子與敬暉總禁兵討武氏之亂。許遠以敬宗孫死祿山之難。元輔以杞子克紹祖風。敬宗義府及杞。皆列姦臣傳。而子孫趨操不同如此。懷慎為宰相有名。與魏知古張九齡等同傳。奕以死義在忠義傳。元輔附焉。元輔之父杞。則不免姦臣之名。彰忠斥佞。可謂至嚴。善善長而惡惡短。其有得於春秋之法歟。姦臣傳贊曰。木將壞。蟲實生之。國將亡。妖實產之。故三宰嘯凶。此奪晨。林甫將蕃黃屋奔。鬼質敗謀興元蹙。崔柳倒持李宗覆。嗚呼有天下者。可不戒哉。按三宰謂李勤許敬宗李義府。三相皆勸高宗立武后也。黃屋謂李林甫欲固權。不使邊將入相。而釀成祿山之禍。明皇幸蜀也。鬼質謂

盧杞藍面鬼色。招朱泚之亂。德宗幸興元也。崔柳謂崔胤柳璨亡唐天下也。容齋隨筆曰。作文旨意句法。固有規倣前人。而音節鏘亮。不嫌於同者。如前漢書贊云。豎牛奔仲叔孫卒。新唐書劾之。劉夢得做舟篇。亦効班史語也。然其模範。本自荀子成相篇。困學紀聞載劉夢得歎牛做舟等篇曰。文法倣漢書蒯通等贊。唐書姦臣傳贊亦然。焦弱侯譏張表臣不知此格。謂子京施於史詞。似非所宜。良是。宋張表臣著。冊胡鈞詩話。兼論文章。真西山似喜此文法。大學衍義中。往往有之。論姦臣顯國曰。正先死而趙高肆。按正先事甚僻。不見史記。出京房封事。西山亦據房言也。王章慘而王鳳熾。杜遜斥而林甫橫。論女禍曰。燕啄皇孫國嗣絕。載昇祿兒反謀決。論廢儲貳曰。里克成謀申生縊。楊素懷姦子勇囚。林甫趨利瑛瑒戮。大子瑛光王瑒皆諸死。亦用此體也。
陳直齋曰。歐公嘗臥聽藩鎮傳序曰。使筆力皆如此。亦未易及也。然其序全用杜牧罪言。實無宋公一語。然則歐公殆不滿於宋公耶。今按藩鎮傳序。用杜牧守論。又歐公作本紀。景文作列傳。而藩鎮傳序。全用杜牧語。此古人虛已服善處。歐公不應反語貶之。直齋此論。殆不可曉。
按李靖傳。雷霆不及掩耳。初作震雷無暇掩聽。因歐公風之改焉。其事載事文類聚。然疾雷不及掩耳。淮南子之語。特改疾雷作震雷耳。事文類聚又云。景文未第時。或問君好讀何書。答曰。予最好大誥。故景文文多謹嚴。至修唐書。其言艱。其思苦。蓋亦有所自歟。

奉天之詔

德宗奉天罪己之詔。四方大悅。士卒皆感泣。考之本集。乃陸宣公所草也。通鑑亦舉全文。然得胡

三省評注讀之。則發揮旨趣。尤覺有味。今舉其略曰。李希烈田悅王武俊李納等。咸以勳舊。各守藩維。朕撫御乖方。致其疑懼。皆由上失其道而下罹其災。朕不君。人則何罪。注云。此等言語。強藩悍將聞之。宜其感服易心。又曰。朱泚反。易天常。盜竊名器。暴犯陵寢。所不忍言。獲罪祖宗。朕不敢赦。注云。此等言語。可與誥誓相表裏。其後李晟平朱泚之亂。克復長安。遣掌書記于公異作露布。上行在曰。臣已肅清宮禁。祇謁寢園。鍾簾不移。廟貌如故。德宗泣下曰。天生李晟。以為社稷。非為朕也。文之關係邦家。有如此者。此不可以琢句鍊字求之也。

銅山大賊

李義府儉邪之狀。備於前史。唐高宗龍朔二年下獄。遣司刑太常伯劉祥道鞠之。事皆有實。除名流。嶺州。朝野莫不稱慶。或作河間道行軍元帥劉祥道破銅山大賊李義府露布。勝之通衢。義府多取人奴婢。及敗各散歸其家。故其露布云。混奴婢而亂放。各識家而競人。胡注。李義府河間人。故云然。通鑑采而誌之。以為世鑒。學者為文。類有所祖。漢高帝為太上皇營新豐。後人誌其事。其辭云。混雞犬而亂放。各識家而競人。此語所祖。有自來矣。匠人胡寬營新豐。移者皆悅其似。見西京雜記。按義府恃武后之勢。賣官積錢。故謂之銅山大賊。唐詩紀事載王義方彈義府疏云。義府善柔成性。佞媚為心。昔事馬周。分桃見寵。後交劉洎。割袖承恩。據之則義府少年時。以色事人。特怪夫馬周劉洎皆貞觀名臣。而亦不免比頑童耶。班孟堅董賢傳贊曰。柔曼之傾意。非獨女德。蓋亦有男色焉。義

方彈疏。通鑑不載。紀事必有所據。傳至後世。人皆知之。士君子制行。可不謹哉。

裴行儉

史稱裴行儉有知人之鑒。今蒐其行事。不特能斷四才子之為人。與偏裨多出乙名將。甲。其定選法詳審。遂為永制。無能革之者。文武兼資。誠一代之偉人也。其名位未顯時。聞高宗將立武昭儀為后。以為國家之禍。必自此始。果如其言。及為西域安撫使。擒阿史那都支李遮旬。兵不血刃。而二酋為俘。為定襄道行軍大總管伐突厥。多縱反間。使阿史那伏念執阿史德溫傳以降。籌略深遠。當時諸將。皆所不及也。初行儉行至朔川。謂其下曰。用兵之道。撫士貴誠。制敵貴詐。遂以計破虜。軍至單于府北。抵暮下營。掘塹已周。行儉遽命移就高岡。諸將皆言士卒已安堵。不可復動。行儉不從。趣使移。是夜風雨暴至。前所營地。水深丈餘。諸將驚服問其故。行儉笑曰。自今但從我命。不必問其所由知也。此言甚有深意。為將者不可不知也。

高力士

高力士南海馮盎曾孫也。武后聖曆初。嶺南討擊使李千里上二闍兒。曰金剛。曰力士。中人高延福養為子。故冒高姓。玄宗在藩。力士傾心附結。既即位。以功除三品將軍。四方表奏。皆先呈力士。然後奏御。勢傾內外。太子諸王。呼之為兄為翁。唐室宦官擅權之禍。階于力士。故范太史真西山著之唐鑑大學衍義。論列不遺餘力。然力士無大過惡。小心恭恪。善視時俯仰。不敢驕橫。故士大

夫亦不疾惡。及太子瑛廢死。力士勸帝立肅宗為太子。楊國忠隱雲南喪師。更以捷聞。力士從容對以實。且揣祿山必反。言邊將擁兵太盛。此皆通鑑所載。諸宦者所不及也。李輔國遷上皇於西內。力士流巫州。黃山谷詩所謂高將軍去事尤危。亦言其擁護之力也。代宗即位。遇赦還至朗州。聞上皇崩。號慟嘔血而卒。唐詩紀事載力士謫承州。據通鑑承當作巫山多齋不食。因感之作詩寄意曰。兩京作斤賣。五溪無人採。夷夏雖有殊。氣味都不改。其後會赦還。道遇開元中羽林軍士坐事謫嶺南。停車話舊。方知明皇厭世。北望號慟。嘔血而卒。亦與通鑑所書合。蓋唐鑑衍義之論。專為入主假權閹豎者發。而力士愛君之誠。則終不可掩也。漢張放聞成帝崩。思慕哭泣而死。荀悅論曰。放非不愛上。忠不存焉。故愛而不忠仁之賊也。若力士之愛君。則異於放矣。丁南湖舉力士有類於君子之行者四。以為大姦似忠。大詐似信。是以要譽固寵。四十餘年。此論不諒其心而過於刻矣。

李鄴侯

唐宰相如房杜姚宋狄梁公張曲江。世皆知其賢。竊謂可亞諸公者李鄴侯也。而世多不之察。蓋以其好黃老鬼神之說。頗招譏諷。而不知此乃所以晦迹遠害之術。而留侯避穀之故智也。凡其事業。溫公兼採新舊唐書鄴侯家傳。泌子繁所著。繁即韓文公詩送諸葛覺往隨州讀書者。備載通鑑。其肅代之世。贊成興復兩京之謀。辨建寧之誣枉。建寧王倓肅宗子。代宗弟。逮德宗時。再安儲位。救李勉。護韓滉。保全李晟馬燧。定

達奚抱暉之亂。討淮西叛卒。文武才略。皆較著者。而其對德宗之言曰。宰相之職。不可分也。又曰。君相不可言天命。蓋君相所以造命也。此語包涵甚大。論邦經道變。理陰陽。皆以為己任。蓋從來為相者。未嘗言及之也。故范太史載之唐鑑。曰李泌之論。不亦正乎。論其言宰相之職。曰必以一相統天下。始可以言治矣。論德宗欲廢太子。曰李泌善處父子之間。可謂忠矣。其稱許不一。而溫公猶不滿其輸淮南錢帛於大盈庫。論曰。李泌欲弭德宗之欲。而豐其私財。是猶啓其門而禁其出也。雖德宗之多僻。亦泌所以相之者非其道故也。此論甚正。責備賢者之言。設使鄴侯聞之。必當無辭以對。然考異論其事迹。曰泌雖詭誕好談神仙。然其知略實有過人者。至于佐肅代復兩京。不受相位而去。代宗順宗之在東宮。皆賴泌得安。此其大節可重者也。據之則溫公所取。可見其概。必欲究其終始。與出處之不苟。非讀胡三省論注。不可得而詳。德宗紀貞元三年議復府兵下注。可併考焉。宋景濂題新修李鄴侯傳後曰。晉王府長史朱君。據泌之子繁所錄家傳十卷。參考群書。做前賢刪正陶潛諸葛亮二傳。芟繁蕪華。重為泌傳一通。泌之事。始大白於天下後世。朱君名右字伯賢。天台人云。余雖不得見其書。伯賢有名於明。而景濂題之。則其為書亦可推而知之。侯之事業。久而彌彰矣。

杜牧之

杜牧之元和宰相佑之孫。才氣出羣。今人見其能詩。徒以詩人目之。又見詩話有淮南幕僚湖州水嬉

等事。以為沈酒色一浪子。其實大不然。牧之每有志於經略河朔。文宗朝憤朝議專事姑息。作罪言。又傷府兵廢壞。作原十六衛。又作戰論守論。注孫子為之序。武宗朝上宰相李德裕書。言上黨事體。通鑑皆取之。上黨者昭義節度使劉從諫所鎮。戰國韓地。故謂之上黨。亦謂之澤潞。是時劉從諫死。其子稹謀承襲。武宗用德裕策。排衆議而討之。牧之所言。皆適機宜。故德裕頗采之。竟平澤潞。新書藩鎮傳序。全用守論。譚忠傳全用燕將錄。文在樊川集。歐陽公序梅聖俞孫子注曰。世多用曹公杜牧陳暉注。號三家孫子。三家之注。暉最後。其說時時攻牧之短。牧亦慨然最喜論兵。欲試而不得者。其學能道春秋戰國時事。甚博而詳。朱子語錄曰。歐公大段推許梅聖俞所注孫子。看得來如何得似杜牧注底好。繇是觀之。其為諸公所取可知也。守論中有云。天子養威而不問。有司守恬而不呵。王侯通爵。越錄受之。覲聘不來。几杖扶之。逆息虜胤。皇子嬪之。裝緣采飾。無不備之。此言藩鎮跋扈難制。而朝廷專務姑息。阿房宮賦。形容始皇之侈靡。極其精工。猶屬辭人之賦。此數語核而實。簡而盡矣。

馮道

馮道之事五代。歐陽司馬二公之論。發其圖全苟免之態。無復餘蘊。歐公引王凝妻李氏事以論之。尤為深切著明。而王荆公謂之純臣。羅景綸譏之以為悖理傷道。宜矣。通鑑後晉齊王紀載道雖為首相。依違兩可。無所操決。輟耕錄引蘇氏開談錄曰。道與趙鳳同在中書。鳳有女適道中子。以飲

食不中。為道夫人譴罵。趙令婢長號知院者來訴。凡數百言。道都不答。及去。但云傳語親家翁今日好雪。此即依違兩可。無所操決之意。而道之所以保身固位之術。一生受用不盡者也。朱文公論鄉原曰。鄉原人皆稱之。而不知其有無窮之禍。如馮道者。此真鄉原也。道之為人。固不足道。雖然當後唐明宗時。道與李愚建議。板刻九經。至後周太祖時。凡涉二十二年而板成。雖喪亂之世。能為此舉。蓋溫公所謂。雖有小善。庸足稱者。而九經傳布。至今賴之。則隱然與有功焉。

張承業

漢楚相爭。項羽圍高祖於滎陽。高祖遁去。令韓王信與周苛魏豹縱公守滎陽。楚兵甚盛。周苛縱公相謂曰。反國之王難與守。因殺魏豹。梁晉相持。梁天雄。魏博節度使賀德倫降晉。莊宗以為大同節度使。德倫至晉陽。時莊宗出伐梁。張承業守晉陽。以德倫新附。不欲使其有城有兵。故留之不遣。及梁王檀襲晉陽。城甚危。德倫部兵多逃入梁軍。承業恐其為變。收德倫斬之。此與周苛縱公所見畧同。卒能却檀兵。全晉陽。莊宗得以滅梁。然承業之盡忠竭力。非為莊宗也。為唐也。其為唐之純臣。則前史載之備矣。余特論其權畧膽識。不可以言官待之耳。

李存審

自史漢叙樊鄴滕灌絳侯曹相國之戰功。虓虎雄武之士。際會風雲之機。攻城野戰。立勳效績者。曷可勝紀。後漢段熲征羌百八十戰。燕宜都王慕容鳳。桓子前後大小二百五十七戰。未嘗無功。隋史萬

歲征溪洞蠻。前後七百餘戰。轉鬪千餘里。唐栢良器年二十四。更戰陳六十二。則又過於史漢所載。然未有如後唐李存審者。存審出於寒微。以功至宣武節度使。兼中書令。蕃漢馬步總管。常戒諸子曰。爾父少提一劍去鄉里。四十年間。位極將相。其間出萬死獲一生者非一。破骨出鏃者凡百餘。因授以所出鏃。命之曰。爾曹生於膏粱。當知爾父起家如此也。出鏃百餘。疑史家有夸辭。然其戰鬪之數。亦可推而知矣。以之訓諸子。此漢兒之所不貴。而武人之所當戶祝者也。

湖亭涉筆卷之一終

湖亭涉筆卷之二

澹泊齋安積覺 著

司馬溫公

五事

宋哲宗元祐元年。司馬溫公爲相。盡革新法。或謂溫公曰。熙豐舊臣。多檢巧小人。他日有以父子之義問上。則禍作矣。鶴林玉露云。傳欽之蘇子瞻勸其防後患。邵氏聞見錄云。或謂公曰云云。薛方山宋元通鑑從之。公正色曰。天若祚宋。必無此事。此溫公學力到。識見到。徹頭徹尾底語。故張南軒稱其更不_二論_一己利害。想其平日所養。故臨事發言。能如是中理。然溫公此語。亦有所本。左傳閔元年。晉士蒍曰。天若祚太子。其無晉乎。即此語勢也。

神宗崩。溫公自洛入臨。衛士見公。皆以手加額。民遮道呼曰。公無歸洛。留相天子。活百姓。爲相八閱月而薨。京師民罷市。葬送者如哭私親。都中四方。皆畫像以祀。飲食必祝。其在相位。遼道宗敕邊吏曰。中國相司馬矣。切毋生事開邊隙。金完顏亮生日。熙宗賜公畫像。此一事見宋元通鑑宋高宗紹興十八年。公之德業言行。載在史籍。茲不復論著。但以公之德澤不特宋之士民愛戴之。夷虜亦知敬畏之。

故劉取其一二。非天下之至誠。其孰能與于斯。陸放翁作温公布被銘曰。公孫丞相布被。人曰詐。司馬丞相亦布被。人曰儉。布被可能也。使人曰儉。不可不曰詐。不可能也。自注云。此銘予二十歲時作。今傳以為秦少游非也。載在渭南集。温公布被。范堯夫作銘。范淳父作記。張文潛書銘後。諸賢之作備矣。蓋温公一生事業。皆從一箇誠字中做出。放翁此銘。可謂能道出温公心事。豫章集山谷跋温公與文潞公書曰。司馬温公天下士也。所謂左準繩。右規矩。聲為律。身為度者也。觀此書。猶可想見其風采。余嘗觀温公通鑑草書數百卷。顛倒塗抹。訖無一字作草。其行己之度蓋如是。文獻通考經籍考引李巽巖集曰。張新叟言洛陽有通鑑草藁。盈兩屋。黃魯直閱數百卷。訖無一字草書。蓋謂此也。温公平生以誠敬為主。即此一事。便可見其端正謹慤。所謂草書即長編也。公與宋次道書所云。草卷每四丈截為一卷。自課三日剛一卷者是也。李巽巖名壽字仁父。諡文定。事高孝二朝。撰續通鑑長編一百六十八卷。劉義仲通鑒問疑曰。君嘗嘗有言。光修通鑑。唯王勝之借一讀。他人讀未盡一紙。已欠伸思睡矣。義仲字壯輿。劉恕道原之子也。當時未知此書之為可貴。故公有是言。然山谷閱草藁數百卷。則當時亦有好之者也。宋史洪邁傳。邁考閱典故。漁獵經史。極鬼神事物之變。手書資治通鑑凡三。夫讀全書者既少。况寫之乎。一寫猶可勉強。三寫必不能。非容齋之篤學。其孰能及之哉。王應麟謂

自書契以來。未有如通鑑者。殆非過論。元順帝出通鑑分賜近臣曰。歷代之史。有資治道者。莫備於此書。此一事見宋景濂題御賜資治通鑑後文。其見貴重如此。然朱子嘗謂温公作通鑑。可謂有補治道。識者尙惜其枉費一生精力。薛應旂曰。朱子既有是說矣。乃因其書而提數言。以成綱目一書。力省功倍。至今學者謂綱目繼獲麟而作。而不復知有通鑑矣。然則世之學者。好讀綱目而不好通鑑。其所從來亦久矣。

避諱用之字

焦氏筆乘曰。通鑑西漢諸帝下注。惠帝則云諱盈之。字曰滿。文帝則云諱恒之。字曰常。景帝則云諱啓之。字曰開。武帝則云諱徹之。字曰通。是以盈之恒之啓之徹之為名。而以曰滿曰常曰開曰通為字。蓋狗苟悅漢紀之文而昧其義者也。此殆不然。今考惠帝紀注。荀悅曰。諱盈之字曰滿。師古曰。臣下以滿字代盈者。則知帝諱盈也。他皆類此。胡三省豈不知君諱臣下所避。故以滿常開通等字代之者哉。弱侯見高帝紀注書諱邦字季。遂認惠帝以下注為字某。宣帝紀注引漢紀曰。諱詢字次卿。詢之字曰謀。成帝紀注亦云。諱釐字太孫。釐之字曰俊。其文甚明。弱侯不復舉之。何其疎繆也。恐讀者為所惑。故不得不辨之。

四皓

通鑑不取四皓定儲事。考異辨晰詳悉。其畧曰。留侯猶云非口舌所能爭。豈山林四叟片言。遽能梃

其事哉。借使四叟實能扼其事。不過汚高祖數寸之及耳。何至悲歌云羽翮已成。矰繳安施乎。若四叟實能制高祖。使不敢廢太子。是留侯立黨以制其父也。留侯豈為此哉。此特辯士欲誇大四叟之事。故云然。司馬遷好奇。多愛而采之。今不取。胡致堂不然其說曰。張良招致四皓。羽翼儲宮。方之齊桓公會合八國。定王世子。事簡而力不勞。其績尤偉。而世之君子。乃致疑焉。謂審有此。是良爲子結黨以拒父。是蓋未知聖人深許首止之盟。而稱管仲相齊一匡天下之美也。致堂所謂世之君子。正指温公也。程傳坎六四。納約自牖。亦引留侯招致四老。以爲因其所明而及其事。則悟之如反手。温公以爲結黨。程子以爲就其明。二公所見。相反如此。而程子之說。又何疑焉。朱子亦非温公之說。詳見語類。文獻通考晁氏曰。公武好通鑑。學之有年。見其大抵。不采。俊偉卓異之事。如屈原懷沙自沉。四皓羽翼儲君。嚴光足加帝腹。姚崇十事開說之類。皆削去不錄。然後知公忠信有餘。蓋陋子長之愛奇也。温公所以不取定儲事者。晁氏之說得之矣。晁氏名公武。字子止。紹興中著讀書志二十卷。

五代史闕文

温公不取王元之五代史闕文。通鑑後梁太祖紀。晉王立其子存勗。莊宗爲嗣下考異曰。五代史闕文。世傳武皇臨薨。武皇即李克用。莊宗即位。追諡武皇帝。以三矢付莊宗曰。一矢討劉仁恭。一矢擊契丹。一矢滅朱温。汝能成吾志。死無恨矣。莊宗藏三矢於武皇廟庭。及討劉仁恭。命幕吏。以少牢告廟。請一矢盛

以錦囊。使親將負之。以爲前驅。凱旋之日。隨俘馘。納矢於太廟。伐契丹。滅朱氏。亦如之。據薛史。此時莊宗未與契丹及守光爲仇。此蓋後人因莊宗成功。撰此事以誇其英武耳。今按歐史伶官傳論。全載此事。蓋據闕文也。此又二公取舍不同如此。文獻通考晁氏曰。五代史闕文一卷。王禹偁撰。錄五代史筆避嫌漏略者。以備闕文。凡一十七事。其餘闕文所載。唐昭宗使梁太祖結襪系事。通鑑不取。蓋亦晁氏所謂俊偉卓異之事。而温公所不取也。

魏博牙兵

唐兵制。詳見唐書兵志。廢置沿革。皆可考據。但魏博牙兵。田承嗣所私置。非由朝廷。而其疆過於諸鎮。牙者旗名。軍中所建。故將軍所居謂之牙城。帳前謂之牙帳。軍吏早晚兩謁。亦謂之牙。牙兵者麾下親軍之義也。今據通鑑。舉其梗概。代宗廣德元年。以田承嗣爲魏博節度使。更號天雄軍。此藩鎮之始也。承嗣選募管內六州。魏博貝衛潭相六州。文獻通考封建考爲貝博魏相衛磁洛七州。藩鎮之始。據通鑑釋文辨誤。驍勇之士五千人。爲牙軍。厚其給賜。爲腹心以自衛。自是父子相繼。婚姻磐結。親黨膠固。承嗣以姪田悅爲才。使知軍事。承嗣死而悅爲留後。承嗣子緒。殺悅而立。傳至緒子季安。及季安死。其子懷諫幼弱。不能蒞軍政。族人田弘正代統其衆。憲宗元和七年。弘正以六州地歸正。韓文有魏博節度使沂國公先廟碑銘。謂弘正也。王師征討。皆得其力。然歲久驕橫。不能無弊。弘正子布。不能綏撫。憂其逼。竟自殺。牙兵少不如意。則逐主帥。易如反掌。如史憲誠。何進滔。韓允中。樂彥禎等。比比皆然。昭宗朝羅弘信紹威父子相承。爲魏

博節度使。紹威心惡牙兵之驕，而力不能制。時後梁太祖為宣武節度使，紹威借其兵而殲之。凡八千家，嬰孺無遺。雖去其逼，而魏兵自是衰弱。紹威悔之，謂人曰：合六州四十三縣鐵，不能為此錯也。錯釋為誤。取鑄鐵為喻。宋末王炎午生祭文丞相文，縱不斷趙盾之殺君，亦將悔伯仁之由我。則鑄錯已無鐵。噬臍寧有口乎。正用此語也。後梁楊師厚鎮天雄軍，選軍中驍勇，置銀槍効節都數千人，給賜優厚，以復故時牙兵之盛。及師厚卒，後唐莊宗取之，以為帳前銀槍都，得其力以破梁。其後部兵皇甫暉作亂，劫指揮使楊仁晟曰：主上所以有天下，吾魏軍力也。莊宗被弑，亦由牙兵。故胡三省曰：莊宗以銀槍効節軍取梁，而亦以銀槍効節軍取禍。凡自田承嗣置之。至此幾二百年。此牙兵之始末也。其法略與皇朝中世以來武將養兵之制相似。蓋自平貞盛征平將門，源賴義殄安倍賴時。東國將士，多屬兩家。世道之變，其來漸矣。然牙兵專尚勇悍，故驕縱多不法。皇朝訓以廉恥，故驕難不苟免。此其所以似而不同者歟。

河朔三鎮

唐世河朔三鎮，頗難通曉。今舉大要，謂魏博成德盧龍三鎮也。魏博見上牙兵下。成德鎮州趙地。史鑑稱鎮冀或鎮魏。冀謂朱滔，魏謂魏博，是也。安祿山故將李寶臣，降唐為節度使。其子惟岳為王武俊所殺。武俊傳至其孫承宗承元。田弘正討平之，為節度使。王庭湊殺弘正而自立。廷湊回鶻阿不思之種。曾祖五哥。傳至曾孫景崇其子鎔而亡。盧龍幽州燕地。祿山故將李懷仙，降唐為節度使。懷仙為朱希彩

所殺。而朱泚自稱留後，以盧龍叛。泚滅。朱滔據有其地。穆宗時朱克融逐節度使張弘靖而自立。其後叛亂不常。數逐主帥。李德裕用張仲武為帥，鎮州始治。昭宗朝李克用表劉仁恭為盧龍留後。乘唐之亂，勢寔強大。至子守光，遂稱燕王。成德王鎔亦稱趙王。初王武俊與朱滔等謀同稱王。滔自稱冀王。田悅稱魏王。武俊稱趙王。李納稱齊王。謂之四王。顏真卿指為四凶是也。既而去之。然當時藩鎮相謂魏博曰魏，成德曰趙，盧龍曰燕。如秦時六國然。蓋藩鎮之禍，兆於張說之罷府兵。成於李林甫之杜邊將入相之路。跋扈倔彊，遂不可制。以憲宗之英武明斷，擒劉闢，梟李錡，誅吳元濟，而終不能平河北。歐陽永叔讀李翱賦，歎其神堯以二旅取天下。後世子孫不能以天下取河北之語。正為此也。及武宗用李德裕為相，經略處置，皆得其宜。河朔三鎮，革面嚮化，則贊皇之功，亦恐不在裴度李絳之下矣。

宋三鎮

宋三鎮謂中山、太原、河間。即唐時河北燕趙之地也。據宋元通鑑，初徽宗與金太祖約共滅遼，求石晉路契丹故地。而併欲得劉仁恭所獻契丹。平營灤三州。金太祖不肯。遼相左企弓降金，嘗獻詩曰：君王莫聽捐燕議，一寸山河一寸金。僧清順十竹軒詩。城中寸土如寸金。不必相襲。而語偶同。太祖意彌固。及張毅以平州降宋。金太宗指為兵端，遂敗盟攻宋。幹離不欲必得三鎮之地，朝議紛紜。李忠定固執言：三鎮國之藩蔽，割之何以立國。欽宗不能從。遂許割三鎮以界金。而粘沒喝陷太原，幹離不陷真定。河

東河北。皆爲金有。而二會長驅入汴。京城不守。而徽欽北行。忠定之言。至是驗矣。呂中曰。河東河北。無一人負朝廷。而朝廷負其民。粘罕已據太原。韓侂不已陷真定。兩河咽喉已塞矣。而朝廷猶集議。存弃三關地孰便。臣下尙相持弃不弃之說。甚矣其可痛也。金人嘗謂吾使曰。待汝議論定時。我已渡河矣。大抵國家之患。在於多虛文而少實效。多議論而少成功。安得不爲虜所侮乎。此論甚中肯綮。蓋議論多而成功少。此宋室始終之患。而金人洞見其病原矣。

阻水布陣

秦王苻堅伐晉。逼淝水而陣。晉兵不得渡。前鋒都督謝玄。遣使謂秦陽平公融。堅弟曰。君懸軍深入。而置陣逼水。此持久之計。非欲速戰者也。若移陣少却。使晉兵得渡以決勝負。不亦善乎。堅曰。但引兵少却。使之半渡。我以鐵騎蹙而殺之。蔑不勝矣。融亦以爲然。遂麾兵使却。秦兵遂退。不可復止。玄掩擊大破之。周韋孝寬與尉遲惇。遇于對陣於沁水。惇布陣二十餘里。麾兵少却。欲待孝寬軍半渡而擊之。孝寬因其却。鳴鼓齊進。惇兵大敗。自古臨水決戰。擊其半渡而勝者固多。但不可引兵少却耳。蓋兩陣相向。退者先敗。此用兵之常勢。而况渡水者勇氣自倍。難與爭鋒。堅惇欲待其半渡而少却。反爲所乘。此必然之勢也。惇非孝寬之敵。雖不阻水。亦將見敗。堅之將略。固非謝玄所能及。而狼狽如此。豈復諫南伐。天褫其魄乎。

戰鳥圻

梁臨川王宏。武帝弟。伐魏。自洛口逃去。百萬之師。棄甲投戈。填滿水陸。治承中平維盛擊源賴朝。自富士川遁去。人馬相騰踐。器械輜重。委棄山積。雖衆寡不侔。其不戰而潰一也。宏素懦怯。勸之使退者呂僧珍也。昌義之怒曰。僧珍可斬。時有蕭娘呂姥之歌。維盛初無退意。勸之者藤原忠清也。靜海欲斬之。時有髡首衣緇之歌。何其相類也。又有尤相類者。通鑑梁元帝紀。侯子鑒至戰鳥圻。杜佑曰。宣州南陵縣鵲洲有戰鳥圻。昔桓溫舉兵東下。住此圻。中宵鳥驚。溫謂官軍圍之。旣而定。以群鳥驚噪。因名戰鳥。桓宣武雄爽。猶以鳥驚致疑。宜維盛之潰走也。

據守失險

禦敵之策。莫若先守要害。故曰在我爲要。于敵爲害。劉宋武帝伐南燕。豫料慕容超不能守險。旣過大峴。喜形于色。曰兵已過險。士有必死之志。虜已入吾掌中矣。趙宋之拒金。據河塞關爲要。而將非其人。望風奔潰。韓侂不臨河。官軍在河南者。無一人禦敵。金人遂取小舟以濟。笑曰。南朝可謂無人。若以二千人守河。我豈得渡哉。遂陷滑州。粘沒喝攻太原。城中固守不下。平陽府判卒。導金兵入南北關。粘沒喝歎曰。關險如此。而我乃得越。南朝可謂無人矣。二酋所見皆同。其實宋非無人。李綱宗澤種師道。皆一時將相之良。使其得展方略。則據險扼隘。必不使金人如履平地而至。欽宗惑於衆議。迄不能用。徒使金人媿笑而興歎。悲夫。

螳螂黃雀

說苑。蟬鳴榆上。不知螳螂在其後。螳螂捕蟬。而不知黃雀在其後。孺子彈丸欲取黃雀。而不覺露沾衣。此皆務欲得於前。不顧於後患者。歷觀群雄割據之世。或遲或速。莫不皆蹈此機。而晉末宋初。戎狄猾夏之日尤為甚焉。今舉一二于此。桓溫伐燕。燕主慕容暉求救于秦。秦王苻堅引群臣議之。皆不欲救。王猛密言于堅曰。燕雖疆大。慕容評。暉之叔祖。時為大傅。非溫敵也。若溫舉山東。進屯洛邑。收幽冀之兵。引并豫之粟。觀兵殺澠。則陛下大事去矣。今不如與燕合兵以退溫。溫退燕亦病矣。然後我承其弊而取之。不亦善乎。堅從之。自堅敗於淮南。部屬咸叛。後秦王姚萇聞慕容冲暉弟攻長安。會群僚議進止。皆曰宜先取長安。建立根本。然後經營四方。萇曰不然。燕人必不久留關中。吾當移屯嶺北廣收資實以待秦亡。燕去然後拱手取之耳。猛之取燕。萇之取秦。皆如其所料。宋武帝伐後秦。魏明元問崔浩曰。劉裕伐姚泓。萇孫興子果能克乎。對曰克之。但裕克秦而歸。必篡其主。願陛下按兵息民以觀其變。秦地終為國家之有。可坐而守也。夏王赫連勃勃謂群臣曰。姚泓非裕敵也。裕取關中必矣。然裕不能久留。必將南歸。留子弟及諸將守之。吾取之如拾芥耳。及聞武帝東還大喜。召其謀臣王買德。問取關中之方略。對曰。關中形勝之地。而裕以幼子廬陵王義真守之。狼狽而歸。正欲急成篡事耳。不暇復以中原為意。此天以關中賜我。不可失也。未幾勃勃取長安。卒如其策。及勃勃殂。太武明元子又取長安。雖中失之。終能得之。王猛姚萇崔浩王買德之豫料成敗。若合符契。何其明也。武帝以螳螂捕蟬。而勃勃以黃雀啄之。

安知太武之挾彈以伺其後乎。讀史至此。興替倚伏之機。可勝一慨。

段匹磾

段匹磾世為鮮卑大人。不與華夏同氣類。其父務勿塵。始以征討之功受晉封爵。非有積累之恩。殊異之寵。而匹磾忠義出於天性。其弟文鴛。從弟末杯。最勇悍。而末杯狡猾。常懷攜貳。初匹磾與太尉劉琨勦力結盟。攻石勒于襄國。非末杯之反間。則克復中原。亦可庶幾。及為末杯所敗。遂以猜嫌害琨。琨既死而匹磾勢孤。不能自立。流離迸散。而其志未嘗一日忘晉室也。若唐太宗之用阿史那社爾。契苾何力。執失思力。則以神武英略駕馭蕃將。故能服其心而收其用。若匹磾則上無英明之主。下無援助之力。特以天資忠純。志氣不撓。及兵敗被執。不屈於石勒。著朝服持晉節。仗正而斃。孰謂夷狄而慕義至此。華夏之人。亦可以少媿矣。春秋之義。夷而進於中國。則中國之。宜其與劉琨邵續輩同傳。而垂名於史策也。

慕容恪

王應麟曰。慕容恪尚在。憂方大耳。如得臣猶在。成得臣楚令尹子。玉。事在左傳。憂未歇也。覘國者以人為輕重。按晉人聞慕容儁統子暉父死。皆以為中原可圖。桓溫曰。慕容恪尚在。憂方大耳。應麟所云即此也。溫既不能取燕。而苻堅使王猛將兵。伐而取之。號令嚴明。燕民各安其業。更相謂曰。不圖今日復見太原王。猛聞之歎曰。慕容玄恭信奇士也。可謂古之遺愛也。慕容恪儁弟。字玄恭。封太原王。邦人慕之。敵將

稱之。其輔幼主之功。諸葛武侯以來。未之多見也。

王猛

桓温伐秦至關中。問王猛以三秦豪傑未有至者何也。朱文公曰。温不知人。三秦豪傑。非猛而誰。及苻堅得猛。委以將相之任。富國彊兵。遂成雄霸。宋武帝得王鎮惡喜曰。鎮惡王猛之孫。所謂將門有將也。及鎮惡伐姚秦。秦人素重猛。故南人忌鎮惡之功。由是觀之。秦人之思猛。亦猶燕人之思慕容恪。不唯威名震於華夏。惠澤亦被於黎庶也。然温公論猛以慕容垂格弟燕世祖佩刀誑其子令。以為此乃市井鬻賣之行。非雅德君子所宜為。豈猛亦未免策略之士。傾危險誠之態乎。然則猛之於恪。實有間焉。凡温公論人。不沒其善。不掩其功。至於心術之微。一毫不肯放過。必反覆論辨。而使之一歸于正。此其所以垂訓百世歟。

崔浩

崔浩高允。皆元魏之名臣。而浩最號多智。巨謀纖計。算無遺策。然王景略之才能。浩亦心服之矣。故其為明元論近世將相之言曰。若王猛之治國。苻堅之管仲也。慕容恪之輔幼主。慕容暉之霍光也。劉裕之平禍亂。司馬德宗安帝之曹操也。屈丐明元改赫連勃勃名曰屈丐乘時徼利。結怨四隣。雖能縱暴一時。終當為人所吞食耳。此可謂確論矣。凡浩之為人。長於人事。明於天道。其言如著龜。宜太武之歌頌其智也。太武使人頌曰。廉若道生。智若崔浩。道生長孫道生也。然浩師事寇謙之。以證明道術靜輪之法。刊撰國書。以招

北人之忿恚。卒以族誅。何其明於料人。而闇於自知也。故君子不取浩之才智。而多高允之亮直。

不可不知所擇哉。焦氏筆乘。引宋書柳元景傳云。浩與柳光世。密有異圖。受禍之酷。自有其故。特因史事發耳。按通鑑考異。宋文帝紀元嘉二十八年。温公從魏書。不取宋書。未必可據也。

源賀

元魏隴西王源賀。南涼王秃髮傉檀之子也。南涼亡奔魏。明元愛其才。謂曰。卿之先與朕同源。賜姓源氏。孝文太和中卒。遺令諸子曰。汝其毋傲悻。毋荒怠。毋奢越。毋嫉妬。疑思問。言思審。行思恭。服思度。遇惡揚善。親賢遠佞。目觀必真。耳屬必正。忠勤以事君。清約以臨己。吾終之後。所葬時服單槨。足申孝心。藹靈明器。一無用也。賀本羈旅之臣。非由庠序進者。官至太尉。善以功名終。其事迹載在通鑑。而遺令數語。皆坦夷平實。足為訓戒。苟非篤好聖賢之學。躬行而心體之。未易發此言也。當時南北知名之士。未嘗見有能及此等語者。通鑑不載。故據北史本傳抄之。

高澄

東魏高澄勸兵入宮。責靜帝曰。陛下何意反。臣父子功存社稷。何負陛下邪。帝正色曰。自古唯聞臣反君。不聞君反臣。王自欲反。何乃責我。觀之則太平記書。後醍醐天皇謀反。亦非無比例。可發一笑。而澄之悖逆。可勝誅乎。

韋孝寬

蘇頌濱曰：勇而遇勇，則勇者不足恃也；智而遇智，則智者不足恃也。以智攻智，以勇擊勇，此譬如兩虎相搏，其勢足以相擾，而不足以相斃，誠哉是言也。不唯三國英傑之主為然，東魏高歡之於韋孝寬亦是已。歡臨陣決機，謀略如神，至圍孝寬於玉壁，則盡攻擊之術，而孝寬守禦有餘，其報歡之言曰：孝寬關西男子，必不為降將軍也。歡智勇皆困，因而發疾，解圍去。近世明吳三桂絕其父驤書所云：既無孝寬禦寇之才，正謂此也。歡既卒，諸將宜若無敵孝寬者，時則有斛律光，爭宜陽之地，相持彌年，而孝寬敗於汾北，此非孝寬之才下於光，而宇文護不能用其築城之策故也。光亦北齊名將，自結髮從軍，未嘗敗北，其築十三城於汾北，馬上以鞭指畫而成，拓地五百里，威名震關西，孝寬無如之何，則以謠言縱反間而斃之，故周武帝滅齊，指光名曰：此人在。朕安得至鄴，其為鄰敵所憚如此，而為孝寬所斃者，亦非光之智勇困於孝寬，而後主昏闇惑於群小之所致也。隋文帝將移周祚，尉遲迥起兵討之，孝寬為相州總管，中道而還，每至亭驛，盡驅其傳馬而去，使驛司具酒食以緩追騎，竟得達關中，此皆臨事之智，機數過人者也。北周以孝寬為行軍元帥，擊迥平之，綱目書法：不予孝寬而予迥，此正名義而書，為萬世立法者也。史稱孝寬雖在軍中，篤意文史，久在邊境，屢抗強敵，則其將略傑出一時，南朝未見有其比也。

朱异許敬宗

唐韓瑗來濟上疏高宗，請立武氏為后，許敬宗宣言於朝曰：田舍翁多收十斛麥，尚欲易婦，凡天子欲立后，何豫諸人事而妄生異議乎？此亦李勣陛下家事之說也。梁武帝使朱异宣語侯景使曰：譬如貧家畜十客五客，尚能得意，朕唯有一客，致有忿言，亦朕之失也。此雖帝語，鄙陋之甚，與敬宗田舍翁之語不甚相遠，他日景謁見臺城，帝神色不變，問曰：卿在軍中日久，無乃為勞，景不敢仰視，汗流被面，自謂天威難犯，十客五客之語，必不出於帝，而朱异為之也。小人情狀，異代同轍，焉得逃哉。

安祿山

安祿山在范陽，專制盧龍平盧河東三道，洞見唐室武備之弛，久蓄不臣之志，一旦反於漁陽，鼓行而南，河北二十四郡，望風而潰，明皇蒙塵，唐祚幾絕，賴汾陽臨淮諸將之力，肅宗得建中興之業，至今知與不知，聞祿山之名者，皆欲唾其面而扶其腦，此天理人心之公，所謂天下之惡一者也。然余觀其行師命將，知人善使，能得其死力，豈非古人所謂盜亦有道者歟？部下諸將如史思明、田承嗣、尹子奇、崔乾祐、蔡希德、安忠志、張孝忠、李懷仙、何千年、令狐潮、孫孝哲、阿史那承慶等，皆有材略，祿山滅而史思明、田承嗣、安忠志、李懷仙等，皆降于唐，降而復叛，思明之亂，酷於祿山，忠志賜姓名李寶臣，在成德，懷仙在盧龍，承嗣在魏博，肅代之間，擾亂河北，幾二十年，藩鎮之禍，訖至亡唐，唯張孝忠在易定，能盡臣節，而原其本，則皆祿山故將也。祿山唐叛臣之渠魁。

固不足道。而知人用將之略。亦不可盡沒。然其所知。止於知其類已者耳。若賢哲知人之明。則固非祿山輩所能及也。

史思明

史思明初名宰干。與安祿山同里閭。玄宗賞執奚會瓊高功。賜名思明。天寶中祿山擊契丹大敗。歸罪於左賢王哥解。及魚承仙而斬之。時思明為平盧兵馬使。懼而逃入山谷。近二旬。收散卒得七百人。平盧守將史定方。將精兵二千救祿山。契丹引去。祿山乃得免。至平盧。麾下皆亡。不知所出。思明出見祿山。祿山喜。起執其手曰。吾得汝。復何憂。思明退謂人曰。曷使早出。已與哥解并斬矣。其料祿山。如見肺腑。田承嗣世為盧龍小校。祿山以為前鋒兵馬使。嘗大雪。祿山按行諸營。至承嗣營。寂若無人。入閱士卒。無一人不在者。祿山以是重之。其在魏博。以石識惑李寶臣。使擊朱滔。如弄小兒於掌股之上。皆狡猾多智。桀黠難制者。宜其唐之諸將。難與爭鋒也。憲宗元和十年。東都留守呂元膺捕山棚賊。通鑑憲宗紀。東都西南接鄧州。皆高山深林。民不耕種。喜以射獵為生。人皆驍勇。謂之山棚。得其魁。按驗。則中岳寺僧圓淨。年八十餘。故嘗為思明將。勇悍過人。為淄青李師道謀襲洛陽。以師道錢千萬。陽為治佛光寺。結黨定謀。舉火為應。捕者既得之。奮鎚擊其脛。不能折。圓淨罵曰。鼠子折入脛且不能。敢稱健兒。乃自置其脛。教使折之。臨刑歎曰。誤我事。不得使洛城流血。黨與死者凡數千人。先是李師道使刺客殺同平章事武元衡。圓淨之謀。皆因緣其事。此又思明之餘黨也。

也。

家事

唐高宗欲立武昭儀為后。長孫無忌褚遂良等固執以為不可。他日李勣獨入見。對曰。此陛下家事。何必更問外人。帝意遂決。玄宗信讒。欲廢太子瑛鄂王瑒光王琚。召宰相謀之。李林甫對曰。此陛下家事。非臣等所宜豫。帝意乃決。太子二王皆賜死。德宗欲廢太子立舒王。太子即順宗。舒王諱代宗。孫昭靖太子適子。德宗姪也。與李泌謀之。通鑑注史昭曰。泌兵媚切。胡三省曰。薄必翻。唐鑑音注音郊。則當從入聲。泌固諫。帝曰。此朕家事。何豫於卿。而力爭如此。對曰。天子以四海為家。臣今獨任宰相之重。四海之內。一物失所。責歸于臣。况坐視太子冤橫而不言。臣罪大矣。事遂寢。然肅宗問泌。欲立張良娣為皇后。則對曰。家事當俟上皇。不然後代何以明。又肅宗問泌。欲立廣平王俶。代宗為太子。對曰。臣嘗固言之。家事當俟上皇。不然後代何以明。陛下靈武即位之意邪。是則鄴侯亦以立后立太子為家事。而必欲待上皇之命。則其意固與李勣李林甫迥異。而勣與林甫之罪。范淳父論之唐鑑備矣。林甫祖勣之言。而德宗亦有是言。苟非鄴侯之歷誠忠告。開悟主意。則太子必廢。而德宗蒙不慈之名矣。勣非唯不諫。又勸成之。不幾一言喪邦乎。三國志武宣卞皇后傳。周宣對魏文帝曰。此陛下家事。雖意欲爾而太后不聽。通鑑晉紀。武帝謂王戎曰。兄弟至親。今出齊王。齊王攸武帝弟。自是朕家事。然則魏晉間既有此語矣。

官家大家

漢人稱天子曰縣官。見前後漢書。通鑑晉成帝紀。趙王石虎太子邃謂李顏等曰。官家難稱。胡注。稱天子為官家。始見於此。西漢謂天子為縣官。東漢謂天子為國家。故兼而稱之。或曰五帝官天下。三王家天下。故兼稱之。唐昭宗紀。朱全忠謂寇彥卿曰。汝速至陝。即日促官家發來。注亦如上。漢元帝紀。陳湯曰。國家與公卿議。注此時已稱天子為國家。非至東都始然也。按漢書蓋寬饒傳。寬饒封事引易傳言。五帝官天下。三王家天下。蔡邕獨斷亦然。僧文瑩湘山野錄載宋真宗問李仲容以官家之義。仲容舉蔣濟萬機論以對。又呼為大家。唐李輔國謂肅宗曰。大家但居禁中。外事聽老奴處分。綱目集覽大家猶言天家。獨斷曰。天子無外。以天下為家。百官小吏。不敢指斥天子。故稱天家。親近侍官。則稱大家。北齊和士開祖斑讒河間王孝琬曰。文襄子。此言屬大家。胡注。此時已謂天子為大家。周師攻齊。晉州告急。高阿那肱曰。大家正為樂。齊師大敗。穆提婆勸齊主。溫公緯。走曰。大家去。大家去。後唐明宗疾少愈。守漏宮女曰。大家省事乎。有頃六宮皆至曰。大家還魂矣。胡注又云。唐時宮中率呼天子為宅家。昭宗紀韓建發兵圍十六宅。諸王呼曰。宅家救兒。劉季述等至思政殿。皇后趨出拜曰。軍容勿驚宅家。是也。此時季述為十軍容使。故云然。

謝道蘊

晉謝道蘊。奕之女。王凝之之妻。凝之羲之之子也。安帝義熙中。凝之為會稽內史。孫恩反攻會稽。凝之世奉張天師道。不出兵。亦不設備。日於道室。稽顙跪呪。恩陷會稽。凝之出走。恩執而殺之。

之。道蘊聞寇至。舉措自若。令婢肩輿。抽刀出門。手殺數人。乃被執。義烈之操。百世不磨。而世徒稱其柳絮因風起語。與為小郎解圍事。王獻之凝之弟。故稱小郎。則世之尚浮華而疏實行久矣。陳明卿以六字批通鑑曰。王無子。謝有女。褒貶之義盡矣。

勾當內侍

唐昭宗魏國夫人陳氏。才色冠後宮。帝以賜李克用。後克用薨。陳氏為尼。至晉天福中乃卒。為尼通鑑居正五代史。後醍醐帝賜勾當內侍於新田義貞。聞義貞殞命。亦削髮為尼。住嵯峨往生院側。守節而終。克用惡朱全忠。而志在興復唐室。義貞惡足利尊氏。而志在乘興返正。二帝之賜宮人。皆所以褒寵其忠純。而二宮人之志操。亦可嘉尚也。

李克用訟冤

通鑑唐僖宗惑張濬之言伐晉陽。李克用上表訟冤曰。朝廷當陸危之時。則譽臣為韓彭伊呂。及既安之後。則罵臣為戎羯胡夷。今天下握兵立功之人。獨不懼陛下他日之罵乎。德宗紀李懷光反。奉天危急。德宗加李晟河中同絳節度使。猶以為薄。又加同平章事。胡注。德宗當患難之時。進人若將加諸膝。當事定之後。退人若將墜諸淵。此正克用訟冤之意。而深中二帝膏肓之疾。然僖宗之昏闇。又甚於德宗。宜唐祚之日蹙矣。

真假

漢韓信請為假王以鎮齊。高祖罵曰。大丈夫定諸侯。即為真王耳。何以假為。唐末義勝節度使董昌謀反。將稱帝。集將佐議之。會稽令吳鐔曰。大王不欲為真諸侯以傳子孫。乃欲為假天子以取滅亡耶。昌族誅之。昌狂悖賊臣。卒為錢鏐所夷滅。真假之分。別矣。

玉體

東魏靜帝遜位于齊。下御坐。步就東廊。詠范蔚宗後漢書贊曰。獻生不辰。身播國屯。終我四百。永作虞賓。所司請發。帝曰。古人念遺簪弊履。朕欲與六宮別。乃步入六宮。與妃嬪別。舉宮皆哭。李嬪誦陳思王詩云。王其愛玉體。俱享黃髮期。此古今最傷心事也。文選李善注。玉體引七發及東觀漢記。按漢王吉諫昌邑王賀疏。數以奕脆之玉體。犯勤勞之煩毒。此亦可備善注之考據。

豆盧

明蔣之翹辨柳新註。繁簡各得其宜。評隲淨潔。往往發揮作者旨趣。然其間或有踈繆者。柳文送豆盧膺南遊序注云。豆姓不詳其始。但漢有豆如意。光武時伐匈奴。封關內侯。盧膺疑其裔也。按豆盧代北複姓。隋有豆盧通。唐有豆盧瑑。豆盧革。其餘多顯著者。隋書豆盧勣傳。勣本姓慕容。燕北地王精之後也。中山敗歸魏。北人謂歸義為豆盧。因氏焉。豈之翹偶失於考索耶。

杜詩

唐順宗時。王叔文王伾用事。蹤跡詭秘。勢將不測。宦官惡之。勸帝立廣陵王純為太子。即憲宗

也。中外大喜。而叔文獨有憂色。口不敢言。但吟杜甫題蜀相祠堂詩曰。出師未捷身先死。長使英雄淚滿襟。聞者哂之。宋宗澤為黃潛善汪伯彥所沮。憂憤成疾。將卒。亦誦此句與歎。竟無一語及家事。但連呼過河者三。夫誦杜詩一也。叔文之為人。人皆鄙之。無稱之者。澤之忠義。有以風動天下後世。至今人皆稱之。此邪正之所由判歟。

大言無實

呂太后怒冒頓單于媿書。議發兵擊之。樊噲曰。臣願得十萬衆。橫行匈奴中。季布以為噲妄言可斬也。北齊盧詢祖賀破蠕。表所云。昔十萬橫行。樊將軍請而受屈。五千深入。李都尉降而不歸。婦人宛翻。表辭見北史盧詢祖傳。野客叢書。亦舉此語云。十萬橫行。五千深入。此八字已先見於梁。引王僧孺書任孝恭表。今考時世。詢祖在前。恐二人祖之耳。上句謂此也。然使噲將兵擊匈奴。縱不能橫行。亦能立效。必不至如後世姦諛輩徒大言以取容悅也。北周武帝伐北齊。安吐根言於齊後主曰。一撮許賊。馬上刺取。擲著汾水中耳。後晉景延廣謂契丹使曰。翁怒則來戰。我有十萬橫磨劍。足以相待。他日為孫所敗。取笑天下無悔也。晉高祖稱臣契丹。約為父子。未幾齊晉皆亡。可見大言無實。徒誤邦家。若二人者。真舞陽侯之罪人也。

我甲在心

晉朱伺曰。諸人以舌擊賊。伺惟以力耳。燕慕容農垂子曰。彼甲在人。我甲在心。岳武穆曰。陣而後戰。兵法之常。運用之妙。存乎一心。伺之言。警世之議論可聽。而無實效者。農之言。謂

士心欲鬪。則雖無甲冑而勇于赴戰。武穆之言。謂兵無常勢。臨機制敵。皆名言也。後唐明宗為將時嘗曰。諸君喜以口擊賊。嗣源但以手擊賊耳。此又祖伺之言者也。

居士

輟耕錄曰。今人以居士自號者甚多。考之六經中。惟禮記玉藻有曰。居士錦帶。注謂道藝處士也。其說甚備。按三國志胡昭傳。昭居陸渾山中。躬耕樂道。以經籍自娛。寇賊到陸渾南。自相約誓言。胡居士賢者也。一不得犯其部類。此蓋胡昭為處士時事也。南史阮孝緒。到洽。時人號曰居士。北史盧景裕謙恭守道。世號居士。至南北時。則其稱多矣。宋史李格非女清照善詩文。尤有稱於時。嫁趙明誠。自號易安居士。周密齊東野語曰。黃子由尚書夫人胡氏。俊敏強記。善筆札。時作詩文亦可觀。自號惠齋居士。時人比之李易安云。夫婦女而冒居士之號。恐其奪晨。亦甚異矣。然唐德宗尚宮宋若華與四妹皆有文學。宮中呼為學士先生。則非無比例矣。

四六

三事

四六用於表牋奏疏。取其便讀。而至宋歐蘇。極其精工。神宗即位。以司馬溫公為翰林學士。公力辭曰。臣不能為四六。帝曰。如兩漢制詔可也。且卿能取進士高第。而云不能四六。何耶。公乃就職。由是觀之。當時所尚可知也。南渡以後。三洪尤長于此。容齋隨筆題云。吾家四六。而舉其警策。皆可誦也。其要在能融會經史。化為己語。開陳時事。感動人心。元祐皇后立高宗繼統。

詔。汪龍溪所草有二。漢家之厄十世。宜光武之中興。獻公之子九人。唯重耳之獨在。哲宗實錄成。趙忠定入相。制詞呂本中所草有二。合晉楚之成。不若尊王而賤霸。散牛李之黨。更須明是以去非。金主亮入寇。高宗親征詔。洪容齋所草有二。歲星臨于吳分。定成淝水之勳。鬪士倍于晉師。可決韓原之勝。皆切事機。激勵士庶之心。有助於教化者也。其餘鶴林玉露困學紀聞等所載。班班可見。真西山亦工於此。其進大學衍義表有云。雖其兜羅進于堯朝。豈魑魅能逃于禹鼎。此時史彌遠當國。排抑西山。理宗惑之。故言及之。甚切時事。明左良玉移南都檄。然董卓之臍。膏溢三旬。籍元載之厨。椒盈八百。指斥馬士英之姦。亦甚痛快。清谷應泰明紀事本末論斷。皆用四六。蓋效晉書論贊之體。而洗刷綺靡。錯綜古今。似或過之。然終不能及元人作宋遼金三史贊。古雅簡潔能得體也。

使事用古不用近。不特四六。凡為文皆當然耳。然有能合機宜事理允愜者。則不必拘。理宗朝趙葵為右丞相。言者論葵非由科目進。且曰宰相須用讀書人。此用太祖稱竇儼語。葵因力辭。其表有云。霍光不學無術。每思張詠之語以自慚。后稷所讀何書。敢以趙抃之言而自解。按不學無術。漢書霍光傳贊語。又按趙清獻本語。舉舉稷契之時。何書可讀。此作后稷以對霍光耳。東坡雪堂既毀。紹興中黃州一道士再營建。士人何頡作上梁文。其一聯云。前身化鶴。曾陪赤壁之游。故事換鵝。無復黃庭之字。此皆用近世語。極為親切。文丞相賀趙月山啓云。長江為備不敷處。可共險於敵人。朝廷用兵三十年。當成功於儒者。下句用劉錡語。尤近。

世事也。苗傳劉正彥之亂。張德遠舟迎呂願浩。咨以大計。願浩曰。曩諫開邊。幾死宦官之手。承乏漕輓。幾陷腥膻之域。此雖史筆潤色。謂之宋人言語自成。四六亦可也。金湯王亮有意南侵。校獵國中。一日而獲熊三十六。廷試多士。遂以命題。施宜生奏賦曰。聖天子講武功。雲屯八百萬騎。日射三十六熊。亮覽而喜。擢為第一。此非有本據。直敘當日事。而儷語之工者也。宜生恒有首丘之志。事覺。為金主所烹。事詳本史。

酒顛童子

文獻通考經籍考晁氏曰。白猿傳。不詳何人撰述。梁大同末。歐陽紇妻為猿所竊。後生子詢。崇文總目以為唐人惡詢者為之。後村劉氏曰。歐陽率更。詢為太子率更。貌寢。長孫無忌嘲之曰。誰令麟閣上畫此一獼猴。好事者遂造白猿之說。謗及其親。余嘗聞酒顛童子事。好事者剽竊白猿傳而敷衍之。據劉後村之說。則白猿傳本無其事。而好事者為之。酒顛童子亦無其事。而假白猿傳以實之。此何異於夢中說夢。縱有之。不過大江山一巨盜耳。若趙王石虎太子邃。則可謂真酒顛童子者也。邃嗜酒殘忍。好妝飾美姬。斬其首。洗血置盤上。與賓客傳觀之。又烹其肉共食之。備載晉書十六國春秋及通鑑。此非酒顛童子而何。後唐李贊華。遼太祖子東丹王突欲。好飲人血。姬妾多刺臂以吮之。婢僕小過。或抉目。或刀封火灼。此二人之所為。無復人理。皆酒顛童子之徒也。

尊勝隊

宋汴京陷。陝西宣撫使范致虛帥師入援。以僧趙宗印為參議官。宗印以僧為一軍。號尊勝隊。童行為一軍。號爭勝隊。宗印徒大言。實未嘗知兵。遇金將婁宿。不戰而潰。死者過半。後醍醐帝使小野僧正文觀。將兵擊足利尊氏。交鋒輒敗。其以童行為一隊。亦猶秦苻堅之少年都統。饜庭氏直之花一揆。皆取敗之道也。凡為僧者。不可干預政事。而況將兵乎。近世僧永覺有云。僧家寄跡寰中。棲身物表。於一切塵氛。尙當謝絕。况可貪祿位乎。一切文事。尙不可與。况可操武事乎。自元時劉秉忠首開此禁。繼而姚廣孝效之。貪謬妄之勳名。破慈悲之大化。佛門中萬世之罪人也。彼徒中已有覷破者矣。

滕元發

宋元通鑑神宗熙寧元年。帝召滕甫曰。卿知君子小人之黨乎。曰君子無黨。譬之草木。綢繆相附者必蔓草。非松栢也。朝廷無朋黨。雖中主可以濟。不然雖上聖亦殆。帝以為名言。乃以甫為翰林學士。八年載滕元發之言。全與此同。疑其重複。考宋史本傳。滕元發初名甫字元發。以避高魯王諱。改字為名。而字達道。其對神宗之言即此也。薛方山以為二人。偶失考索也。按通鑑唐武宗即位。李德裕言于帝曰。正人指邪人為邪。邪人亦指正人為邪。人主辨之甚難。臣以為正人如松栢。特立不倚。邪人如藤蘿。非附他物。不能自起。元發之對。蓋祖德裕之言。陸放翁老學庵筆記曰。王荆公素不樂滕元發鄭毅夫。目為滕屠鄭酷。然二公天資豪邁。殊不病其言。觀之則元發固

以松栢自期 殆非虛語也。

陳簡齋

簡齋陳與義 以墨梅詩受知徽宗 高宗移蹕建康 召為參知政事 趙忠定為相 以恢復為己任 秦檜力主和議 百計陷之 忠定建議 中原有可圖之勢 宜便進兵 與義曰 若和議成 豈不賢於用兵 高宗然之 夫中興事業 孰有大於恢復者哉 與義既參大政 與開軍國之事 雖不聞其阿附秦檜 而所言如此 則緩急何所賴哉 宋史本傳稱與義尤長於詩 體物寓興 清邃紆餘 高舉橫厲 上下陶謝韋柳之間 鶴林玉露亦云 自陳黃之後 詩人無逾陳簡齋 其詩錄簡古而發穠纖 值靖康之亂 崎嶇流落 感時恨別 頗有一飯不忘君之意 其詩為人所稱許如此 然當天步艱難之日 不得其位則已 既得其位不能協贊恢復之謀 而進和議以逢迎一時 恐終不免君子之譏 其避亂華容縣詩曰 腐儒憂平生 况復值甲兵 終然無寸策 白髮滿頭生 詩語雖工 而實無寸策者也

霍光傳

後漢靈帝時 中常侍趙忠夏惲等譖呂強云 與黨人共議朝廷 數讀霍光傳 言其欲謀廢立也 晉桓溫欲行廢立 而百官莫有識其典故者 左僕射王彪之命取霍光傳 禮度儀制 定於須臾 此真行廢立者 而彪之江左名臣 非黨于溫者 知事不可止也 東魏大將軍高澄謂濟陰王暉業 景穆玄

孫 小新成曾孫 曰 此讀何書 暉業曰 數尋伊霍之傳 不讀曹馬之書 此謂伊霍輔少主曹馬篡國也 東漢宦者剛直盡忠者 唯呂強一人 終為忠惲等所構自殺 暉業面以曹馬擬文襄 亦剛直之士也

洪忠宣

洪忠宣開泰寺功德疏 宋史本傳 略而不載 但云皓開祐陵 徽宗 訃 北嚮泣血 旦夕臨 諱日操文以祭 其辭激烈 舊臣讀之皆揮涕 今考容齋隨筆舉於此 宋元通鑑 名臣言行錄續集亦載之 蓋據隨筆也 其辭曰 千歲厭世 莫遂乘雲之仙 四海遏音 同深喪考之戚 况故宮為禾黍 改館徒饋於秦牢 新廟游衣冠 招魂漫歌于楚些 雖置河東之賦 莫止江南之哀 遺民失望而痛心 孤臣久繫惟歐血 伏願盛德之祀 傳百世以彌昌 在天之靈 繼三后而不朽 金人讀之 亦為之墮淚 朱弁亦有送徽宗大行之文 其辭有曰 歎馬角之未生 魂消雪窖 攀龍髯而莫逮 淚洒水天 皆忠義之言 至今令人讀之感慨 本傳又云 皓留北中凡十五年 同時使者十三人 惟皓及張邵朱弁得生還 而忠義之聲聞于天下者 獨皓而已 惟為秦檜所嫉 不死於敵國 乃死於讒慝 真知言哉

滕茂實

滕茂實字秀穎 靖康初使金 囚於雲中 竟以憂憤成疾而死 齊東野語載姚孝錫題茂實祠詩曰

本期蘇鄭共揚鑣。蘇鄭蓋指蘇武鄭衆也。不意芝蘭先後凋。遺老祇今猶涕淚。後生無復識風標。西陲雁度霜前塞。淖水樵爭日暮橋。追想平生英偉魄。凌雲一笑豈能招。亦悲壯可誦。故載于此。宋景濂滕奉使贊曰。茂實獨留雁門。終身不再仕。臨沒令以黃幡裹屍而葬。仍刻石識云。宋使者東陽滕茂實墓。此殆不事二君者歟。宋史本傳亦載此事。

汪水雲

輟耕錄曰。汪元量號水雲。天兵平杭日有詩曰。西塞山邊日落處。北關門外雨來天。南人墮淚北人笑。臣甫低頭拜杜鵑。此語悲哽感人。堯山堂外紀曰。度宗時。元量以善琴出入宮掖。從三宮。恭宗。理宗。后謝氏。度宗后全氏。北去。留滯燕京。有詩一帙。皆敘宋亡事。嘗和故宮人李清惠詩。全篇載在外紀。今摘其一聯曰。萬葉秋聲孤館夢。一窻寒月故鄉心。頗有中晚之風調。輟耕錄又曰。寄語林和靖。梅花幾度開。黃金臺下客。應是不歸來。此宋幼主在京都所作也。幼主即恭宗。元降封瀛國公。始終二十字。含蓄無限淒感意思。讀之而不興感者幾希。外紀則曰。少帝之寓燕京也。淒涼無賴。時汪水雲以黃冠放歸。少帝作詩送之云。黃金臺上客。底事又思家。歸問林和靖。寒梅幾度花。二書不同如此。外紀似得事由。而詩以輟耕錄所載為勝。未知孰是。

謝疊山

千金而募徙木。將取信於市人。二卵而棄干城。豈可聞於隣國。此謝疊山上賈似道書中語也。上

句用商鞅事。下句用子思言苟變事。此時似道專權。忌武將有功。誣支取官物以陷之。疊山自償萬緡。救音撫趙葵。餘不能辨。故上此書。遂得免徵餘。宋元通鑑曰。枋得知信州。經鉛山分水嶺下。過辛弃疾墓。旁僧舍有疾聲。大呼于堂上。若鳴其不平者。自昏暮至丙夜不絕聲。枋得秉燭作文。且且察之。文成而聲始息。枋得請于朝。加贈弃疾少師。諡忠敏。按弃疾字幼安。號稼軒。慷慨有志節。持論勁直。不為迎合。此必義氣有所感動者。余固陋寡聞。恒以未見其文為憾。如却聘書臨行詩。至今天下皆誦之。真可以使頑夫廉懦夫立矣。堯山堂外紀載蔡正孫和臨行詩及張叔仁送行詩云。枋得會其意甚稱之。至燕不食而死。疊山重名義。決死生。固無所資於諸友之勸勉。而叔仁詩會其心者。以有此去好憑三寸舌。再來不直一文錢一聯也。上句用留侯通語。下句用灌夫語。亦甚激切矣。蓋其節義文章。磊落軒昂。亘萬世而不可泯。義之盡。仁之至。當與文丞相無所優劣。宋元紀事本末。合二公而書之。標曰文謝之死。明舒芬輯二公之詩文。題曰文謝成仁遺藁。宜哉。

陶南村

二事

陶南村輟耕錄事類浩博。考據精確。其言元事尤詳。足為旁據。如忠烈評李黼。樊執敬。王伯顏。林夢正。楊秉。蕭景茂。老苗評楊完者。越民考評邁里古思。歷舉時事。文字亦跌宕可喜。堯山堂外紀曰。至正間九成避兵雲間泗濱。其地有林泉之勝。同時嘉遜者。皆文人高士。因做司馬溫公故事。

作約語。輟耕錄亦載之。其中有云。節序駸駸。莫負芒屨竹杖。盃盤草草。何慚野蕪山肴。想其著書時。胸中有無窮感慨。多少蘊蓄。而時或發之於南村野史之論也。宋景濂稱其積學能文辭。嘗覽雜傳記一千餘家。多士林所未見者。則其博洽可知矣。

輟耕錄亦有往往失於點檢者。蓋載筆該博。自然不免此累。今姑舉一二。非敢據撫前人之失。恐覽者之為所誤也。婦女曰娘曰。考史。隋柴紹妻李氏起兵應李淵。與紹各置莫府。號娘子軍。唐平陽公主兵與秦王定京師。號娘子軍。據唐書。柴紹妻李氏。即平陽公主。而高祖女也。此作二事。非也。經紀曰。今人以善能營生者為經紀。唐滕王元嬰與蔣王惲皆好聚斂。太宗嘗賜諸王帛。勅曰。滕叔蔣兄。自能經紀。不須賜物。據唐書通鑑。此高宗之敕。而非太宗也。滕王元嬰。高祖之子。蔣王惲。太宗之子。高宗之兄。故云滕叔蔣兄。若太宗則不得謂之叔兄也。又云。不耐煩三字。見宋書庾登之弟仲文傳。按晉稽康絕交書。心不耐煩。而官事鞅掌。豈南村偶不及之耶。

冬青行

元世祖以西僧楊璉真加。為江南僧統。利宋殯宮金玉。發諸陵在紹興者。又欲哀諸陵骨雜牛馬枯骨。為鎮南浮屠。有義士痛憤。結諸惡少。夜往取遺骸。葬蘭亭山後。又移宋故宮冬青樹。植其上以識。聞者悲之。輟耕錄備載其事。義士為林景熙。或以為唐珣。明李西涯作冬青行曰。高家陵。孝家陵。鱗骨盡蛻竟無靈。唐義士。林義士。野史傳疑定誰是。玉魚金粟俱塵沙。何須更問冬青花。

徽欽不歸梓宮復。二百年來空朽木。穆陵理宗遺幣君莫悲。得葬江南一抔足。此又兩存唐林。無所決擇。而詩亦勁健悲壯。讀之令人興感。宋元通鑑定為唐珣。薛方山在西涯之後。蓋有所據。然不如兩存其說。而為二義士之所為也。徐燭又在方山之後。筆精論之。以為輟耕錄云唐收者諸陵骨。林收者高孝兩陵骨。故林詩中有雙匣之語。皆拘方之見也。當時發掘陵寢。二義士協力收瘞。共賦冬青行三首以紀其事。是以唐林二集俱載。陶九成謂林詩誤入於唐集。尤拘泥也。此說為長。夷白齋詩話曰。西湖飛來峰壁上佛像。是勝國時楊璉真加也。方棠陵豪字思道號棠陵。索筆而題曰。飛來峰天奇也。自楊總統琢之。則天奇損矣。夫楊璉真加罪通于天。到處為人所厭棄。其在江南。以威脅制緇徒。據輟耕錄。杭瑪瑙寺僧日觀。善畫蒲萄。性嗜酒。然楊總統飲以酒。則不一沾唇。見輟罵曰。掘墳賊。圖繪寶鑑曰。僧子温字仲言。號日觀。又號知歸子。作水墨蒲萄。自成一方法。日觀所畫蒲萄。今人多稱賞。故偶及之。

林景熙

林德陽字景熙。輟耕錄無作。號霽山。為宋大學生。有詩名。堯山堂外紀曰。厓山兵潰。陸秀夫負帝同溺。或畫為圖。景熙賦詩曰。紫宸黃閣共樓船。海氣昏昏日月偏。平地已無行在所。丹心猶數中興年。生藏魚腹不見水。宋景濂陸秀夫像贊曰。身抱龍鬚。今眼不見水。死抱龍鬚直上天。板蕩純臣有如此。流芳千古更無前。家鉉翁為祈請使北行。抗節不屈。拘留河間。世祖崩。成宗即位。始賜衣服。遣還鄉里。年逾八

十矣。景熙有詩送之曰。瀕死孤臣雪滿顛。水蘊蓄盡偶生全。衣冠萬里風塵老。名節千年日月懸。清暎秋荒遼海鶴。古魂春老蜀山鵲。歸來親舊驚相問。禾黍離離夕照邊。皆淒惋動人。殆有唐人之風致焉。

郝文忠

輟耕錄引霍治書曰。楊煥然讀通鑑。至論漢魏正閏。大不平之。遂修漢書。駁正其事。因作詩云。風煙慘淡駐三巴。漢燼將然蜀婦髻。欲起溫公問書法。武侯入寇寇誰家。後攻宋軍廻。始見通鑑綱目。其書乃寢。劉道濟尤不平之。修書名三爲。亦見綱目。闕而不行。中統改元郝伯常使宋。郝經字伯常諡文忠。被留儀真。執不得還。就買書。作續漢史既脫橐。會同僚苟正甫諸公飲。忽長歎曰。某辛苦十餘年。莫不被高頭巾輩已做了也。皆對云不聞之。至元丁亥。余分臺江西。購得蕭常續漢書。因喟然曰。惜乎郝君不及見此。按高頭巾輩指華人也。據宋元通鑑元文類。續漢史當作續後漢書。文類載其序。今舉其略曰。奮昭烈之幽光。揭孔明之盛心。祛操丕之鬼蜮。破懿昭之城府。明道術。闢異端。辨姦邪。表風節。甄義烈。核正僞。曲折隱奧。傳之義理。徵之典則。而原於道德。推本六經之初。直補二史之後。千載之敝。一旦廓然矣。古之爲書。大抵聖賢道否。發憤而作。屈平離騷。馬遷史記。皆是也。然皆瞠味一時。流光百世。故韓愈謂以彼校此。孰得孰失。今拘幽之極而集是書。蓋亦古人之志也。余雖不得見其書。讀此序。想見義例之嚴。萬曆中謝少連

作季漢書。余嘗閱之。亦無大發明處。蓋祖楊劉諸子之說也。伯常博覽無不通。爲學務有用。拘真州忠勇軍十六年。志操不少撓。其上理宗書。論南北之形勢。言生民之休戚。精覈明審。真經世之大才也。雁足帛書五十九字。輟耕錄載之。以爲元世祖見之。興師伐宋。宋景濂不然其說。題帛書後曰。蘇武雁書。特出一時假托之辭。非有事實也。今當一介行使不通之際。雁乃能遠離贈繳。而將公書到汴。其殆天欲顯公之忠節耶。或謂世祖見書有四十騎留江南無一人如雁之嘆。遂興師伐宋。皆好事者傳會之談。而不知有信史者也。濂修元史。既錄詩入公傳。今復書歲月先後於卷末。以見雁誠能傳書云。蓋至元十一年。世祖伐宋。十三年二月。賈似道送還伯常於元。三月虞人獲雁於汴梁金明池。四月伯常至燕都。故獲者不以聞。其年七月伯常卒。至仁宗延祐五年。奏帛書於朝。詔裝潢成卷。命翰林集賢文臣各題識之。其辨證甚明。見本集。宋元通鑑載帛書事。不取南村之說。亦據元史本傳也。僧周鳳。瑞溪。夢語集載全文。云見宋景濂文粹。蓋當鳳時。全集未至本邦也。

余忠宣

元順帝至正中。陳友諒破安慶。淮南行省右丞余闕死之。闕字廷心。諡忠宣。宋景濂作傳。敘其事贊曰。於戲。闕真人豪也哉。獨守孤城逾六年。小大二百餘戰。戰必勝。其所用者。不過民間兵數千。初非有熊虎十萬之師。直激之以忠義。故甘心效死而不可奪也。雖不幸糧絕城陷以死。而其忠精之

氣 炯炯上貫霄漢。必聚爲列星。流爲風雲。散爲卿雲。凝爲瑞露。闕雖死而不可死者。固自若也。然而闕死於君。而能使妻死於夫。子死於父。忠孝貞節。萃於一門。較之晋卞壺家。又似過之矣。於戲。闕果人豪也哉。余來江左。見其門生故吏言闕事。多至泣下。因想見戰守處。江流有聲。而斷雲落日。淒迷於莽蒼間。猶足以動人悲思。因按其行事成傳。以示爲人臣者。今檢元史列傳。皆無贊語。此傳景濂所私撰者。贊亦非史家正體。然其筆力。奔放雄健。淋漓慷慨。殆不下於歐陽五代史贊。能使讀者想見忠宣之義烈。故據本集錄之。胡元瑞詩數曰。元人制作。大概諸家如一。唯余廷心古詩近體。咸規倣六朝。清新明麗。頗自足賞。惜中厄王事。使成就。當有可觀。堯山堂外紀載忠宣詩。皆有風致可誦。雖忠義稟於天性。亦有資於學術。蓋張睢陽之流亞也。元瑞惜其詩不能成就。余謂中厄王事。故能成就大節。詩特餘事耳。練子寧過安慶。謁余忠宣祠詩曰。將軍忠節冠荆楊。千載精神日月光。血戰孤城身已殞。名垂青史汗猶香。殘碑墮淚空秋草。折戟沈沙自夕陽。我亦有懷追國士。爲君感慨奠椒觴。子寧抗節靖難之師。不特詩句凌轢唐宋。亦能追蹤忠宣者也。景濂又有題余廷心篆書後文。其畧云。君子稱其大節與日月爭光。信哉。公文與詩。皆超逸絕倫。書亦清勁。與人相類。公唐兀氏。余闕其名也。據輟耕錄。唐兀氏色目氏族而非華人。益可貴也。

湖亭涉筆卷之二終

湖亭涉筆卷之三

澹泊齋安積覺 著

內道場

唐太宗嘗曰。梁武帝君臣。惟談苦空。侯景之亂。百官不能乘馬。元帝爲周師所圍。猶講老子。百官戎服以聽。此深足爲戒。朕所好者。唯堯舜周孔之道。以爲如鳥有翼。如魚有水。失之則死。不可暫無耳。至哉太宗之言也。以此訓子孫。子孫猶不能遵守。肅宗置道場于麟德殿。以宮人爲佛菩薩。武士爲金剛神王。召大臣膜拜圍繞。代宗置百高座於資聖西明兩寺。講仁王經。內出經二寶輿。以人爲菩薩鬼神之狀。導以音樂鹵簿。百官迎于光順門外。憲宗迎佛骨。留禁中三日。其後懿宗亦迎之。膜拜流涕。尊禮之甚。過於元和之時。而竟無補於裘甫龐勛之亂。唐室自此衰矣。蓋自後漢永平以來。臣民雖有奉其法者。而天子未之好。桓帝始篤好之。至晉孝武帝。立精舍於殿內。引諸沙門居之。內道場之設。權輿于此。先是趙王石勒敬佛圖澄。秦王苻堅禮支道安。其法寔盛。至後秦王姚興。以鳩摩羅什爲國師。奉之如神。翻譯經論。大營塔寺。公卿以下皆奉佛。南

北翁然化之。正當孝武之世也。初代宗未甚重佛。元載王縉杜鴻漸為相。三人皆好佛。帝嘗問以報應之說。載等奏福業已定。雖時有小災。終不能為害。豈得言無報應也。帝惑其說。常於禁中飯僧百餘人。有寇至則令僧講仁王經以禳之。寇去則厚加賞賜。及朱泚反。圍德宗於奉天。賊勢甚熾。使西明寺僧法堅造攻具。毀佛寺以為梯衝。代宗飯僧以求利益。朱泚造攻具以攻奉天。其效可觀矣。大學衍義詳論其弊。以為南唐李煜亦祖是轍。梵唄未終而城堞不守矣。綱目發明亦論此事曰。邊候不置而置百高座。國政不講而講仁王經。大曆之政。日以紊矣。蓋元載王縉等每侍代宗多談佛事。臣民承化。皆廢人事而奉佛。杜鴻漸臨薨。剔髮為僧。王縉捨其第為寺。此風一開。不特當時響應。浸淫至于皇朝。設內道場。講仁王經。遂為朝廷典故。攝關三公。剝染營建。爭効其為。更有甚焉。人主能好太宗之所好。則不為異教所惑矣。若論佛之害。則程朱之說盡之。而唐書李蔚傳贊。亦能探其本。而朱子所謂捉得他正賊者也。或曰西山之論。固無可訾。然帝昺在舟中。陸秀夫日書大學章句以勸講。靖難師逼京畿。建文討論周官法度。此與梵唄未終而城堞不守者相去幾何。為儒學者。亦豈得曰無弊乎。曰不然。孝子順孫。不以父祖十死之病而廢醫藥。秀夫之心。以為天若未欲絕宋。則中興可冀。不立大本。何以為國乎。建文之周官。固迂濶矣。然江陵金陵之亡。曾有一人抗節如文謝者乎。又有如方練諸君子之忠烈者乎。下至雪庵和尚東湖樵夫河西傭補鍋匠之類。莫不慕仁彊義各行其志。儒學之維持綱常。其所關係甚大。以此況彼。誠不可

同日而語矣。

奉為

皇朝表白文。多用奉為字。通鑑梁武帝紀。東魏大將軍高澄謂貞陽侯蕭淵明武帝姪。長沙王懿子。曰。開彼禮佛文云。奉オホシタメニ為魏主。并及先王。獻武王高歡此乃梁主厚意。容齋隨筆載饒州紫極觀唐鐘銘曰。天水郡開國公上官經野妻。扶風郡君韋氏。奉為開元天地大寶聖文神武應道皇帝。玄宗敬造洪鐘一口。則其所自來遠矣。

法王

佛祖統紀天台智者傳曰。南岳造金字般若。命師代講。手持如意。臨席讚之曰。可謂法付法臣法王無事。續日本紀稱德紀。天平神護二年。詔授太政大臣道鏡禪師法王位。圓興禪師法臣位。明年始置法王宮職。南岳之語。所以獎贊智者。而道鏡之位。萌蘗覬覦之漸。蓋所依倣智者。而污穢宮禁。則辭懷義之流也。

總持

統紀智者傳又云。開皇十一年。晉王為總管。十一月於總管大廳事。設千僧齋。授菩薩戒。法師謂王曰。大王紆遵聖禁。可名總持。王贊師曰。大師傳佛法燈。宜稱智者。所謂晉王。即煬帝也。煬帝即位。淫虐日甚。終至覆亡社稷。菩薩戒法。果如是哉。智者豈不可與言而與之言者乎。其受

煬帝之稱贊，必以為辱而不以為榮。然空門宏大，其為方便利益授之受之，則非俗子之所知也。

不空三藏

高僧傳不空三藏傳曰：天寶中，西蕃大石康三國，帥兵圍西涼府。玄宗詔空入御于道場，空秉香爐誦仁王密語二七遍。帝見神兵可五百員，在于殿庭，驚問空。空曰：毘沙門天子，領兵救安西。請急設食發遣。西涼果奏，城東北三十許里，雲霧間見。神兵長偉，鼓角諠鳴，山地崩震。蕃部驚潰，彼營壘中有鼠金色。昨弓弩弦皆絕。城北門樓有光明天王怒視，蕃帥大奔。帝覽奏謝空，因敕諸道城樓置天王像，此其始也。夫不空三藏，傳金剛智之密法，祈雨斃蟒，皆有靈異，其事或不誣矣。然天下與涼州孰大孰小。安史與西蕃孰重孰輕。玄肅二帝，尊信其法極矣。何不於安史叛亂之時，使之召陰兵以救社稷乎。城樓所置天王像，亦何不於此時振靈威以攘大寇乎。其徒必曰此宿因所感，非智力所能及。則其法有時而窮，非宏大殊勝之道矣。肅宗終身不悟，尊寵不空，授以高班好爵，其惑滋甚。而瑜珈密教傳于本邦，亦基于此矣。宋魯應龍括異志曰：秀州子城有天王樓，建炎間，金人犯順，蘇秀大擾將屠之。有天王現於城上，若數間屋大，兵卒望之怖懼，遂引去。一州之境獲免，信如此則城樓天王，至宋而著靈威矣。然金寇遍天下，猶秀州天王像有靈威，而他州則不然，此又何哉。不過荒唐之說而已。

三門

曾南豐仙都觀三門記曰：門之作，取備豫而已。然天子諸侯大夫，各有制度，加於度則譏之。見於易禮記春秋，其旁三門，門三塗，唯王城為然。老子之教行天下，其宮視天子，或過焉，其門亦三之。其備豫之意，蓋本於易，其加於度，則知禮者所不能損。知春秋者所太息而已。甚矣其法之蕃昌也。蓋唐玄宗宋真宗崇尚道教，宮觀殆遍天下，此南豐所以與歎也。皇朝斥道教而不用，固一美事。然釋教之盛，恐異域之所不逮。三門巍然，施於伽藍，觀者恬然以為此乃佛家之制，豈復知為備豫之義乎。嗚呼使南豐見之，其與歎，又當何如哉。

禪學

二事

張橫渠曰：大易不言有無，言有無，諸子之陋也。此兼佛老而言也。晉時王弼何晏祖尚老莊，立論以為天地萬物，皆以無為本，故裴頠著崇有論，熊遠應詹上疏極言其弊，而不能救清談之禍，遂至五胡亂華。范甯謂王何之罪，深於桀紂，後來有禪者起，其說一如鏡中之相，水中之月，不可捉摸。龐居士曰：但願空諸所有，切勿實諸所無。永覺曰：佛氏有無二義，與世俗迥別。故世俗少有信者，佛所謂有，必其歷劫常存，不可少損者謂之有，佛所謂無，必其刻刻不住，不可常存者謂之無。故佛之所有，天下莫能無，佛之所無，天下莫能有，乃究竟之實法也。其言較親密，故好之者，往往易惑其說。余未能究性理之學，亦不喜讀釋老之書，但就其極麤笨極淺近處論之。劉宋沈懷文稱江智淵曰：人所應有盡有，人所應無盡無者，其唯江智淵乎。蓋人所應有者，孝弟忠信禮

義廉恥等事。而人所應無者。不孝不弟。不忠不信。無禮義無廉恥等事也。苟能體驗此語。存其所應有。去其所應無。則縱不能入聖賢之域。亦不失為一鄉之善士。如此看有無。禪者必毀斥而儒者亦鄙之。然皓首寡陋。實無所得。世之君子。必有察精微而析異同。起而能救其弊者矣。佛敎之盛。至於元極矣。前此未有帝師者。世祖迎西僧八思巴。立為帝師。所謂皇天之下一人之上者。尊重無其比。至英宗時。立帝師殿於各路。嘗攷元史。有國師膽巴者。幼從西天竺古達麻失利。傳習梵秘。中統間懷孟大旱。世祖命禱之。立雨。又嘗呪食投龍湫。頃之奇花異果上尊。湧出波面。取以上進。世祖大悅。泰定間以帝師弟公哥亦思監將至。詔中書。持羊酒郊勞。而弟子之號司空司徒國公。佩金玉印章者。前後相望。為其徒者。估勢恣睢。日新月盛。氣燄薰灼。為害不可勝言。余竊謂膽巴之流。佛氏謂之神通。其實不過幻術耳。帝師之末流。至順帝時。變為大喜樂禪定。儉安牀第之上。不知萬姓之籲天。社稷丘墟。徒資興王之驅除。帝師擁護之力。果安在哉。當此時。禪林老宿。如雲峯中峯古林虛谷之徒。以明心見性之要。指導世俗。枯槁冷淡。屹然不動。聞帝師之尊寵。若將浼焉。蓋禪學興於少林。盛於曹溪。極於大慧。少林直指人心。曹溪敎存養工夫。大慧務靜坐體究。故諸儒往往喜其說。雖程門諸子。亦有流而不知返者。況其餘乎。自宋以來。其弊皆然。今此舉元而言者。西僧之弊在事。其迹易見。禪法之害在心。其說最高。而學者易陷溺。楊慈湖趙東山之於陸象山。其源皆從禪學中出。則其害有不可勝言者矣。

知幾

楚王戊 元王交之孫 忘設醴酒而穆生去 曰不去 楚人將鉗我於市 王莽殺子宇 而逢萌挂冠東都城門 曰不去 禍將及人 此皆知幾者也 晉武帝以賈充都督秦涼二州軍事 將之任 公卿餞於夕陽亭 荀勗說充 結婚太子 是為惠帝賈皇后 晉室之亂 實基于此 故邵康節曰 禍在夕陽亭之一語 而不在石勒長嘯上東門之時 唐崔羣對憲宗曰 人皆以天寶十四年安祿山反為亂之始 臣獨以為開元二十四年罷張九齡相 專任李林甫 此理亂之所分也 范淳父以為至言 此以人事推之而治亂所由 天人未嘗相離也 崔羣邵子皆論之於事後 而其意則以知幾為主 易曰知幾其神乎 若邵子天津橋上之言 則又非穆生逢萌之所能及 而先天之學 因事發見者也

龜山論唐亂

楊龜山曰 天下之變 不起於四方 而起於朝廷 譬如人之傷氣則寒暑易侵 木之傷心 則風雨易折 故內有林甫之奸 則外必有祿山之亂 內有盧杞之姦 則外必有朱泚之叛 古來論唐禍亂者極多 龜山從道學中看出來 必要端本澄源 故其言正而不激 簡而能明 雖當一部唐鑑可也

夫從妻諡

禮 婦人從夫諡 唯漢張敖從妻諡 敖嗣父耳為趙王 尚魯元公主 以貫高之事廢為宣平侯 高后元年公主薨 封所生子偃為魯王 諡公主曰魯元公主 六年敖卒 仍為宣平侯 賜諡曰魯元王

此出於呂后之私意。而不可以訓者也。

若鞮

顏師古曰。孝子善述人之志。故漢家之諡。自惠帝以下。皆稱孝也。章懷太子曰。匈奴謂孝為若鞮。自呼韓邪單于降後。與漢親密。見漢帝諡常為孝慕之。至其子復株累單于以下。後漢書株作珠。皆稱若鞮。按呼韓邪歎塞來降。朝宣帝者二。朝元帝者一。章懷所謂慕之者。蓋在此時也。雖夷狄獷獩之俗。苟知慕而效之。則不復為冒頓射頭曼之事矣。孝道之感人心如此。故孔子曰。孝悌之至。通於神明。光于四海。無所不通。

復讐

報父之讐。事勤而志烈者。漢有蘇不韋。唐有張瓊張琇。不韋匿于大司農廡中。鑿地旁達其仇李嵩之寢室。殺其妾并小兒。嵩大懼。以板藉地。一夕九徙。又掘嵩父冢。斷其頭。標之于市。嵩求捕不獲。憤恚嘔血死。夫殺婦女。斷死人頭。此本邦士風之所恥。而彼與此風氣不同。不韋雖不得殺嵩。而以此恚死。則與手及同科。孝子之志得伸。而段熲以私怨殺不韋。朝廷紀綱不肅。司隸擅殺無辜。冤矣哉。瑄瑒兄弟。以穉年手殺其仇楊萬頃於都城。繫表於斧。言父冤狀。為有司所得。張九齡欲矜宥之。裴耀卿李林甫不可。玄宗從其議。殺二子。士民憐之。為作哀誄。勝於衢路。市人斂錢葬之。則人心不服。二子之受刑可見矣。胡致堂深以裴李之言為非。以為但以非司寇

而擅殺當之。仍矜其志。則免死而流放之可爾。不韋瓊琇。皆死於非命。何孝子之不幸耶。若曾我祐成時致。則又非此曹之比。故鷲峰先生論之曰。祐成時致復讐。雖瓊琇不可過焉。壯哉孝哉。所謂匹夫不可奪志。誠哉。

守成

漢書汲黯傳。武帝問嚴助曰。汲黯何如人也。助曰。使黯任職居官。亡以瘡人。然至其輔少主守成。雖自謂賁育。弗能奪也。守成二字。史記作守城深堅四字。通鑑從史記。小學大學衍義從漢書。竊謂守成二字。其義為長。然史記守城深堅下。有招之不來。麾之不去二句。班椽併削此二句。則其意固自與史遷異矣。

臥護

武帝拜汲黯為淮陽太守。黯伏謝不受印。帝曰。吾徒得君之重。臥而治之。劉宋彭城王義康謂人曰。王公久病不起。義康文帝弟。王公謂王弘。神州詎宜臥治。此用武帝語也。晉羊祜以病求入朝。面陳伐吳之計。武帝欲使祜臥護諸將。夫臥治臥護。豈常人所能及哉。二帝之知一臣亦悉矣。然漢武不能容黯之直。動見疏斥。晉武傷祜之卒。至涕淚水須鬢。則漢武似遜一著矣。淮南王黥布反。呂后謂高帝曰。上雖病。彊載輜車。臥而護之。諸將不敢不盡力。晉武之言。亦有所據矣。

文史

漢初法網疏濶。至武帝時。張湯與趙禹定諸律令。務在深文。故周亞夫為丞相。弗任趙禹。曰極知禹無害。然文深不可居大府。至晚節。吏務為嚴峻。而禹更名寬平。夫以禹之深文嚴酷。與張湯同傳。而更得寬平之名。此非禹之更絃易轍。而文吏習尚。愈峻愈密。必至之勢也。宣帝繼統。此風未革。故路溫舒上書言。秦有十失。其一尚存。宣帝納之。為置廷尉平。于定國黃霸等。相繼進用。而獄刑號為平矣。唐柳公綽為山南東道節度使。鄧縣有二吏。一犯賊。一舞文。衆謂公綽必殺犯賊者。公綽判曰。賊吏犯法。法在。姦吏亂法。法亡。竟誅舞文者。卓見偉識。千載之下。可為馭文吏之良法。

丙吉問牛喘

漢陳平對文帝曰。宰相者上佐天子。理陰陽。順四時。下遂萬物之宜。外鎮撫四夷諸侯。內親附百姓。使卿大夫各得任其職。帝稱善。丙吉不問羣鬪者死傷橫道。而問牛喘。曰時氣失節。恐有所傷。三公典調陰陽。職當憂。此雖與平之言相似。而其實近迂。溫公著論非之曰。當丙吉為政之時。政治之不得。刑罰之失中。不肖之未去。忠賢之未進。可勝紀哉。釋此不慮。而慮於牛喘。以求陰陽。不亦踈乎。陰陽固可坐而調耶。溫公之論誠當矣。故通鑑不取。而綱目取之。但恐趙訥齋之所修。未經朱子之刪定者乎。吉有保護宣帝之功。而絕口不道。此則人所難能者。揚子雲稱丙大夫之不伐善。宜矣。元魏陸麗源賀。承宗愛弒逆之餘。迎立皇孫。是為文成帝。太武

孫景穆子。高允預其謀。麗等皆受重賞。而不及允。終身不言。此又有吉忠厚之風焉。漢書稱吉為丞相。上寬大。好禮讓。不親小事。時人以為知大體。贊曰。孝宣中興。丙魏有聲。良有以哉。

子雲論漢臣

法言論臣自失曰。李貳師之執二。田祈連之濫帥。韓馮翊之愬蕭。趙京兆之犯魏。今考其曲直。李廣利田廣明之事。不足復論。趙廣漢為京兆尹。發姦搆伏。吏民稱之不容口。然好用世吏子孫。新進年少者。見事風生。無所回避。率多果敢之計。此其所以取敗之道也。廣漢欲脫濫殺榮畜之罪。而脅丞相魏相。將吏卒入府。召其夫人。跪庭下受辭。收奴婢十餘人去。設使夫人殺婢。其事得實。亦摧辱大臣。漸不可長。况事既非實。受戮宜矣。韓延壽治馮翊。閉閣思過。以德化下。吏民不忍欺誅。然其案校蕭望之。卒無事實。而試騎士曰。奢僭踰制數事。反為望之所發。不免棄市。皆所自取也。特怪夫望之以明經術為宣帝所知。圖形於麒麟閣。持論無所回撓。立朝大節皆可觀。而忌延壽之能。陷以罪法。此賢者所不為。而望之忍為之乎。故溫公論之曰。使延壽犯上者。望之激之也。宣帝不之察。而延壽獨蒙其辜。不亦甚哉。斯可以斷揚子之論矣。

張禹

漢元帝器重光祿勳周堪。欲大用之。惑於石顯許史。許嘉史高之讒。無所收信。長安令楊與常稱譽堪。帝欲以為助。與傾巧士也。謂帝疑堪反毀之。帝愈疑而黜堪。成帝疑王氏之擅權。車駕幸張禹第。

辟左右。親問禹以天變及王氏事。禹圖富貴。為子孫計。傳會經義。不以正對。帝雅信其言。由此不疑王氏。而鳳權日熾。二帝欲倚二臣以決疑。而二臣助長之。興固不足言。禹以通經術為天子師。雖罷相家居。每有大政。必與定議。王氏之興衰。係其一言。而阿諛曲從。務濟其私。成莽篡者禹也。鍾伯敬曰。杜欽谷永王氏私人。猶曰儒生後進。漢不能用。而王氏收之。禹以經術為漢大臣。與王氏並列。而甘心為王氏取漢。其罪豈可與欽永並論哉。余竊謂安昌侯一生事業。只成就得朱雲折檻一事。

傅介子斬樓蘭王

溫公論漢遣傅介子刺樓蘭王曰。王者之於戎狄。叛則討之。服則舍之。今樓蘭王既服其罪。又從而誅之。後有叛者。不可得而懷矣。必以為有罪而討之。則宜陳師鞠旅。明致其罰。今乃遣使者。誘以金幣而殺之。後有奉使諸國者。復可信乎。且以大漢之疆。而為盜賊之謀於蠻夷。不亦可羞哉。論者或美介子以為奇功。過矣。溫公此論。可謂正大。設使介子在武帝之世。則必不能為此舉。何也。武帝末年詔曰。大鴻臚議欲募囚徒送匈奴使者。明封侯之賞以報忿。此五伯所弗為也。據漢書師古注。言五伯尚恥不為。況今大漢也。則時議欲使使者刺單于。而詔旨黜之也。武帝窮兵黷武。疲敵天下以征伐匈奴。所得不償所失。而不欲為曹沫荊軻之事。此其所以雄心蓋世。而有帝王之畧歟。若陳湯斬郅支單于。則非介子之比。真不世之功也。

匈奴兩閼氏

華夏禮義之邦。賢后哲妃。歷世間出。固其宜矣。至於漢北。聲教之所不暨。亦有稟於天性。迥出常流者。北齊神武高歡妻妃。鮮卑女也。遼太祖述律后。契丹種也。皆明敏有智畧。及為太妃太后。經理軍國。能使嗣子。北齊文襄遼太宗。紹其前烈。但述律馭之以悍。稍不可耐。亦其風氣使之然耳。若漢書匈奴傳所載呼韓邪單于兩閼氏。則後世未見其比。兩閼氏姊妹也。姊為顯渠閼氏。生二子。長曰且莫車。妹為大閼氏。生四子。長曰雕陶莫臯。長於且莫車。顯渠閼氏貴。而且莫車為單于愛。單于病且死。欲立且莫車。顯渠閼氏曰。且莫車年少。百姓未附。恐復危國。我與大閼氏一家共子。不如立雕陶莫臯。大閼氏曰。且莫車雖少。大臣共持國事。今舍貴立賤。後世必亂。單于卒。從顯渠閼氏計。立雕陶莫臯。約令傳國與弟。是為復株累若鞮單于。兩閼氏何等識見。何等柔順。禮義之邦。有以媿之矣。

石勒論光武

後趙石勒謂其臣徐光曰。朕若遇漢高祖。當北面事之。與韓彭比肩。若遇光武。當竝驅中原。未知鹿死誰手。其論高光。優劣可見。然光武遣鄧隆。助朱浮討彭寵。隆軍潞南。浮軍雍奴。遣吏奏狀。帝讀檄。怒謂使吏曰。營相去百里。其勢豈可得相及。比若還。章懷太子注。遣使來使。故曰使吏。若汝也。北軍必敗矣。彭寵果遣輕兵擊隆軍。大破之。浮遠遂不能救。大司馬吳漢討公孫述。駐兵江北。使

副將劉尚屯於江南。為營相去二十餘里。帝聞之大驚讓漢。使急引兵還廣都。詔書未到。述果出兵擊漢。尚不得救。漢敗走。帝之明於兵機如此。不特昆陽之戰能以少破眾也。其遣鄧禹西入關。不責禹以勦赤眉。而已得專意征山東。用寇恂守河內。而已得專意拒朱鮪。遂克雒陽。明於天下之大勢。又如此。勸之言。未必然也。至於大丈夫行事。宜循循落落如日月皎然。終不效曹孟德司馬仲達欺人孤兒寡婦。狐媚以取天下。則誠千古快論。曹馬無地自容矣。

郭伋張佚

光武問郭伋以得失。對曰。選補衆職。當簡天下賢俊。不宜專用南陽人。是時在位多鄉曲故舊。故伋言及之。帝會羣臣。問誰可傳太子者。明帝羣臣承望上意。皆言太子舅執金吾陰識可。博士張佚正色曰。今陛下立太子。為陰氏乎。為天下乎。即為陰氏則陰侯可。為天下則固宜用天下之賢才。帝稱善。佚語與伋意同。皆公正之言也。

趙熹

光武崩。太尉趙熹典喪事。時經王莽之亂。舊典不存。皇太子與諸王雜止同席。熹正色。橫劍殿階。扶下諸王。以明尊卑。整禮儀。嚴門衛。內外肅然。明帝崩。馬氏兄弟明德皇后兄弟。熹皆援之子也。爭欲入宮。北宮衛士令楊仁。被甲持戟。嚴勒門衛。人莫敢輕進者。吳越王錢鏐卒。其子傳瓘與兄弟同幄行喪。內牙指揮使陸仁章曰。令公嗣先王霸業。當與諸公子異處。乃命主者。更設一幄。扶

傳瓘居之。告將吏曰。自今惟謂令公。禁諸公子從者。無得妄入。晝夜警衛。未嘗休息。此皆得熹之所為。而能防患於未然者也。

馬伏波

馬伏波功名事業。備載范書。每觀馬革裹尸老當益壯等語。意其雄爽豁達。忽畧世事。專以韜畧為務。而細心遠慮。步步皆踐實地。少時田牧隴澗間。牛羊蕃息。儲峙豐足。其起手處。便與空談經濟者不同。及征交趾。千里還書。戒兒子嚴敦。載在小學。可以警世。其餘料王盤父子之禍敗。明如著龜。建武中禁網尚疏。諸王皆在京師。競脩名譽。招游士。伏波謂司馬呂种曰。國家諸子竝壯。而舊防未立。多通賓客。則大獄起矣。未幾沛王輔光武子坐事繫獄。因詔郡縣。收捕諸王賓客。更相牽引。死者以千數。呂种亦與其禍。臨命歎曰。馬將軍誠神人也。凡此數事。雖不足盡其平生。亦可以見核實老練處。真正英雄。當於此中求之。

嚴子陵

明方正學過嚴灘詩曰。敬賢當遠色。治國先齊家。如何廢郭氏。寵此陰麗華。糟糠之妻尚如此。貧賤之交可知矣。嚴陵老子早見幾。故向桐江釣煙水。宋景濂蒼雲軒銘序曰。人之志意材量。明者能燭之於事為之先。子陵光武。少相友善。使光武能任人可為盡力。子陵何所苦而不出。既出而決去哉。蓋光武察察自用。其後宰輔不以禮退。子陵預知其如此。故決然避去而不疑。以全故舊之

義 此子陵所以為高也。苟徒以隱為高，孰不可為子陵哉。按正學師景濂，極尊重之，想其講論之際，或有及之者。景濂歸宰輔上，正學歸陰后上，其義一也。子陵心事，未必如此，皆後世臆度之言。然使子陵聞之，亦當首肯也。

賣官

通鑑漢安帝紀。永初三年三公以國用未足，奏令吏民入錢穀，得為關內侯。虎賁羽林郎，五官大夫，官府吏，緹騎，營士，各有差。亡友栗伯立曰：靈帝開西邸賣官，作備於此，而綱目書法發明，皆無所論著。今考之，信如其言。若文帝令民入粟拜爵，則為勸農桑寬租稅，而非此之謂也。

政論

崔寔政論。專以嚴為主。固對證之良藥而不可施於平常。故溫公論之曰：崔寔之論，以矯一時之弊，非百世之通義也。按諸葛武侯治蜀，頗尚嚴峻，是時先主得蜀日淺，承劉璋闇弱政刑廢弛之後，濟之以猛，乃得其要。其對法正之言可見已。周官大司寇，制三典之刑以平治亂，武侯蓋用此道也。杜牧作守論以譏代宗德宗姑息之政曰：大抵生民油然多欲，欲而不得則怒，怒則爭亂隨之。是以教答於家，刑罰於國，征伐於天下。此所以裁其欲而塞其爭也。大曆貞元之間，盡反此道。今者不知非此，而反用以為經，常也。愚見為盜者，非止於河北而已。嗚呼大曆貞元守邦之術，永戒之哉。此在文宗之時，誠為救時之良劑，亦崔寔之意也。若夫經世之常道，則尚德不尚刑，布在方策，姑

舉事證言之。則文翁召信臣卓茂魯恭之徒，皆以溫厚為政。仇香不罰而化陳元，以為鷹鷂不如鸞鳳。此皆百世不易之良規也。

溫公論東漢

通鑑漢獻帝紀末。溫公論教化風俗。此當與李泰伯袁州州學記參看。其論光武明章，敦尚儒術，風化既美。和帝以降，政治雖濁，而風俗不衰。桓靈昏虐，王室蕩覆，然州郡擁兵者，未嘗不以尊漢為辭。其命意立論，大旨皆與泰伯同。考其先後，泰伯在前，溫公在後。泰伯簡，溫公詳。其體各有攸當，皆關係世教之文。而曾南豐徐孺子祠堂記，亦二公之意也。

陽平橋詩

困學紀聞曰。鄧艾取蜀，行險以徼幸。閻伯才陽平橋陽平蜀地名陳壽陽平人也詩云。魯貫贏師堪坐縛，爾時可歎蜀無人。按史黃崇屢勸諸葛瞻守險，無令敵入平地。瞻猶豫未納。崇再三言之。至于流涕，瞻不能從。其實蜀非無人。特瞻不能用耳。瞻父子力戰死之，不媿武侯之子。忠烈有餘，而謀略不足，惜哉。

司馬氏篡魏

田釐子行陰德於民。而成子脩釐子之政。齊國之政，皆歸于己。子孫遂得有齊。司馬氏之篡魏，非一朝一夕之故。自宣王征伐有功，景王文王相繼脩其政，務收人心，通鑑魏之伐蜀也。吳張悌策之

曰。曹操雖功蓋中夏。民畏其威。而不懷其德也。丕承承之。丕文帝叡明帝。刑繁役重。東西驅馳。無有寧歲。司馬懿父子。累有大功。除其煩苛。而布其平惠。為之謀主。而救其疾苦。民心歸之。亦已久矣。故淮南三叛。王凌。母丘儉。諸葛誕。而腹心不擾。曹髦之死。高貴鄉公。四方不動。任賢使能。各盡其心。其本根固矣。姦計立矣。彼彊弱不同。殆無不克。卒如其言。布其平惠。救其疾苦。此田氏父子盜齊之術也。當時英俊之士。亦樂為之用。故其成效速而立基大。自古姦雄竊邦。莫不由此術矣。

力戰持重

將帥力戰與持重。闕一則不可。吳楚七國反。吳攻梁。將軍張羽力戰。韓安國持重。乃得頗敗吳兵。趙充國之討先零羌。務以持重制勝。史萬歲之征嶺表蠻。直以力戰立效。蓋當力戰之時而逗撓不進。與處持重之地而恃勇輕鬪。皆取敗之道也。司馬宣王攻孟達。則倍道兼行。八日而到其城下。擊公孫淵。則以百日為期。緩急伸縮。瞭然在吾胸中。而卒能以全制勝。此又智算迥出衆人之上者也。沈慶之之討山蠻。急攻以破之。持久以斃之。亦能得宣王之遺意者也。

石頭城謠

可憐石頭城。寧為袁粲死。不作褚淵生。此劉宋百姓哀袁景倩之謠也。不能殺袁劉。袁粲劉秉安得免寒士。此劉祥面斥諸彥回之語也。景倩之忠。彥回之罪。不待後世之論而判矣。然彥回力佐齊

高帝殺景倩者。抑有由焉。據通鑑。初褚淵為衛將軍。遭母憂去職。朝廷敦迫不起。袁粲素有重名。自往譬說。淵乃從之。及粲為尚書令。遭母憂。淵譬說懇至。粲遂不起。淵由是恨之。胡注。淵之恨粲。以其奪己志而使己失為子之道也。而殺粲以傾宋。又失為臣之節。曰忠與孝。二者淵皆失焉。此論甚平正而的確。彥回無所容於天地間矣。南史樂豫謂徐孝嗣曰。人笑褚公。至今齒冷。趙宋末。文文山賦詩感時事曰。黑頭爾自誇江總。冷齒人能說褚公。用此事也。

縱敵自資

兩魏邙山之戰。宇文泰敗走。高歡使彭樂追泰。泰窘。謂樂曰。汝非彭樂邪。癡男子。今日無我。明日豈有汝邪。何不急還營收汝金寶。樂從其言。獲泰金帶一囊以歸。慕容紹宗大破侯景於渦陽。景使謂紹宗曰。景若就擒。公復何用。紹宗乃縱之。自古忠盡有餘者。勇力不足。勇力兼人者。多狗其私。故武將往往養敵。以為他日圖富貴之資。忠勇兩全。如關壯繆岳武穆者。宇宙間能有幾人。而壯繆授命於呂蒙之襲。後。武穆殺身于秦檜之講和。天乎何其慘也。雖然二公屈於一時。伸於千載。此乃所以為忠臣義士之勸也歟。

偽稱使者

真西山曰。趙武靈王偽為使者。馳入秦。觀秦昭王之為人。雖云跌蕩。猶有英偉之氣。余謂宇文泰之於高歡亦類之。初泰為司徒府司馬。自請使晉陽以觀歡之為人。歡奇其狀貌曰。此兒視瞻非

常。將留之。秦固求復命。歡既遣而悔之。發驛急追。至關不及而返。秦昭王亦怪趙使者之狀貌奇偉。使人逐之。而武靈王馳已脫關矣。此二人之所為。皆危道而幾脫虎口。西山所謂跌蕩者。秦亦有焉。若漢吳王濞身自為使者至膠西者。欲固結其反謀也。

將帥爭功

戡定敵邦。將帥爭功者。自古非一。晉之鄧艾鍾會王濬王渾。劉宋之王鎮惡沈田子。隋之韓擒虎賀若弼。世所共知也。今考其成敗之迹。皆以彼先於我。建立大功。我失機會。後於進取。故生罅隙。以至相傾。伐漢之舉。鍾會統十餘萬衆趣漢中。鄧艾以奇兵克成都。會無烜赫之功。而反謀已決。忌艾在蜀。故設計陷艾。使衛瓘收之。而會亦不能免為亂兵所殺。伐吳之役。王濬舟師下大江。直趨建康。不受王渾之節度。吳主孫皓面縛出降。渾恥無功。將攻濬。何攀勸濬。送皓與渾。由是事得解。而渾忿恨不已。恃勢構陷。非武帝之寬恕。則濬幾不能免。伐秦之軍。王鎮惡度渭徑至長安。其功為多。曉柳之捷。沈田子爭功不平。誣以謀反殺之。而田子亦為王脩所殺。伐陳之師。韓擒虎宵濟采石獲後主。賀若弼恥功在其下。遂至相詬挺刃。凱旋之後。猶爭功於文帝前。不亦甚乎。然提鼓攬金。制三軍之死命。爭功相陵。固其常理。在於人主能得駕馭之術耳。蓋魏之伐漢。舉朝以為不可。非鍾會莫可使者。文王知其蓄不臣之志。故自將大軍屯長安。觀其對邵悌之言。則料之審矣。晉武不聽王渾之讒。歸功王濬。進爵封侯。隋文以韓擒虎賀若弼俱為上勳。

進位賜物以安其心。此皆善處功臣者也。唯宋武之所為。不厭衆望。其將南還。沈田子屢言王鎮惡之不可保。宋武私謂田子曰。鍾會不得遂其亂者。以有衛瓘故也。卿等十餘人。何懼王鎮惡此啓田子之心。而圖之使為亂也。宋武之明斷英畧。過於晉之文武。特以急於篡晉。不暇為善後之慮。故得關中。隨輒失之。二將既斃。其子義真狼狽而還。將誰咎哉。然為將帥者。能以蘭相如馮征西為師。則何忿戾爭功之有焉。

確鬪

漢霍去病擊匈奴。慶臯蘭下。慶謂盡死殺人也。宋趙立淮陰之戰。高宗建炎三年。議者謂自燕山之役。南北戰爭。未有如此之慶戰者。則其用兵力。亦可知也。又有確鬪。有客戰。通鑑後梁均王紀。唐宮彥璋與士卒謀曰。聞晉王莊宗與梁人確鬪。騎兵死傷不少。吾儕捐父母妻子。為人客戰。千里送死。而使長防禦使李存矩復不矜恤。奈何。胡注。確堅也。凡戰者隨兵勢而為進退離合。至於確鬪。則兩敵相當。用實力而鬪。惟堅耐而用長技乃勝耳。千里行役。戰於異鄉。是為客戰。梁武帝紀。高歡宇文泰河陰之戰。是日東西魏置陣既大。首尾懸遠。從旦至未。戰數十合。注云。史言兩軍確鬪。是役也。東魏高敖曹戰死。西魏王思政被重創。宇文泰幾獲而免。兩軍相持甚急。可見確鬪之義。又作格鬪。唐昭宗紀。朱全忠襲鄜坊。城兵格鬪。注云。格鬪者短兵接鬪。兩兩相當。以力角力。

馭臣以術

東魏高歡臨卒。謂世子澄曰。侯景專制河南。十四年矣。常有飛揚跋扈之志。顧我能畜養。非汝所能駕馭也。堪敵景者。唯有慕容紹宗。我故不貴之。留以遺汝。唐太宗黜李勤而使高宗用之。不必效歡之故智。而英雄所為。同其軌轍。然在太宗。則大有虧乎君德。故范淳父極論其非曰。此漢祖所以馭黥彭之徒。阻詐之術也。今按勸嘗侍宴。太宗從容謂曰。朕求羣臣。可託幼孤者。無以踰公。公往不負李密。豈負朕哉。勸流涕辭謝。齧指出血。然則託孤之言。帝既面命之矣。勸宜終身不忘。而帝臨崩之舉。似與前言不相副。其術固已踈矣。帝以機數馭勸。勸挾機心而事君。有以窺太宗之心。故聞疊州之命。不至家而即行。宜其不能輔導高宗。而反陷之於惡也。金世宗嘗舉此事。謂太子璟。章宗曰。君人者焉用偽為。受恩於父。安有忘報於子者乎。朕馭臣下。惟以誠實耳。世宗能言而能行之。較為親切。史稱世宗在金諸帝中。最為賢主。則小堯舜之稱。豈溢美哉。

得失自我

洪容齋曰。梁武帝啓侯景之禍。塗炭江左以致覆亡。乃曰。自我得之。自我失之。亦復何恨。其不知罪己亦甚矣。竇嬰救灌夫。其夫人諫止之。嬰曰。侯自我得之。自我捐之。無所恨。梁武用此言而非也。按司空圖南北史感遇詩曰。佳人自折一枝紅。把唱新詞曲未終。祇向眼前憐易落。

不如拋擲任春風。此以梁武之言命意鑄詞。而含蓄沖融。不見針線之迹。正唐人手眼俱高處。

盾鼻磨墨

梁荀濟博學能文。與武帝有布衣之舊。知帝有大志。而負氣不服。常謂人曰。會於盾鼻上磨墨檄之。然此特空言耳。晉何無忌與宋武帝劉毅等謀討桓玄。夜於屏風裏草檄文。其母登橙。床屬密窺之。泣曰。吾不及東海呂母明矣。汝能如此。吾復何恨。此真草檄者也。世多稱盾鼻磨墨。而不稱屏風裏草檄。不亦左乎。玄聞兵起。憂懼特甚。曰何無忌酷似其舅。何謂無成。舅謂劉牢之。其母即牢之之姊。志操之烈。不媿呂母矣。

杜弼檄

東魏侯景以荆豫等十三州降梁。高澄使軍司杜弼作檄移梁朝。通鑑載其文曰。其後梁室禍敗。皆如弼言。今讀其文。不唯雄壯偉麗。指陳利害。剖析機宜。真有益文字也。其叙景之叛亂有云。呼之則反。而聲小。不徵則叛。遲而禍大。會應遙望。廷尉不肯為臣。自據淮南。亦欲稱帝。但恐楚國亡援。禍延林木。城門失火。殃及池魚。遙望廷尉。用晉蘇峻語。自據淮南。用黥布事。皆剴切允愜。又有云。徒探雀殼。無救府藏之虛。空請熊躡。詎延暑刻之命。外崩中潰。今實其時。鵝蚌相持。我乘其弊。雀殼熊躡。用趙武靈王楚成王事。臺城之敗。江陵之潰。其言若合符契。而對偶之工。錯綜之精。又在其次也。

梁元帝

宋張忠定使寇忠愍讀霍光傳。忠愍豈不學無術之人哉。正欲成就其才之美耳。劉宋彭城王義康爲司徒權勢太盛。領軍劉湛驅扇之。與文帝嫌隙日深。出鎮豫章。帝使沙門慧琳視之。義康曰。弟子有還理不。琳曰。恨公不讀數百卷書。及孔熙先范曄謀逆。欲奉義康爲主。廢爲庶人。讀書見淮南厲王長事。廢書歎曰。自古有此。我乃不知。得罪爲宜。此真不學無術者。慧琳之言。亦猶忠定之意也。梁元帝王書畫。能文章。與裴子野蕭子顯等爲布衣交。及江陵城陷。焚古今圖書十四萬卷。斫柱折劍歎曰。文武之道。今夜盡矣。元帝好書如此。而其禍酷於義康。可謂不善讀書者。而記誦詞章之學。無益于事。亦可見矣。

戒石銘

容齋隨筆曰。爾俸爾祿。民膏民脂。下民易虐。上天難欺。太宗皇帝書此以賜郡國。立於廳事之南。謂之戒石銘。成都人景煥有野人閒話一書。乾德三年所作。其首篇頌令箴載。蜀主孟昶爲文頌諸邑。凡二十四句。昶區區愛民之心。在五季諸僭偽之君。爲可稱也。但語言皆不工。唯經表出者。詞簡理盡。遂成王言。羣談採餘亦載其事曰。戒石銘始於蜀主孟昶。頌令箴於天下州邑。按蜀保四川。割據一方。安得頌於天下州邑。此妄也。至高宗紹興二年。頌黃庭堅所書戒石銘于州縣令刻石。此即太宗所制定者。直西山宴邑宰詩。既以脂膏供爾祿。須知痛痒切吾身。用戒石銘語也。

聶夷中詩

周書無逸一篇。教人君以知稼穡之艱難。先儒之論備矣。其敍農民疾苦。則司馬溫公真西山之言。尤爲詳切。溫公上疏神宗曰。四民之中。惟農最苦。寒耕熱耘。霑體塗足。戴日而作。戴星而息。蠶婦治繭。績麻紡緯。縷縷而積之。寸寸而成之。其勤極矣。而又水旱霜雹蝗蟻。間爲之災。幸而收成。公私之債。交爭互奪。穀未離場。帛未下機。已非己有。所食者糠粃而不足。所衣者綈褐而不完。直以世服田勸。不知舍此之外。有何可生之路耳。而况聚斂之臣。於租稅之外。巧取百端。以邀功賞。可不念哉。後唐宰相馮道對明宗誦進士聶夷中詩。以敍農家之勤苦曰。二月賣新絲。五月糶新穀。醫得眼下瘡。剜却心頭肉。西山釋之曰。新絲之出以五月。而貸以二月。新穀之登以八月。而貸以五月。此猶當時之俗也。若今則往往貸於半歲之前矣。千錢之物。僅得數百。或不及其半焉。富家鉅室。乘時射利。田夫蠶婦。低首仰給。否則亡以爲耕桑之本。迫糶浴於湯。禾登於場。而責逋者狎至。解絲量穀。亟以授之。回顧其家。索無所有矣。償或未足。則又轉息爲本。因本生息。昔之千錢。俄而兼倍。昔之數百。俄而千錢。於是一歲所貸。至累載不能償。己之所貸。子孫不能償。牒訟一投。追吏奄至。伐桑撤屋。賣妻鬻子。有不容惜者矣。且人情所望者一稔。而歲稔則督逋尤峻。竭其廬之入。不容錙銖合留。故昔人謂豐年不如凶年。其言似於過激。然實農家之真利病也。此著於大學衍義。人人所能讀而知者。然不經拈出。或易忽畧。明宗悅。

道語。命左右錄其詩。常諷誦之。亦有志於爲治者也。夫農家利病。古今一致。溫公西山忠誠懇惻。欲使時君知其困苦。故其言切至。而西山敝貧戶借貸之狀。如親歷而躬踐之。戒石銘所謂民膏民脂。尤可體貼。當牧宰之寄者。庶朝夕觀之哉。

清慎勤

童蒙訓曰。當官之法。唯有三事。曰清曰慎曰勤。魏志裴松之注載李秉之言曰。李通傳注引王隱晉書。秉通之孫也。司馬文王嘗曰。爲官長。當清當慎當勤。修此三者。何患不治乎。秉對曰。清慎之道。相須而成。必不得已。慎乃爲大。夫清者不必慎。慎者必自清。亦猶仁者必有勇。勇者不必有仁。是以易稱括囊無咎。藉用白茅。皆慎之至也。呂居仁之言。蓋有所據。而朱子載於小學。故人尊信之。出於司馬昭之口。則人忽之。君子不以人廢言。何愛憎之偏乎。秉發明慎字之義。則尤可釋焉。

天定勝人

宋太祖太宗授受之際。斧聲燭影之事。疑以傳疑。程篁墩破之。以爲李燾刪潤湘山野錄而啓之。陳經附會涑水紀聞而成之。辨駁精覈。無復餘蘊。至南渡後。孝宗以普安郡王爲高宗所養。遂得紹太祖之緒。而孝宗乃太祖八世孫也。天武帝背天智帝之盟。而虐取大友帝之天下。傳祚數世。至孝謙帝。而天武之統絕矣。光仁帝以諸王登極。方得復天智之統。自天智至光仁。實十一世矣。高宗以社稷大計。養宗室爲子。孝謙猜忌。不置儲副。大臣定策。推戴光仁。事雖不同。

而其得篡先世之丕緒則一也。蓋天智中興良主。三善清行稱之爲中宗。以配太祖神武天皇。見清行意見封事。使之絕而無胤。則爲善者沮矣。天定亦能勝人。其理固不爽矣。

南渡奏議

胡澹庵上高宗封事。朱子謂可與日月爭光。中興奏議。此爲第一。至今天下皆誦其書。敬其人。同時吏部員外郎許忻亦上疏。極論秦檜王倫之姦。其大旨與澹庵無異。亦甚剴切精到。載在宋史。此又不可不讀也。澹庵既召還。上書孝宗曰。堯舜明四目。達四聰。雖有其鯨。不能塞也。秦二世以趙高爲腹心。劉項橫行而不得聞。漢成帝殺王章。王氏移鼎而不得聞。靈帝殺竇武陳蕃。天下橫潰而不得聞。梁武信朱异。侯景斬關而不得聞。隋煬帝信虞世基。李密稱帝而不得聞。唐明皇逐張九齡。安史胎禍而不得聞。此敍歷代姦臣蔽主之狀。痛快明白。又論議和爲闕政書曰。臣恐再拜不已。必至稱臣。稱臣不已。必至請降。請降不已。必至納土。納土不已。必至銜璧。銜璧不已。必至輿櫬。輿櫬不已。必至如晉帝青衣行酒。然後爲快。春秋左氏謂無勇者爲婦人。今日舉朝之士。皆婦人也。此又激烈慷慨。一節緊一節。曾不以其遭貶謫少爲挫抑。所謂薑桂之性。到老愈辣者。苟非誠心愛君。烏能及之哉。劉宋何承天上表文帝。以爲凡備匈奴之策。此時元魏據地。故云然。不過二科。武夫盡征伐之謀。儒生講和親之約。澹庵儒臣而破和議。宜爲朱子所稱也。

夏二子傳

容齋隨筆曰。趙超然以君子之澤五世而斬責汀州。吳仲寶以夏二子傳流容州。蓋超然宋宗室趙令裕字。或號。仲寶太常主簿吳元美字也。據宋元通鑑。汪召錫告令裕觀秦檜家廟記。口誦君子之澤五世而斬。誦居汀州。元美作夏二子傳。指蚊蠅也。其鄉人鄭璋告檜。譏毀大臣。故竄容州。檜怒未已。誣令裕與張浚。魏公李光。秦發。胡寅。致堂胡銓。澹庵等五十三人謀大逆。獄成而檜病不能書。未幾檜死。諸君子亦甚危矣。鶴林玉露萬姓統譜亦載元美二子傳事。傳作賦。未知孰是。然容齋趙吳同時人。恐當以傳為是。

因敗得勝

晉桓溫伐漢。李勢悉衆出戰。溫前鋒不利。參軍龔護戰死。矢及溫馬首。衆懼欲退。而鼓吏誤鳴進鼓。袁喬拔劍督士卒力戰。遂大破之。克成都。後梁王景仁攻淮南。吳徵兵未集。徐溫以少衆與景仁戰。不勝而却。景仁引兵乘之。將及於隘。吳吏士皆失色。陳紹援槍大呼曰。誘敵太深。可以進矣。躍馬還闕。衆隨之。梁兵乃退。溫拊其背曰。非子之智勇。吾幾困矣。夫鼓吏誤鳴進鼓。亂形名之制。在法所必誅。而轉敗為勝。吳兵計窮勢蹙。而紹因無生有。遂得霍丘之捷。皆僥倖於一時。不可為法。而勝敗無常形。變化在呼吸者。亦可以槩見矣。

飢鷹

秦權翼諫苻堅曰。慕容垂勇畧過人。世蒙東夏。頃以避禍而來。其心豈止欲作冠軍而已哉。譬如

養鷹。飢則附人。每聞風颺之起。常有陵霄之志。正宜謹其條籠。豈可解縱任其所欲哉。唐末李罕之自失河陽。求鄆寧於李克用。蓋寓亟為之言。克用曰。吾於罕之。豈愛一鎮。但罕之鷹也。飢則為用。飽則背飛。此皆祖陳登對呂布舉魏武稱布之語而言也。

一體

史記黥布傳。令尹薛公對滕公曰。往年殺彭越。前年殺韓信。此三人者。同功一體之人也。通鑑唐昭宗紀。姚彥章說馬殷曰。公與劉龍驤。建鋒。張司馬。信一體之人也。據胡注。劉建鋒張佶與馬殷勳力成軍以取湖南。故彥章引薛公之語以激勸之也。

平章事

據唐書百官志。中書門下平章事始於李靖。同中書門下平章事入銜。始於郭待舉岑長倩等。蓋取諸堯典平章百姓之語。續日本後紀。敍參議和氣真綱履歷曰。爵止於從四位。官登於平章事。此可以備參議稱平章事之例。

稱人以坊里

通鑑唐文宗紀。杜悰謂李德裕曰。靖安相公令悰達意。胡注。李宗閱蓋居靖安坊。因以稱之。如劉崇望居光德坊。呼為光德劉公之類。按宗閱崇望。皆同平章事。皇朝公卿。槩以所居坊里稱之。蓋自唐時已然。

版授

通鑑晉安帝紀。王廙以母喪居吳。王恭之討王國寶也。版瘞行吳國內史。使起兵於東方。胡注。以白版授官。非朝命也。宋孝武紀。豫州刺史魯爽板南郡王義宣。武帝子等。明帝紀。建武將軍吳喜板徐崇之領縣事。皆此也。胡注又云。晉宋之制。藩方權宜授官者。謂之板授。今按版板相同。又轉作判。源親房卿所謂儉仗將軍判授之官。蓋此義也。

中謝

齊東野語。今臣僚上表所稱。誠惶誠恐及誠歡誠喜頓首稽首者。謂之中謝中賀。自唐以來。其體如此。因引柳子厚平淮西賀表。以正後人中謝重複之誤。竊謂朝禮亦有稱中謝者。通鑑唐武宗紀。以淮南節度使杜悰同平章事。及悰中謝上勞之。胡注。既受命入謝。謂之中謝。是也。

女侍中

野客叢書引金石錄齊故女侍中宜陽國貞穆太妃傅氏碑。及後魏清河王岳母。元又妻。並授女侍中。曰此類不一。則知當時女侍中之號。非必專處後宮嬪御。蓋有近宗與夫臣下妻母為之者。正以示殊寵也。然以宰相之母尊為太妃。其禮可見。按通鑑北齊後主溫公。以陸令萱為女侍中。巧黠善取媚宮掖之中。獨擅威福。號曰太姬。與祖斑相為表裏。讒殺斛律光。竟滅齊祚。南漢劉晟。以宮人盧瓊仙黃瓊芝為女侍中。朝服冠帶。參決政事。政刑日紊。此女侍中之凶于而國者也。漢宣帝時。

有披香博士淳方成。至成帝朝。見趙飛燕姊妹入宮。唾曰。此禍水也。滅火必矣。此女博士而有識

者也。淳方成事。漢書不載而見通鑑。蓋據飛燕外傳也。魏明帝置女尚書。使典省外奏事。趙石虎置女尚書女太史。亦效魏制。

而東漢之末。已有女尚書矣。至於唐韋皇后以賀婁尚宮為內將軍。則前古所未有。而禍亂之漸也。

牛羊

叢書辨今人以牛為太牢。羊為少牢之誤。曰。觀唐人呼牛僧孺為太牢。楊虞卿為少牢。則知此謬已久。按文獻通考經籍考。牛羊日曆一卷。唐劉軻撰。牛指僧孺。羊謂虞卿。取其楊羊音同也。通鑑考異引皇甫松續牛羊日曆。蓋亦指僧孺之黨。而牛羊之稱。恐非忠厚之道。如指鄭注為水族。則度語也。注本姓魚。故云然。見唐書本傳。

韓瞪眼

叢書附錄載子瞻問歐陽公曰。五代史可傳否。公曰。修於此書。有善善惡惡之意。蘇公曰。韓通無傳。惡得為善。善惡。惡。公默然。余據齊東野語。焦千之學於歐陽公。一日造劉貢父。劉問五代史成邪。焦對將脫藁。劉問為韓瞪眼立傳乎。焦默然。劉笑曰。如此亦是第二等文字耳。當以此說為正。韓瞪眼即通也。及元人修宋史。首載通於周三臣傳。義例始正。附錄所謂。野老記聞。未暇詮次者。宜其有傳聞之誤也。叢書考據精覈。議論溫厚。然著述既多。亦不免有疎繆處。如書兒寬事。云漢書歷載而史記皆不書。大抵遷史失之畧。如丙魏等傳皆然。今考史記。丞相傳褚少孫所補。史遷安

得知之。若焦氏筆乘。往往取叢書所載。以為己說。如玉樹青蔥未渠央。此類不一。殊不可解。

碑文書年號

指隨前人文字瑕疵。宜細審覈。使無餘蘊方可。文體明辨載王荆公所作梅昌言神道碑曰。康定辛巳六月十日公七十八。以其官卒。徐伯魯駁曰。康定仁宗年號。止一年。當作庚辰。明年辛巳。改元慶曆。此云辛巳誤也。余疑荆公見在當時書年號。不應函莽如此。因考宋史仁宗紀。慶曆元年十一月丙寅。改元慶曆。六月豈得有慶曆之號。碑文係康定辛巳為得實。此極瑣屑。雖不足論辨。而恐或所惑。亦欲自警也。

為法自弊

秦商鞅亡至關下。不得舍。歎曰。嗟乎為法之敝。一至此哉。晉桓蔚兵敗。走投江陵牛牧寺。劉毅殺之。及毅兵敗。亦投牛牧寺。僧拒之曰。昔亡師容桓蔚。為劉衛軍。毅所殺。今實不敢容異人。毅歎曰。為法自弊。一至於此。遂縊而死。唐路巖為相。密奏三品以上賜死。皆令使者剔取結喉三寸以進。驗其必死。及巖流嶺表。自羅其禍。所死之處。乃楊收賜死之榻。前此收流驩州賜死。皆信宗朝也。曾子曰。戒之戒之。出乎爾者。反乎爾者也。天之報施。亦甚昭晰。若佛氏報應之說。則似而非者也。

有罪改姓氏

宋竟陵王誕。文帝子孝武弟。舉兵敗死。孝武改姓留氏。齊巴東王子鸞。武帝子。方命被誅。武帝易姓蛸氏。劉留蕭蛸。皆取其音近以貶之也。唐則天后之為昭儀也。殺王皇后蕭淑妃。改王氏姓為麟氏。蕭氏為梟氏。亦取其音相近。誣以兇惡也。續日本紀天平寶字元年。橘奈良麻呂獄起。皇太子道祖王以下。文致株連。多被冤酷。道祖王改名麻度比。黃文王改名多夫禮。賀茂角足改姓乃呂志。亦此比也。

劉夫人

婦人嫉妬。乃其常性。况伉儷至尊。專寵椒殿者乎。自非能備大任大妯之德。鮮不妬忌。漢明德馬皇后。唐文德長孫皇后而下。未之多見。每讀史至後唐莊宗曹太后劉太妃事。未嘗不歎其為人之美也。太后莊宗生母。太妃嫡母也。武皇時太妃為夫人。太后為侍姬。夫人性賢不妬忌。以無子。常勸武皇。善待曹姬。姬亦自謙退。由是相得甚歡。及莊宗即位。二人皆在晉陽。遣使冊曹姬為皇太后。劉夫人為皇太妃。太妃詣太后宮賀。有喜色。太后怩不自安。太妃曰。願吾兒莊宗享國久長。吾輩獲沒於地。園陵有主。餘何足言。因相向歔歔。明年迎太后太妃於晉陽。太妃曰。陵廟在此。若相與俱行。歲時何人奉祀。遂留不來。太后自與太妃別。常忽忽不樂。雖娛玩盈前。未嘗解釋。太妃既別太后。亦邑邑成疾。太后遣中使。醫藥相繼於道。聞疾稍加。輒不食。謂莊宗曰。吾與太妃恩如兄弟。欲自往省之。帝以天暑道遠苦諫。久之乃止。太妃凶問至。太后悲哀。不食。

者累日。自是得疾。未幾殂。太妃素有壽畧。久在軍旅中。善佐武皇。不唯不妬。使之善待曹氏。既賢矣。及受冊命。位反在其下。而無愠色。其賀太后。出於誠心。無一毫虛飾。又賢矣。一旦離別。不勝其悲。而太后之思慕。以太妃有以得其心也。始終情愛之篤。至於得疾而兩不起。孰謂五代衰亂之世。而淑德懿行有如此者乎。若莊宗之劉夫人。則陰伎忍毒。立為皇后。黷貨蠹政。莊宗由是被弒。而后亦不免。陸放翁書五代史郭崇韜傳後。論之詳矣。見渭南集。

王淑妃

後唐明宗王淑妃。歐史所謂花見羞也。有寵而無子。明宗使養許王從益為子。後晉高祖攻洛陽。唐主從珂自焚死。淑妃與從益匿於毬場獲免。高祖以從益為郇國公。奉唐祀。晉亡。中原無主。契丹蕭翰強立從益為帝。淑妃泣曰。吾母子單弱如此。而為諸公所推。是禍吾家也。及後漢高祖入洛陽。密令郭從義殺從益及淑妃。淑妃且死曰。吾兒為契丹所立。何罪而死。何不丁留之使每歲寒食以二盂麥飯酒。明宗陵乎。聞者泣下。淑妃此語。痛心刺骨。劉後村寒食詩。漢寢唐陵無麥飯。正用此事也。

帝王多子

漢書中山靖王勝好內。有子百二十餘人。通鑑燕太祖馮跋有子百餘人。太祖殂。弟弘篡位。皆殺之。南史鄱陽王恢。梁武帝弟。有男女百人。男封侯者二十九人。女主三十八人。獻徵錄引皇明盛事曰。慶

成王奇湏生子百子。長封王。餘九十九人竝鎮國將軍。每會紫玉盈座。今按九十九人中。豈無天亡或庸劣者。而皆授鎮國將軍。雖天之所佑。不可測度。而夸辭疑非事實。姑舉于此。

顧憲成

東漢黨錮之禍酷矣。唐牛李之黨。相軋四十餘年。宋仁宗朝。朋黨又起。而諸君子不得立於朝。至哲宗朝。李清臣倡紹述之說。章惇蔡京貶竄端人正士。幾四十餘人。寧宗朝韓侂胄用事。偽學之禁尤嚴。黨人在籍者數十人。前史所載。茲不復舉。至明東林黨議。則其禍深於紹聖。今據紀事本末等書撮其要而著于此。萬曆中顧憲成議論與廟堂不合。謫歸講學於東林。天下趨之。乃故楊龜山書院也。大學士沈一貫以才自許。持權求勝。科道有名者亦多附之。此東林浙黨所自起。而至萬曆末。則有齊楚浙三方鼎峙之名。孫丕揚。鄒元標。趙南星之流。謬謬自負。與政府每相持。受黜者身去而名益高。天啓朝魏廣微詔事魏忠賢。點摺紳為一冊。葉向高。高攀龍。楊漣。左光斗等六七十人。目為邪人。以漸擯斥。黃克纘。王紹徽。霍維華。阮大鍼等五十餘人。指為正人。以次進用。亦猶章蔡斥逐元祐之黨。而廟堂不振。姦九得志也。至崇禎朝。闖賊橫行。社稷丘墟。北兵乘其弊。唾手而得幽燕。弘光南渡。危如綴旒。一二君子。鞠躬盡瘁。猶恐不及。而阮大鍼輩。排抑忠良。遂至誤邦。夫黨人者。皆逢掖之士。不操兵馬之權。而更相傾軋。以至喪亂。其故何邪。君子退而小人進。天理泯而人欲肆。其效至於如此。亡師朱文恭每謂玄黃水火。舌戰廟堂。馴致甲申之變。而痛憤切。

齒於馬士英阮大鈞之姦邪。然則東林之黨。實為明室命脈。其所關係。顧不重歟。

魏忠賢

閣豎亂政。漢唐所以傾覆也。著於前史。備於先儒之所論。然未有如明魏忠賢之甚者也。忠賢黠慧有膽力。善騎射。猜狠自用。熹宗為皇太孫。忠賢謹事之導之宴游。甚得其歡心。及踐阼。寵任無比。與熹宗乳媪奉聖夫人客氏私。聞人無得交接之理。其醜態有不可言者。驕橫不可復制。內總禁旅。外植私黨。殘害妃嬪。戕賊忠良。紀事本末所載。歷歷可攷。其尤者殺楊漣。魏大中。左光斗。周宗建。繆昌期。周順昌。李應昇。黃尊素等。慘毒備至。過於王甫曹節之所為。其餘不可勝紀。陳仁錫。文震孟。鄭鄮等亦削籍。追奪誥命。皆一時之正人君子也。太監王安素剛正。主持六宮事。忠賢忌之。矯殺之。亦猶趙忠構殺呂強也。忠賢目不識丁。使文人附己者修三朝要典。以邪為正。亦猶蔡卞增損神宗實錄也。監生陸萬齡請建忠賢生祠於國學之旁。謂孔子作春秋而忠賢作要典。孔子誅少正卯而忠賢誅東林。熹宗許之。亦猶王安石配享先聖也。罪惡貫盈。雖王振劉瑾亦有所不及也。既而熹宗崩。懷宗即位。按其罪而誅之。與客氏磔死。籍其家。得宮人姪身者八人。蓋出入掖庭。多攜其家侍媵。冀如呂不韋李園之事也。以一人之身而備數人之惡。古今所未聞也。幸而懷宗初政清明。誅戮梟獍。貶斥黨與。不然則其禍將不測也。然明室之衰。亦由魏廣徵霍維華恃忠賢之力。誅鋤善類。而朝廷為之一空也。陸萬齡以誅東林比誅少正卯。書生口吻。真可畏哉。

高攀龍周順昌

紀事本末。左都御史高攀龍削籍家居。杜門著書。聞緹騎至。焚香沐浴。手繕遺疏。封固以授其子世儒。夜半密起。整衣冠。望闕叩頭。自投於園池。遺疏曰。臣雖削籍。舊屬大臣。大臣不可辱辱大臣則辱國矣。謹北面以效屈原之遺。魏大中被害過吳。周順昌周旋累日。臨別涕泗。緹騎促大中行。語侵順昌。順昌張目叱之曰。若了知世間有不畏死男子耶。若曹歸語而忠賢。ナシ我即故吏部侍郎周順昌也。及逮。舉家號慟。順昌笑曰。無事亂人懷也。顧按上有素榜。徐曰。此龍樹庵僧屬我書者。我向許之。今日不了。亦一負心事。乃題小雲棲三字。後讖年月。投筆而起。就詔獄。凡東林諸君子。皆重名節。視死如歸。若二子從容就死皆可稱。而順昌書榜。尤為所難。可謂了死生者矣。

鹽國魯王

監國魯王九年丙申三月。特敕召朱文恭。敕書見在。文恭破藏謹密。未嘗示人。沒後始出。魯王之名。在禮所諱。故雖門人輩。不得聞之。其對安東省庵之言曰。魯王高皇帝之裔。永曆萬曆皇帝之孫。親則永曆。族屬之尊則魯王。官至輔國中尉。今其世系不可考。偶閱重修闕里誌。跋云。皇明八代孫魯藩輔國中尉貞白朱頤塚。昌六切手書於赤霞館。跋無年月。姑以萬曆四十七年為準推之。闕里誌序。成於萬曆三十七年。而世家誌載六十三代孫孔貞叢。四十七年加運使職。以禮致仕。則全書之成。在四十七年之後。可知矣。至監國九年。相去三十八年。官銜既同。况

魯王守藩 亦當在四十七年之後 然則年代尤近 文恭生於萬曆二十八年庚子 與魯王同時 乃知其名願塚也

湖亭涉筆卷之三終

湖亭涉筆卷之四

澹泊齋安積覺著

困學紀聞載 俗語皆有所本 援引的確 然華人所謂俗語 今世翻有用為雅語者 嘗試言之 如普請釐等波稜菜線蘿蔔 皆華言也 民生日用而不知 則此間俗語 亦豈無有所從來者 若欲一一根究 則徒費精力 無用之極 況世既有蒐獵三史文選等諸書而梓行者乎 覺方讀通鑑時 或有偶合俗語者 輒抄出之 間及南北史 蓋南北史雖雜祥談嘲小事 無所不載 朱子謂溫公取於通鑑之外 皆一部好笑事 故於人情尤近 而多合俗語 然所援引 僅止於南北史通鑑 其陋隘可從而知矣 原無意於綴輯 故掛一漏百 今不忍棄擲 聊列於左 通鑑所載 皆本史語 今不一一檢閱 故標通鑑

新錢 見宋明帝紀 泰始二年斷新錢 專用古錢 休息 見齊明帝紀 凡諸工悉開番假 遞令休息 休息 出詩漢廣篇 然息或作思 非正訓也 祈禱 見東昏侯紀 偏信 蔣侯神 迎來入宮 晝夜祈禱 停止 見梁武帝紀 禪郊之

禮。多命宮人。自今停止。生類見同紀。救太醫不得以生類為藥。以上南史。名馬見魏文成紀。庫莫奚國獻名馬。又周武帝紀。于闐遣使獻名馬。寶劍見同紀。普嵐國獻寶劍。惡馬見北齊神武紀。爾朱榮廐有惡馬。命剪之。拜賀見節愍紀。皇帝即位於太極前殿。羣臣拜賀。通鑑後梁均王紀。賀德倫帥羣臣拜賀。後漢高祖紀。吳越胡進思拜賀。此非朝禮而特拜也。堪忍見孝昭紀。太后嘗心痛不自堪忍。連判見後主紀。領軍一時三十。連判文書。此非今世押字之義。而謂書判之判。然義亦似相通。還俗見周武帝紀。初斷佛道二教。罷沙門道士。並令還俗。運漕見隋文帝紀。開通濟渠以通運漕。落髮見魏靈太后傳。及爾朱榮稱兵度河。太后自落髮。布施及下髮。見京兆王太興傳。太興遇患。請諸沙門行道。所有資財。一時布施。困學紀聞引周語布施優裕。然施物沙門。此為的切。病愈請為沙門。孝文詔皇太子。為之下髮。武藝見河南王暉傳。及長武藝絕人。其餘史書。多武藝字。姑舉之。藝能見南平王渾傳。渾好弓馬。太武器其藝能。金字見河間王琛傳。琛以明帝始學。獻金字孝經。乘具見王瓊傳。廣平王懷以馬并乘具與瓊。管領見薛聰傳。親衛禁兵。孝文委聰管領。供養見奚康生傳。無人供養浮圖。正本見李彪傳。彪表請修史曰。正本蘊之麟閣。副貳藏之名山。修理見楊津傳。津修理戰具。更營雉堞。評議見崔浩傳。太武令羣臣至保太后。太武保母竇氏。前評議。御前見于栗磾傳。自可驅至御前。坐而制之。人別見柳崇傳。崇不問賊事。人別借以溫顏。智略見北齊高乾傳。乾性俊偉有智略。一人當千。見唐龜傳。文宣高澄使龜監宴射之禮。啓太后云。龜一人當千。泊如谷響集引溫彥經以證一人當千語。其說甚備。然見于史傳。當以此為據。名目見隋裴矩傳。諸國山川。未有名目。宥免見于顛傳。文帝慮顛復生邊患。因宥免之。天下第一

見房彥謙傳。文帝令使者察長吏能不。以彥謙為天下第一。本出後漢書李固傳。上手見楊素傳。文帝賜王公以下射。素箭為第一上手。木樣見宇文愷傳。愷獻明堂木樣。以上北史。連名見漢昭帝紀。皇太后昭帝上官皇后詔霍光。與羣臣連名奏王。昌邑王賀。又魏明帝紀。漢魏延令三費律手書與已連名告下諸將。連署見唐憲宗紀。自今奏事。必取崔羣連署。然後進之。連名狀見昭宗紀。劉季述逼崔胤謀廢立。作胤等連名狀。使署名。連狀見穆宗紀。連狀人皆杖脊。胡注謂連名告狀者。與此方所稱。義異而字同。別紙見漢獻帝紀。孫權為牋與曹操。別紙言足下不死。孤不得安。本意見同紀。袁術謂孫策曰。前錯用陳紀。每恨本意不遂。宿意見晉武帝紀。王渾上書曰。懼非陛下追述先帝文明太后待攸。齊王攸武帝弟。之宿意也。本望見宋孝武紀。帝答顏竣詔曰。卿訕訕怨憤。已孤本望。私宅見文帝紀。吏部尚書庾炳之留令史二人。宿於私宅。為有司所糾。弱年見武帝紀。劉湛自弱年即有宰物之情。平愈見同紀。魏主嗣。明元疾。崔浩曰。陛下春秋富盛。行就平愈。墨迹。見文帝紀。范曄謀反。帝以曄墨迹示之。手迹見孝武紀。武昌王渾長吏王翼之封呈其手迹。南史梁武帝紀。帝見周捨手迹。為之流涕。公用見漢哀帝紀。母將隆奏言。武庫兵器。天下公用。國家武備。要用見魏元帝紀。鄧艾煮鹽興治。為軍農要用。雜用見唐穆宗紀。張弘靖留錢二十萬緡。充軍府雜用。先日見漢獻帝紀。劉表大將文聘對曹操曰。先日不能輔弼劉荊州以奉國家。先日字本出史記鄒陽傳。發足見魏元帝紀。蜀譙周沮後主奔南之計曰。恐發足之日。其變不測。路次見晉成帝紀。溫嶠遺陶侃書曰。諸郡軍並在路次。違背見宋孝武紀。竟陵王誕舉兵。參軍賀弼曰。義無違背。唯當以死明心耳。臨月見明帝紀。少府

劉曠妾孕臨月。帝迎入後宮。大慶見同紀。江州佐吏造鄧琬曰。殿下又開黃閣。實為公私大慶。其餘始興王濬書。或是大慶之漸耳。後晉出帝皇太后之命。不任大慶等語。往往有之。蓋本周易履象。大有慶也語。感悅見宋文帝紀。魏主大武。賜柔然邏者衣服而遣之。柔然感悅。唐太宗紀。士卒莫不感悅。憲宗紀。軍士感悅而行。支配見梁武帝紀。東魏高洋召唐龜。使部分將士。龜支配須臾而畢。胡注。支分也。配隸也。遺骨見陳文帝紀。齊人收永安上黨二王遺骨葬之。永安王濬。上黨王洸。並為廢帝所殺。粉骨見後主紀。突厥沙鉢略可汗軍中無食。粉骨為糧。材木見宣帝紀。周尉遲運取宮中材木及牀榻以益火。傳馬見同紀。周韋孝寬每至亭驛。盡驅其傳馬而去。胡注。傳馬。即驛馬。行列見隋文帝紀。諸王侯將相等。以次行列。珍物見煬帝紀。王世充雕飾池臺。奏獻珍物。唐支宗紀。太平公主家。財貨山積。珍物侔於御府。面談見唐高祖紀。上曰。房玄齡為吾兒。太宗陳事。雖隔千里。皆如面談。勸當見高宗紀。王義方奏李義府之罪曰。請更加勸當。此言據律按罪。與俗間所稱不同。而字義有所從來。誓文見則天紀。太后命太子中宗相王睿宗太平公主中宗妹與武攸暨等為誓文。告天地於明堂。誓狀見僖宗紀。呂用之齋誓狀并酒殺。勞畢師鐸。誓書見後晉高祖紀。王延政國王王曦弟遣牙將及女奴。持誓書及香爐與曦盟于宣陵。合按誓文。誓狀。誓書。皆古載書之流也。批判見玄宗紀。張九齡批張守珪奏。胡注。批匹迷翻。今人謂之批判。乳母子見代宗紀。郭子儀歎息曰。子儀諸子皆奴材也。不賞父之都虞候。而惜母之乳母子。樂人見穆宗紀。上數遊宴。擊毬奏樂。賞賜宦官樂人。不可悉紀。要人見後唐莊宗紀。僞梁要人趙巖朱珪等。竊弄威權。此謂權要人也。役人見文宗紀。茶綱役人蕭洪。詐稱蕭太后弟。蕭太后文宗母。此雖與此間所稱役人不同而

其義則有。白徒見懿宗紀。龐勛所將。皆市井白徒。士民見昭宗紀。封州士民百餘人謀亂。此言士人所關涉。追寢正月丙午敕書。悉如咸通以來近例。在城見後梁太祖紀。楚王馬殷命在城都指揮使秦彥暉。將水軍三萬。浮江而下。胡注。在城都指揮使盡統潭州在城之兵。同類見莊宗紀。宦官張容哥謂同類曰。皇后莊宗劉皇后吝財如此。辨口見後周世宗紀。唐主李璟遣鍾謨李德明犒軍。謨德明素辨口。向後見唐武宗紀。考異引李德裕狀曰。向後或要移營進軍。一切自取機便。以上通鑑其餘進上見宋史太宗李賢妃傳。進上尊號。為皇太后。火事見歐陽永叔王旦神道碑。榮王宮火。延前殿。有言非天災。請置獄劾火事。板本儀式口傳見文獻通考經籍考。板本亦不可復得。陳氏續成都記解題錢惟演載國朝禁林儀式事迹。晁氏金坡遺事解題先師口傳。疑莫能明也。陳氏爾雅解題此皆品彙割裂。隨手抄錄。真太倉之一稊米耳。博雅君子。有意訓誨童蒙者。庶刪補之。

握汗
元史趙璧傳。憲宗即位。召璧問曰。天下何如而治。對曰。請先誅近侍之尤不善者。憲宗不悅。璧退。世祖時為親王。曰。秀才汝渾身是膽耶。吾亦為汝握兩手汗也。觀之則世俗所謂兩手握汗者。亦非無所本也。

因緣

因緣二字。出漢書鄭崇傳。崇諫哀帝曰。孔鄉侯。傅晏。皇后父。高武侯。傅喜。以三公封。尚有因緣。

通鑑陳宣帝紀。北齊後主溫公粹泣啓太后曰。有緣復見家家。無緣永別。此即今俗間所云有緣無緣之義也。胡注。齊諸王皆呼嫡母爲家家。

將無同

馬永卿嬾真子。引唐處士劉玄平本書逸文字。今據通鑑補之。稱霍王元軌太宗弟之言。以證將無同之義。謂有同則有異。今初無同。何況於異乎。明范景文弔方正學墓詩有云。憶昔方正學。將無同肝腸。上有夷齊叩馬諫句。此言正學與夷齊無異。則其義可見矣。日本紀用明紀。厩戶皇子束髮於額而隨軍後。自忖度曰。將無見敗。非願難成。將無見敗。即言敗也。舍人親王用將無字。亦猶阮瞻語意也。

從父昆弟

從父兄弟。史傳直謂之兄弟。史記漢文帝曰。楚王高祖弟元王交季父也。吳王兄也。吳王濞高祖兄仲之子。而文帝之從父兄也。巫蠱之禍。武帝怒曰。丞相無周公之風矣。周公不誅管蔡乎。丞相劉屈氂。中山靖王勝武帝兄之子。而戾太子之從父昆弟也。故武帝直以爲兄弟。責屈氂以周公之事。宋王珪漢議曰。漢安懿王。英宗父。於仁宗爲兄。於皇帝英宗宜稱皇伯而不名。漢王允讓。仁宗叔父商王元份之子。而於仁宗爲從父兄。唐顏真卿謂朱滔王武俊等使曰。汝知有罵安祿山而死者顏杲卿乎。乃吾兄也。據唐書。杲卿與真卿同五世祖。則爲疏屬。蓋以其在兄行。故稱之爲兄耳。袁紹術之從

父兄也。賈詡語紹使曰。歸謝袁本初。兄弟不能相容。而能容天下國士乎。謝惠連靈運之族弟也。靈運呼之爲弟。其餘不暇縷數。姑舉一二耳。

叔祖

韓文與元少尹房君武墓誌云。公會祖諱玄靜。太尉瑄之叔父也。蔣之翹注。玄靜父彥雲有二子。長玄基。次玄靜。玄基子融。融子瑄。據此則玄靜融之叔父。而瑄之叔祖也。豈叔祖亦謂之叔父乎。又云公生男六人。其長曰次卿。公母弟式謂愈曰。子與吾兒次卿游。我重知子。據本文。次卿武之子。而式之姪也。蓋姪猶子也。故云吾兒。其謂從父兄弟爲兄弟。叔祖爲叔父。皆親親之義也。

養息

通鑑晉穆帝紀。燕王雋慕容雋子使封裕諱趙使曰。冉閔石氏石虎養息。梁武帝紀。魏河間王琛文成孫求爲宦者劉騰養息。下文曰。騰卒。宦官爲騰養息。重服者四十餘人。養息即養息也。又謂之義兒。五代史有義兒傳。養弟見晉成帝紀。成主期李雄子鳩殺漢王壽李驥子養弟安北將軍攸。養女見唐中宗紀。唐休璟娶賀妻尙宮養女爲其子婦。息女見唐書魏徵傳。鄭仁基息女美而才。養父見北史魏京兆王愉傳。孝文子愉納姜李氏。本姓楊。欲進貴之。託中郎將李恃顯爲之養父。

徵君

後漢書黃憲傳。天下號曰徵君。姜肱傳。盜聞而感悔。就精廬求見徵君。章懷注。以其嘗蒙徵聘。

故稱爲徵君。徵君之稱。蓋起於東漢之世矣。

佛屋

通鑑晉簡文紀。褚太后在佛屋燒香。胡注。建屋於宮中以奉佛。故謂之佛屋。按世俗家家事佛者即此也。

百六公

晉元帝中興江左。用諸名勝爲掾屬。時有百六掾之目。南史張綰傳。湘東王繹。梁元帝嘗策之百事。綰對闕其六。號爲百六公。百六之稱偶相同。

二建

左傳書二慶。襄七年。慶虎。慶寅。二禮。襄二十五年。禮至昆弟。二郤。襄二十六年。郤錡。郤至。二穆。同上。杜注。楚子重子辛皆出穆王。故曰二穆。皆舉其姓或先王之諡也。通鑑唐僖宗紀。二建相謂曰。僕射。鹿晏弘。甘言厚意。疑我也。田令孜密遣人。以厚利誘之。二建逃奔行在。二建謂王建韓建也。據此則非特舉姓。而名亦可稱二某也。

獅子舞

元史賀勝傳。順帝一日獵還。勝參乘。伶人蒙采蟲。作獅子舞以迎駕。輿象驚。奔逸不可制。勝投身當象前。後至者斷鞞縱象。乘輿乃安。按宋宗慤製獅子形以破林邑象陣。此兵略也。伶人獅子舞則與此方所有無異。乃知異邦亦有此戲也。

妥貼

韓昌黎薦士詩。橫空盤硬語。妥帖力排冪。妥帖二字。後世書牘。用爲常語。其義易曉。故無注。通鑑唐德宗紀。李泌曰。易帥之間。軍中煩言。乃其常理。泌到自妥貼矣。胡注引史炤注曰。妥安也。貼伏也。亦作帖。可見帖貼通用。

舐糠

史記吳王濞傳。舐糠及米。漢書舐作舐。注師古曰。舐古舐字。用舌食也。按舐與舐同。故索隱直以舐字解之。續日本紀光仁紀。皇太子令旨。光仁天皇。道鏡法師竊挾舐糠之心。爲日久矣。此用史記語也。

眞贋

通鑑宋紀。廢帝闍人華願兒言於帝曰。道路皆言宮中有二天子。法興眞天子。戴法興官爲贋天子。溫公考異曰。宋畧作鴈天子。按字書贋僞物也。韓愈詩曰。居然見眞贋。或作鴈。今按韓非子。齊伐魯索讒鼎。魯以其鴈往。鴈字蓋出於此。偶閱僧萬里詩集。上杉定正號贋釣齋。定正修理大夫持朝子

漿酒藿肉

漢書。鮑宣上書。論外親及董賢曰。奴從賓客。漿酒藿肉。注視酒如漿。視肉如藿也。杜牧阿房宮賦。鼎鑪玉石。金塊珠礫。此句法也。明顧廻瀾漢武帝論。卒之瘡民而蝗國。川血而山骸。用字

益錢刻矣。

頭子

歐陽永叔五代史論曰。白文珂王守恩皆漢大臣。而周太祖以一樞密使頭子而易置之。如更戍卒。是時太祖未有無君之志而所為如此者。蓋習為常事。故文珂不敢違。守恩不敢拒。太祖既處之不疑。而漢廷君臣。亦置而不問。豈非綱紀壞亂之至而至於此歟。通鑑後漢隱帝紀。樞密使郭威以頭子命保義節度使同平章事白文珂。代王守恩為西京留守。五代西京洛陽也。胡注。沈括曰。後唐莊宗復樞密使郭崇韜安重誨相繼為之。始分領政事。不關由中書。直行下者謂之宣。如中書之敕。小事則發頭子。擬堂帖也。遼史國語解曰。遼制宰相凡除拜。行頭子堂帖。故官有知頭子事。見陰山雜錄。按邵氏聞見錄。韓魏公坐政事堂。以頭子勾任守忠。立廷下數之。鶴林玉露亦載此事。守忠閩人。猶可謂之小事。至周太祖用頭子。則不可謂之小事。當時習俗已然。誠如永叔之論。沈存中筆談。特言其所由起耳。

過所

漢書文帝紀。除關無用傳。注張晏曰。傳信也。若今過所也。通鑑唐太宗紀。司門員外郎韋元方給給使過所稽緩。後漢隱帝紀。樞密使楊邠為政苛細。奏行道往來者。皆給過所。胡注。盛唐之制。天下關二十六。度關者。從司門郎中給過所。猶漢時度關用傳也。宋白曰。古書之帛為繻。刻木

為契。二物通謂過所也。今時所謂過所。亦此義也。

招提蘭若

通鑑唐武宗會昌五年。詔陳釋教之弊。宣告中外。凡天下所毀寺四千六百餘區。招提蘭若四萬餘區。考異曰。會要元和二年。薛平奏請賜中條山蘭若額為大和寺。蓋官賜額者為寺。私造者為招提蘭若。杜牧所謂山臺野邑是也。綱目集覽引釋氏要覽及杜詩注。今攷二書。隋煬帝改寺為道場。唐復為寺。寺謂之招提。或名伽藍。或名道場。其實一也。又有敕額寺。通鑑後周世宗顯德二年敕。天下寺院非敕額者悉廢之。胡注。敕額者敕賜寺額。如慈恩安國興唐之類。

申上

通鑑宋明帝紀。上虞令王晏謂峭山民曰。可作首辭。當相為申上。此申理上聞之義也。唐昭宗紀。王宗侃以狀白王建七事。建得之大喜。即行之。悉如所申。此與今世書牘所用申字之義無異。

委曲

通鑑後周太祖紀。太祖遣湘陰公劉贇。北漢劉崇子。書曰。俟新節度入城。當各除刺史。公可更以委曲示之。胡注。唐宋主帥以手書諭示將佐。率謂之委曲。唐僖宗紀亦有委曲字。注云。當時機密文書。謂之委曲。余嘗見圓悟禪師手筆。建炎二年。月日。克勤委曲。示華藏堂頭密印。其餘禪錄多用委曲字。蓋自唐末已有此語。

京都

京師之義。見公羊傳。晉景王諱師。故晉人避之。率謂京師為京都。如蜀譙周請身詣京都之類是也。楊升庵辨都字之義。及京樣野樣之說悉矣。

殺杖

文德實錄諸衛府獻剛卯杖。往往書殺杖。說文殺改大剛卯。以逐鬼魅。漢書王莽傳注。服虔曰。剛卯以正月卯日作。其制詳見輟耕錄。按皇朝卯杖之儀。昉於持統帝三年。蓋倣剛卯之制也。殺字以改為正。正字通改字下辨之詳矣。

芳宜宴

光仁天皇寶龜六年八月。始設蓮葉宴。仁明天皇承和元年九月。曲宴清涼殿。謂之芳宜華譙。十一年八月。御紫宸殿。有芳宜花宴。載于續日本紀續日本後紀。而蓮葉宴無復所見。芳宜即萩。倭名抄所謂鹿鳴草。而農政全書所載胡枝子近之。

納隍

皇朝詔敕。多用納隍字。續日本紀聖武紀。求衣忘寢。思切納隍。光仁紀。風化未洽。恒深納隍之懷。其餘屢見。若已推而納之溝中之義也。班孟堅東京賦。人或不得其所。若已納之於隍。蓋詞臣祖之也。

腦子

宋廖瑩中。賈似道幕客也。靠勢怙權。似道敗。吞腦子自殺。文天祥被執北行。亦吞腦子而不死。本草綱目龍腦下。潘氏曰。文天祥賈似道皆服腦子。求死不得。唯廖瑩中以熱酒服數握。九竅流血而死。此非腦子有毒。乃熱酒引其辛香。散溢經絡。氣血沸亂而然爾。乃知腦子即為龍腦。物性相激。寒溫皆同。冷水發野葛之毒。亦此類也。

御筆

北史魏彭城王勰。獻文子。傳。孝文令勰為露布。及就尤類帝文。有人見者。咸謂御筆。此非筆畫而言體裁之似也。宋景濂題宋孝宗史丞相。史衛王浩。內批曰。凡有旨從。內出者曰內批。又謂之御筆。皆內夫人代書。而所謂御寶批者。或上批。或內夫人批。皆識之以御寶。唯親筆則上親書押字而不用寶。此批不用寶而有押字。正所謂親筆者也。觀之則御筆親筆。自有分別。押字昉於唐韋陟。而世俗貴之。過於印章。其義亦自可見矣。

鬼脉

文選潘安仁射雉賦。靡聞而驚。無見自驚。注。驚音脉。翰曰。驚猶疑也。爰曰。驚亦從脉。方言曰。脉。俗謂黥為鬼脉。言雉性驚鬼黥。三代實錄伴善男生而爽俊。天資鬼脉。見之者皆曰黥兒。蓋據安仁賦也。

蘭綺

張衡西京賦。武庫禁兵。設在蘭綺。注銑曰。蘭綺兵架也。陳列於甲第之門。若今戟門。善曰。受他兵曰蘭。受弩曰綺。三代實錄藤原氏宗辭大將表。兼寵蘭綺之上。志力那堪。蘭綺謂此也。

法

漢書揚雄傳。以罔爲周法。注李奇曰。法遮禽獸圍陣也。音祛。續日本紀聖武紀。造法捕禽獸者。先朝禁斷。蓋據雄傳也。

嬖

三代實錄清和紀。敍右大臣藤原良相履歷曰。仁明天皇煎練五石。試觀近侍先賞。欲知精麤。黃門數輩。慮無飲服之者。大臣輒嘗之。正字通通作儻。儻兩舉切。心不欲爲也。

蝮

續日本後紀鑄新錢承和昌寶詔曰。蝮影栖縉。彰於舊術。正字通蝮牛劬切。注見蝮下。蝮水蟲。似小蟬而長。青金色。一名蝮蝮。乃知蝮即爲蝮。故詔文下有云。子去母隨。適時開務。

齷

漢書揚雄傳。反離騷。何文肆而質齷。注齷音械。狹也。質齷者。恨世不用己而自沈也。宋僧簡北磻詩文遒勁。自號齷室。嗣法佛照光。傳至物初觀。晦機熙。笑隱訖。故笑隱蒲室集。稱北磻曰吾曾

大父齷室翁。

竺

都氏文集答右大臣基經敕曰。同之生存。答恩竺也。又曰。確請竺苦。見於詞章。韻會竺厚也。篤字注云。說文徐云。本作竺。詩篤公劉。論語行篤敬之類。皆當作竺。假借作篤字也。

去

通鑑晉武帝紀。王濬上表。臣以十五日至三山。渾王渾。欲令臣明十六日悉將所領還圍石頭。下文云。去二月武昌失守。水軍行至。胡注。二月已過。故云去二月。北史魏崔光傳。光和二年八月光表曰。去二十八日有物出于太極之西序。今世書牘。月日上用去字。或云明幾日。亦有所從來矣。

泊

俗間用泊字爲宿字義。人或非之曰。泊泊舟也。不可施之居處。此說拘泥。按字書。泊止息也。舟附於岸曰泊。則止息其本義也。佛經譬如太末蟲。處處能泊。唯不能泊於燈燄上。通鑑後唐莊宗紀。李嗣源。明宗。前鋒至潞州。日已暝。泊軍方定。下無音注。蓋潞州上黨。古韓地而非水國。既云泊軍。其非舟師明矣。

阿字入聲

正字通阿平聲。又葛韻。借爲發語辭。古詩家中有阿誰。今讀阿如渥。又釋有阿難。按通鑑晉惠帝

紀。賈謐走入西鍾下。呼曰。阿后救我。胡注。阿今相傳從安入聲。宋文帝紀。王球謂其姪履曰。阿父在。汝亦何憂。注。江南人士。呼叔父伯父為阿父。為伯父叔父者以自呼。阿烏葛翻。其餘不可悉舉。據此則元將阿尤阿里海涯等。皆當從安入聲。杜詩守歲阿戎家。王荆公詩凍雲深閉阿香車。阿字皆當入聲讀。今明清俗語阿哥阿弟。皆入聲呼之。洪武正韻單為平聲。蓋入聲俗間音也。

欺字訓陵

字書。欺謾也。詐也。陵也。妄也。通鑑涼王呂纂責呂超曰。卿恃兄弟桓桓。乃敢欺吾。胡注。今人謂相陵為相欺。宋元通鑑劉錡守順昌城。金人來攻。軍士皆奮爭呼躍曰。平日人欺我八字軍。今日我當為國家破賊立功。韓昌黎雪詩。欺梅併壓枝。歐陽永叔雪詩。寒欺白酒嫩。皆陵字義。而今世俗有欺鬼之語。亦此義也。

昆布

續日本紀元正紀。蝦夷須賀君古麻比留等言。先祖以來。貢獻昆布。常採北地。唐書渤海傳。大曆中渤海王大欽茂。以日本舞女十一獻諸朝。俗所貴者。大白山之菟。南海之昆布。按渤海之南海。即我邦之北海。昆布之見于史傳久矣。

茶

貝原損軒大和本草書茶原始曰。茶子傳于本邦。蓋在中古時。源順和名抄載茶茗。朝野羣載載藤原

敦光茶贊。海人藻芥云。葉上僧正。千光國師榮西。入宋時。再傳種子於梅尾明慧上人。既云再傳。則非始得者。損軒博洽之士。考據精確。然猶有遺者。類聚國史弘仁六年六月壬寅。令畿內及近江丹波播磨等國植茶。每年獻之。則自嵯峨朝已有之矣。

火飯

宋元通鑑靖康之亂。粘沒喝至汴京城下。雨雪交作。欽宗被甲登城。以御膳賜士卒。易火飯以進。人皆感涕。火飯即此所謂燒飯。乃知兵士充饗也。偶記亡友佐宗淳嘗談。朝鮮之役。加藤清兵衛加藤將校。時清正督修築在機張。守蔚山。明將李如梅來攻。城兵發銃甚急。時肥後一僧在城中。倉卒間使之裝火藥。兩手盡黑。飢不暇食。城兵以火飯置掌上。僧輒啖之。黑處隨團飯脫去。痕迹瞭然。宗淳少年時。親聞僧語如此。城兵拒守之急。亦可想見矣。

蕎麥

續日本紀養老六年七月。勸課天下。種樹晚禾蕎麥。其餘類聚三代格所載課督播殖。用濟農食。不減大小二麥。宋史禮志。秋季月嘗豆。嘗蕎麥。景祐中禮官議。薦新舊有林檎蕎麥諸菓之類。及季秋嘗酒。並合刪去。種放傳。放山居。草舍五六區。啖野蔬蕎麥。觀之則宋時蕎麥之用。通於尊卑矣。

老圃詩腴

涉筆草罷。偶看劉靜修讀史評詩云。記錄紛紛已失真。語言輕重在詞臣。若將字字論心術。便有無邊受屈人。乃輾然自笑曰。老圃頗涉書史。亦非冥頑不靈者。不以澆菜藝菊之餘。反求諸己。自攻其短。而敢弄唇吻。輕議古人。不亦悖乎。其志本在欲備遺忘。而其迹不免僭踰之責。因輟而不為。竹爐湯沸。茗芽一啜。便覺芳潤逼脾。忽憶平生與客談詩。粗有所得。無益之甚。不足哀纂。而習氣未除。竄綴于此。以資灌畦之暇。亦欲備老境之遺忘也。

懷風藻載大津皇子臨刑詩曰。金烏臨西舍。鼓聲催短命。泉路無賓主。此夕誰家向。當時言詩。防於大友童。而同時有大津皇子。日本紀稱其自幼好學。博覽屬文。而輒謀不軌。不能充其才。

惜哉。石倉詩選曹學佺字能始號石倉引明興雜記曰。太祖誅藍玉。籍其家。凡有隻字往來皆得罪。孫黃字

仲衍號西庵。因與玉題一畫故殺之。其絕命詩曰。鼙鼓三聲急。西山日又斜。黃泉無客舍。今夜宿誰家。詩意悽惻。絕與皇子之詩相似。今按朱鳥元年皇子賜死。與唐中宗嗣聖三年相值。據獻徵錄

蒼死在洪武二十年。嗣聖三年至洪武二十年。相距七百餘年。明人未必見懷風藻。縱見之。未必蹈襲。事之偶合。乃有如此者。

扶桑集。大江音人呈渤海表大使詩。虛聲我類羊公鶴。遠操君同馬岌龍。和裴大使詩。遠排波母青

山鶴。近對東王紫麓松。重酬裴大使詩。占雲雖伴荷鳴鶴。摛藻多慙范彥龍。按晉書宋纖傳。馬岌

稱纖曰。先生人中之龍。唐類函引聖賢冢墓記曰。東平王歸國思京師。後薨葬東平。其冢上松柏皆

西靡。梁范雲字彥龍。皆用事精切。雖類崑體。而氣脉深厚。源順五歎吟。年少昔思懷橘志。痛深

今戀折菱恩。婉曲有味。可謂善用事者也。

王維夷門歌。七十老翁何所求。解者引晉段灼追理鄧艾語。是也。宋孝武帝撫慰王玄謨曰。七十老

公。反欲何求。君臣之際。足以相保。亦用段灼語也。

張說三月二十日承恩樂遊園宴排律中聯云。皇情貸芳月。旬宴美成功。魚戲芙蓉水。鶯啼楊柳風。句

宴。皇朝典故。而沿唐制者也。

陳子昂峴山懷古。野樹蒼煙斷。津樓晚氣孤。過荊州。古樹蒼煙斷。虛庭白露寒。二聯偶同而不妨其

高。陳后山登鷓鴣山。朴俗猶虞力。安流尚禹謨。蓋祖子昂白帝懷古。荒服仍周甸。深山尚禹功句也。

初唐詩亦有鍊字琢句極尖巧者。如王勃泥溪排律。溜急船文亂。岩斜騎影移。又云。風生蘋浦葉。露

泣竹潭枝。此等語猶不能脫齊梁綺靡之習。而其雄渾之氣。自然胚胎盛唐諸子。觀其全篇可知矣。

劉長卿。種荷依野水。移柳待山鶯。薛能。雜草因逢藥。移花更得鶯。劉句妙在待字。薛句妙在

得字。

通鑑。齊高帝擊沈攸之。劉善明謂高帝曰。今六師齊奮。諸侯同舉。此籠中之鳥耳。杜詩。日月籠

中鳥。蓋用此語。而集注但云。人生奔馳歲月。如籠中之鳥。局促不得自由。姑錄此以備參考。堯山堂外紀曰。至天隱所注唐三體詩。置長洲積沙寺。今吳人稱積沙唐詩是也。余竊疑五言律詩中所載常建泊舟盱眙詩。雖格律平正。而不類常建諸詩。偶閱唐詩紀事。此詩作韋建。而云建與蕭穎士最善。據此則韋建中唐詩人也。三體詩卷首載詩人履歷。有常建。無韋建。常章二字相近。乃知從來誤以韋為常。而非板刻之訛也。焦弱侯極詆。三體詩。唐詩鼓吹。所取大抵皆晚唐之最下者。其人無識而寡學。要不足辨。未知果是否。

盧綸。孤村樹色昏殘雨。遠寺鐘聲帶夕陽。積沙唐詩收之。固為警策。喻冕。樹色含殘雨。河流帶夕陽。唐詩品彙收之。亦不妨其高妙。但考世次。綸為大曆才子。冕乃開成進士。恐不免蹈襲耳。李羣玉送秦煉師。水流寧有意。雲汎本無心。此全摸倣少陵水流心不競。雲在意俱遲二句。而格力不逮甚遠。此乃盛晚之所由判歟。

老學庵筆記曰。遼相李儼作黃菊賦。獻其主耶律洪基。洪基作詩題其後以賜之云。昨日得卿黃菊賦。碎剪金英填作句。袖中猶覺有餘香。冷落西風吹不去。今按洪基道宗也。此詩儘有風致。堯山堂外紀曰。僧舊著黑衣。元文宗寵愛笑隱。賜以黃衣。其徒後皆衣黃。歐陽原功。玄字。題僧墨菊詩曰。蕊蕊元是黑衣郎。當代深仁始賜黃。今日黃花翻潑墨。本來面目見馨香。據此則僧著黃衣。蓋昉于蒲室也。

萬姓統譜。沈莊可宣和間進士。知錢塘縣事。嗜菊。庭植數十本。晚年退居。益放情于菊。後以九月九日死。朱熹哭之詩曰。愛菊平生不愛錢。此君原是菊花仙。正當地下修文日。恰值人間落帽天。生與唐詩同一脈。死隨陶逕葬千年。如今忍向西郊哭。東野無兒真可憐。今檢文集無之。詩亦尖巧。不類文公作。蓋嫁名也。恐其誤人。故錄之。

元謝宗可走馬燈詩曰。鸞輪擁騎出炎精。飛繞人間不夜城。風鬣追星低有影。霜蹄逐電去無聲。秦軍夜潰咸陽火。吳炬宵馳赤壁兵。却憶雕鞍年少日。章臺踏踏月華明。堯山堂外紀為謝宗可詩。薩天錫集載之。為天錫詩。字亦稍有不同。未知孰是。戴九靈插秧婦詩曰。青秧蒙頭作野妝。輕移蓮步水雲鄉。裙翻蝶蝶隨風舞。手學蜻蜓點水忙。緊束暖煙青滿把。細分春雨綠成行。村歌欲和聲難調。羞殺揚鞭馬上郎。走馬燈。插秧婦。皆此間所有。二詩黏皮著骨。雖非極致。而亦可備詠物一體。夜潰二字。蓋本左傳鄭人宵潰語。

明袁凱。字景文號海叟。白燕詩。世以為絕唱。柳絮池塘香入夢。梨花庭院冷侵衣。一聯尤勝。然余嘗見元雅琥。字正卿。詠二月梅詩云。梨花院落為雲妬。柳絮池塘作雪猜。二聯皆剽竊晏元獻句。琥元人。凱元末明初人。蓋同時而未知孰先孰後。必有一相犯者。然世稱凱為袁白燕。則凱之詩名著矣。琥詩全首見堯山堂外紀。

王廷相芳樹詩。芳樹不相惜。與藤相縈繫。歲久藤枝繁。見藤不見樹。俞安期鍾藤謠。鍾藤纏樹枝。樹枯藤作樹。隣婦媚私郎。歲久翻作私郎婦。二首一意。而安期比况尤深。推而可喻姦雄之篡奪。

蓋能得謠體者也。

唐荆川竹徑詩。面面隔深竹。茅齋在何處。遙聞犬吠聲。試從此路去。余竊謂此全與宋僧惠諶唯聞犬吠聲。又入煙蘿去之句相同。明人不嫌其蹈襲。取而入選。世必有能辨其工拙者也。

高季迪梅花八首。皆高古超絕。可與西湖八詠參看。其第一首結句曰。秦人若解當時種。不引漁郎入洞天。命意甚新。然元劉須溪有漁人入得桃花洞。唯有梅花路未通之句。則落第二義矣。又季迪有梅花詩云。雪滿山中高士臥。月明林下美人來。凡選明詩者。莫不取之。唯鍾伯敬唐詩歸引此一聯云。腐不可言。而明詩歸亦收之。蓋明詩歸非伯敬所選。余嘗辨之矣。

明詩歸文震孟舟中詠桂花詩。早識廣寒多險徑。悔從碧落占先春。詳味語意。蓋震孟坐東林黨削籍後所作。醞藉含蓄。無限低回。異於曠日張拳者矣。方文庚寅元旦詩。卜肆尙能言孝弟。醫方猶可立君臣。滄桑之感。亦足動人悲思。明季遺聞書大學士范景文甲申殉節。而不載其絕筆詩。今錄于此。孤臣空洒淚。天步遂如斯。妖蝕三光暗。心盟九廟知。翠華迷草路。淮水漲煙澌。故國千年恨。忠魂繞玉墀。翠華淮水。言弘光南渡。亦甚淒切矣。

詩歸張居正怨歌行曰。步出上東門。桃李夾路傍。花花自相對。葉葉自相當。野客叢書載宋于侯董嬌嬈詩。洛陽城東路。桃李生路傍。花花自相對。葉葉自相當。謂襲曹植豔歌行。江陵又襲于侯詩。何剽竊之甚耶。

性靈集後夜聞佛法僧鳥詩曰。寒林獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。一鳥有聲人有心。心聲雲水俱了了。惺窩先生以為集中第一。羅山先生謂唐顧況詩。棲霞寺裏子規鳥。口中血出啼不了。山僧後夜初入定。聞似不聞山月曉。其體相似。韻亦偶同。山背國字縣醜湖山有佛法僧鳥。見羅山隨筆。按日本紀略延喜六年八月。右大臣源光修法華八講。佛法僧鳥來鳴。此外不多見。近世釋元政詩。亦用其韻曰。梵音嘹唳頻迦鳥。如是我聞便明了。翻來奈何學似人。月入破窻林寺曉。蓋有意效之者。而弘法詩渾厚天成。不可以色相求。元政詩雖相去甚遠。亦脫灑可喜。

客兒家聲風流相。奈此才高骭髀何。心雜難入遠公社。于思誰誦華元歌。登臨屐老風雲變。翻譯臺荒草樹多。千古使人仰高致。長髯乞與病維摩。右會稽沙門稽文會題謝靈運像。藏在和州山邊郡多田來迎寺。佐宗淳嘗見其手筆。為余誦之。恐其遺落。故錄于此。文會明初僧。客兒靈運小字也。

東國通鑑載端午石戰。朝鮮李穡牧隱集有詩曰。年年端午聚羣頑。飛石相攻兩陣間。馬市川邊朝已集。僧齋寺北暮初還。忽然被逐輕如葉。屹爾當衝重似山。只為朝廷求勇士。殘傷面目亦胡顏。昔時此方俗習。亦與韓地無異。兒戲之害於事者也。寬永中下令禁之。按唐王式討裘甫。通鑑考異引平剡錄曰。諸軍圍賊於剡。賊悍甚。其所謂女軍者。亦乘城摘礮以中人。此真石戰者也。

朱子語類曰。先生偶誦寒山數詩。其一曰。城中蛾眉女。珠佩何珊珊。鸚鵡花間弄。琵琶月下彈。長歌三日響。短舞萬人看。未必長如此。芙蓉不奈寒。云如此類煞有好处。詩人未易到此。

王應麟曰。寒山子楚辭。尤超出筆墨畦逕云。有人兮山陲。雲卷兮霞縷。秉芳兮欲寄。路漫兮難征。心惆悵兮狐疑。塞濁立兮忠貞。觀之則非特妙於詩。楚辭亦有得於自然者歟。劉須溪曰。晉人語言。使意用為詩。皆當掩出古今。善它真故也。此從漸近自然語中看出。善論詩者也。然真者不可著力為之。老練之極。自然化為真耳。蓋初盛之詩。情景皆真。如蘭陵王長恭之臨陣。婉麗伉壯。其鋒自不可當也。中晚如顧況一別二十年。人堪幾回別。周賀空將未歸意。說向欲行人。張蠟共看今夜月。獨作異鄉人。雖不能及初盛。亦不失其真處。元人絕句高處自逼中晚。如陳剛中老母越南垂白髮。病妻燕北倚黃昏。蠻烟瘴雨交州客。三處相思一夢魂。凄楚溢于言外。可謂善它真者也。

陶韋柳妙處。已經古人多少品藻。今若拈起。則何異優孟衣冠。故特舉明人效韋者。以見其流風遺韻。楊基字孟載號眉庵明初四傑之一有雨中效韋體寄友四首。皆清麗莊雅。其一寄僧道衍太子少師姚廣孝曰。叢林翳重岡。迢遞僧居獨。憑軒一悵望。春雨蘸蕪綠。泉香花落磬。窻暝松圍屋。憶爾諷經餘。袈裟坐深竹。韋詩妙在工拙之外。楊則姿態橫出。針線可覓。而不失其蕭散開澹之趣。可謂善學柳下惠者矣。余非左袒於韋者。陶如寒山子詩。非可學而能者。韋集中亦有過於真率。不可為法者。柳之妙處。世當有自知之者矣。

朱文恭遺事

覺自十三歲春。師事文恭。不限歲月。而至十五歲春。病痘還鄉。遂不復侍函丈。執弟子職。不滿三年。而斂枕篋。備灑掃。日夜供給。僅受孝經小學大學論語句讀。為學之方。作文之法。一無所聞。還鄉之後。玩歲愒日。放浪自恣。今犬馬之齒將頽。而學業不成。其所存者。稍辨華音一事。由其課程嚴峻。晨讀夕誦。故至今不忘耳。當時及門者。相繼淪謝。而覺獨存。皓首黃髮。淺陋不異童穉時。其忝門人之名。不亦可羞之甚乎。往年蒙命。與今井弘濟編次文集。撰述行實。亦頗詳矣。追憶宿昔文恭自持嚴毅。接人和愉。與客談論。間及俚諺嘲笑之事。其餘當時所見聞。雖不足書之簡冊。而又恐一旦溘先朝露。子孫不能知之。故不論雅俗。隨所記憶。漫筆于此。若講學論文之言。則備於先輩安東省庵所纂心喪集語中矣。文恭湖望必望拜。黎明門弟子掃堂設几。展氈備香燭。文恭披道服。戴包玉巾。東向而拜。口誦細語食頃。竟不知其為何等語。蓋文集所載庚寅年永曆四年陷難告天文等類也。作書牘。不立稿。或楷或草。揮筆輒成。作大文字則立稿。文成而經行室中。殆數十返。朗誦其文。有不允愜者。復座改之。蓋音節響亮抑揚頓挫之謂。而門人輩皆不能曉也。文恭喜賓客。不擇貴賤。非有疾病事故。未嘗不應接。饜客隨家有無。必竭其誠。客有問起居

憚其勞勩不見而去者。意不憚曰。辭客在主人。客何辭主人。若鉅儒碩士來訪。論道談文。則自日午至夜半。覺等惟思困睡。而文恭未嘗厭倦也。不能飲酒。而喜客飲。時或對棋。棋不甚高。藏書甚少。其自崎港帶來者。不過兩篋。而多闕失。完全者亦少。好看陸宣公奏議資治通鑑及來武江。方購得京師所鈔通鑑綱目。至作文字。出入經史。上下古今。媿、數千言。皆其腹中所蓄也。

文恭嘗曰。讀書有三到。曰心到。口到。眼到。又曰。作文有頓承應結伏呼啓轉等法。當時童年不能請益。至今為憾。

大啓有冒。有承。有腹。中謝自敘。用伏願無任等字。或駢詞。或散體。小啓各色簡略。全用散體。

舉子場屋之文。上書本貫姓名。反摺而緘之。紙糊其上。捺印。送考試官。謂之彌封。

與父同年及第者。稱年伯。

明朝之制。軍門以上有闕。三槐九棘六科。會議而推之。三槐北向。三公也。九棘分左右。左為駙

馬五軍都督府。右為九卿。都察院。通政司。大理寺。光祿寺。太常寺。太僕寺。鴻臚寺。尙寶司。

順天府尹。是也。六科南向。吏禮戶刑兵工六都給事也。班定議協。選一人。書姓名。謂之真推。

其下又書一人。謂之陪推。皇帝覽訖。或真推。或陪推。有御畫。即以其人補官。今按周禮朝士掌

外朝之法。左九棘。孤卿大夫位焉。右九棘。公侯伯子男位焉。則明之官制。亦倣周制也。

省有三司。都司。布政司。按察司。是也。有軍門巡按。監察御史。鹽運司。府有知府。同知。通

判。推官。經歷。知事。簡較。照磨。州有知州。同知。州判。吏目。縣有知縣。縣丞。主簿。

典史。衛有鎮撫經歷。知事。所有千戶。副千戶。百戶。鎮撫。吏目。五所。鎮撫。指揮使。指揮

同知。指揮僉事。十八指揮。是也。凡此皆非文恭所書者。少年時聽其話所割記。必有舛誤。覽者

考究焉。

北京用錢。大約與本朝同。河南以錢十一文換銀一兩。其餘處處不同。

十錢為一兩。十六兩為一斤。一升之米。其重百九十二錢。

松江餘姚俗。罵人曰長工。北人罵人曰黃桑。

八月雨曰木犀雨。

吳山開。越水澗。他山石。鍊劍鏗。皆刀名。

找語。找尾。言語既了。又言其餘也。找尋。尋究也。找音驛。與划同。

鶻突。鶻者鷓屬。飛颺無定。故言語無定。不可把住者。謂之鶻突。鶻崙吞棗。言不辨其狀也。

鶻即崑字。音急訛作鶻字。或作囫圇。圖或作圖。皆俗字也。

五十川剛伯問光棍老棍等義。文恭對曰。姦猾詭詐。意在誑騙欺人。不循道理。不懼笑耻者。謂

之光棍。積年狡黠。油嘴騙舌者。謂之老棍。紮詐錢財者。謂之姦棍。姦猾之尤者。謂之精光棍。無籍亡命。謂之無皮老棍。又曰沒皮光棍。光棍者言不可捉摸也。行路唱歌者。俗謂之道上行殍。以譬殯葬時乞兒唱挽歌。甚鄙之也。按道上行殍。本晉袁山松事也。諺曰。清明斷雪。穀雨斷霜。又曰。白酒紅人面。黃金黑盜心。有媒人。極言女子之姦。娶之而醜。夫家大怒。欲毆媒人。其人罵曰。花對花。柳對柳。破糞箕對生苕帚。生音芝。俗字。猶言敵苕帚也。蘇州一知縣見翁仲。問通判曰。為何物。通判誤對曰仲翁。知縣作詩嘲之曰。翁仲緣何叫仲翁。只因書讀欠工夫。自然難入林翰院。祇好州蘇作判通。文恭酷愛櫻花。庭植數十株。每花開賞之。謂覺等曰。使中國有之。當冠百花。迺知或者認為海棠。可謂櫻花之厄。義公環植櫻樹於祠堂旁側。存遺愛也。酒宿亦曰青筍。以木綿為之。不寫字。廣終幅。長三四尺。上下皆紅。城市酒旗。以藍布為之。上下用紅絹。鄉村間以草為帚。貫於竹竿。標於大木之上。曰酒望子。他如賣酒之家。以板為之。標酒坊二字。寫神仙留玉珮。卿相解金貂。中山千日酒。開樽十里香等句。如此俗聯。不可勝數。文恭不作詩。嘗曰。今詩比古詩。無根之華藻。無益于民風世教。而學者汲汲為之。不過取名干譽而已。即此一念。已不可入於聖賢大學之道。文恭務為古學。視時文為糜飯土羹。況於詩乎。

亦以明季浮薄之流。祖尚鍾譚袁中郎之說。詆訶何李。凌蔑高楊張徐。猶文章之徒。攻擊道學之士。不唯無益。而反有害。故絕口不為耳。文恭非不曉詩者。其論李杜曰。究竟李不如杜。李秀而杜老。李奇險而杜平淡。然不奇與之極。造不得平淡。有意學平淡。便水平煎豆腐湯矣。苟非深于詩者。不能道此語。竹洞野友示文恭詩云。在安南旅寓所賦。蓋自崎港所傳也。今錄于此。治劇從容緩策衝。鈴軒無事日清談。隼旗畫戟明千里。紙帳繩牀自一庵。金奏屢陳容客和。玉山不動看賓酣。我來邂逅逢新政。忘却漂流身在南。其工拙非所敢知。真滄海之遺珠也。寬文己酉之秋。義公張宴環景樓。泛舟淺草川。野傳唱聯句。文恭續之曰。山歟螺黛遠。高閣徹晴空。山指筑波山。閣指大悲閣。覺時童行侍側。平生所見。止此二句。文恭暇日嘗謂覺曰。我在中國。所經歷諸名勝之地。試與汝言之。三關。蘆溝橋。大石橋。滹沱河。荆軻易水。燕昭王黃金臺。楊家府。在北直隸順天府。蘭亭。在紹興府。洞庭湖。在岳州。岳陽樓。臨湖水。防風池。在會稽府會稽之側。嚴子陵釣臺。在嚴州。戴安道剡溪。在嵊縣。雁宕。在台溫二州之界。冬夏有雁。金陵。蔣山。石頭城。烏衣巷。采石。燕子磯。在南直隸應天府。臨春。結綺。望春三閣。景陽樓。今為荒墟。孟東野射鴨堂。在蕪湖。烏江在蕪湖上流。金山。北固山。在鎮江府。甘露寺。劉玄德試劍石。在北固山。姑蘇臺。虎丘。寒山寺。在蘇州。滕王閣。鐵柱宮。

石鍾山 鄱陽湖 在江西 表忠觀 在杭州 林和靖放鶴亭 蘇公堤 在杭之西湖 至今猶盛 桃源 君山 東坡赤壁 在湖廣 周瑜赤壁 則非此處 祭風臺今亡 五溪在湖廣江西之界辰沅之地 漢伏波將軍駐兵處 黃鶴樓在武昌 召伯埭在揚州 邯鄲在彰德府 孤竹在大名府 登封漢封嵩山之地 虎牢 成阜 鴻溝 敖倉 彭城 許昌 官渡 鄴 轅轅 少林 太室 在河南 金谷園 銅雀臺 今為荒草 測景 音影臺只存量天尺 秦時大夫松 至今猶存 大可十圍 白松亦在河南 大松樹三株 遠望之 宛如白龍 松有香 近而摩之者 到家手猶香 凡此皆可追憶者 其餘不知幾許 今忘之矣 覺退而筆之 雖不足考據 而當時所親聞者 若參以一統志 容有差誤 今想其事 亦逾五十年矣 可勝一慨 因附于此

湖亭涉筆卷之四終

霞亭涉筆

予讀書之次 異聞嘉話 苟有會於心 隨即錄之 間或附一二管見 十四五年間所得 積為數千百卷 龐雜無次 真故紙堆耳 頃消暑之暇 省覽一過 因抄若干條其中 哀為冊子 是豈足傳好事 吾以自玩爾

文化庚午夏日

天放生北條讓題

門人弟子之辨 在古未之聞也 唯漢世之人 或似作其別 此特當時之習俗耳 歐陽公曰 漢世公卿多自教授 聚徒常數百人 其親授業者 為弟子 轉相傳授者為門生 文集後漢孔宙碑陰題名跋○朱笈宰文通云 隸釋謂 漢儒授徒 親授業者 則曰弟子 次相傳授 則曰門生 未冠則曰門童 總而稱之亦曰門生 舊所治官府 其掾屬則曰故吏 占籍者曰故民 非吏非民 則曰處士 素非所蒞 則曰義民 此皆讀漢碑者所當知 近世諸家奉公之言為程式 耶仁寶七修類稿云 親授業者為弟子 弟子復傳於人 為門生 故史記曰 七十二弟子傳 陳繼儒群碎錄 亦有此說 清朱彝尊據其說為之辨曰 論語為孔子而作 所云門人 皆受業於弟子也 顏淵死 門人厚葬之 此顏子之弟子也 子出 門人問此曾子之弟子也 子疾病 子路使門人為臣 又門人不敬子路 此子路之弟子也 子夏門人問交於

子張。此子夏之弟子也。孟子。門人治任將歸。入揖於子貢。此子貢之弟子也。孔子曰。自吾得回。門人日親。回無繇之子。本門人也。而列為弟子。此門人之所以日親也。孔子既卒。門人疑所以服禮弟子之於師。心喪三年。無可疑也。疑所以服。門人之服也。曝書集。按門人疑所以服。子貢論之曰。昔者夫子之喪。顏淵。若喪子而無服。喪子路亦然。請喪夫子。若喪父而無服。顏淵子路者。夫子之弟子也。夫子喪弟子若喪子。則弟子亦喪夫子若喪父。此直引弟子之事。以決其疑案。可見門人弟子本無別也。然則心喪三年。禮有明訓。門人何以致疑焉。曰。心喪三年。天下之達禮。無可疑。夫七十子之於孔子。仰其德如君如父。恩義兼至。非尋常師弟子之比。諸子欲遵禮文。猶且不能慊於心。疑之以俟衆弟子之公議。其志誠篤矣。雖然。先王制禮。過者俯而就之。不及者跛而及之。以得其中為美。是以子貢考諸國家之常典。徵諸夫子之素行。因裁之曰。請喪夫子。若喪父而無服。其餘悉同父焉之謂也。人倫之所重。莫大於父子焉。喪師之無服。以別父也。記曰。家有塾。塾在左右之門側。子弟隸業。皆居于塾。故稱曰塾生。又曰門生。其義一也。此乃弟子之泛稱也。其稱弟子者。指其職言。所謂執禮於師。猶弟事兄。子事父者也。朱氏之所徵。如曰。子夏之門人問交。亡論子夏之弟子。其餘則皆夫子之弟子也。以一時漢世之習俗。欲例及先周。謬誤甚明。學者勿惑其辨而可矣。

朱晦菴陸象山。俱是一時道學巨魁。而其見之甚不相合。抗衡對壘。終不相降。各信己所信。疑己

所疑。要之此心之公不可掩也。豈後儒輩阿其所好。曲從為辭者之比哉。象山年譜云。淳熙八年先生四十三歲。春二月訪朱元晦于南康。時元晦為南康守。乃請先生登白鹿洞書院講席。先生講君子喻於義。小人喻於利一章。畢乃離席言曰。熹當與諸生共守。以無忘陸先生之訓。再云。熹在此不嘗說到這裏。負愧何言。乃復請先生書其說。先生書講義。尋以講義刻于石。先生云。講義述於當時。發明精神不盡。當時說得來痛快。至有流涕者。元晦深感動。天氣微冷。而汗出揮扇。朱子後來向弟子廷秀道夫等。再稱說其事。見語類。又象山語錄曰。先生一夕步月。喟然而嘆。包敏道侍。問曰。先生何歎。曰。朱元晦泰山喬岳。可惜不見道。枉費精神。遂自擔閣。奈何。包曰。勢既如此。莫若各自著書。以待天下後世之自擇。忽正色勵聲曰。敏道恁道沒長進。乃作這般見解。且道天地間有箇朱元晦陸子靜。便纔添得些子無了後。便減得些子。皆足以見前脩信道之篤。見道之大。其襟度之高可想矣。

程蘇洛蜀之黨。非程蘇之過也。學程蘇者之罪也。以聖人之大道。為小人之私結。可嘆可悲。而二先生亦未免其責也。近世袁隨園失題詩曰。丁少微陳希夷。兩箇神仙有是非。蘇子瞻程伊川。兩賢胸中各不然。可惜不見尼山老。狂狷中行盡和好。可謂佳議矣。

郝京山著作鬱然。明儒中之巨擘也。如其學。陸子靜頓悟之流亞也。清朝人文之盛。遠踰前代。其學大抵宗宋氏。間有從違。其獨見立家者。毛奇齡。朱彝尊。顧炎武。閻百詩之徒也。毛博聞強識。古今

無比。然其談經義，務事辨駁，牽強撫裂不少。讀其書者，慎不可眩惑。彝尊以下，聞識姑置之。其見頗純正，大非毛氏之比也。

徂來先生英邁特立，而有好奇之癖。其學術文章，急于立家，而誤於道不尠。世信之者，過而奉之。不信者過而斥之。不能無偏倚。近日學士視如寇讐，一句一言，辨駁不遺餘力。不無燥垢索瘢之弊。本邦中世以還，文學衰頹，日就固陋。徂來出而一洗發揚之。後進學者，受其賜不淺。要一代之偉人也。頃閱僧某詩曰：六經古雅好文章，堯服跖心亦不妨。何意驪山千載後，復逢煽燼小秦皇。噫亦甚。予嘗有詩曰：文場挑戰出謀奇，四海望風歸一麾。君沒洵洵群議起，如何皮相認真騏。

芳洲先生曰：神學家以為齊國之書來，而純朴之風散。此乃莊周所謂絕聖棄智之說。可謂大有所見矣。鯁生後二，動在細處生論，故不知斯言之為大也。然矯枉過直，未免者弊。要之齊國典籍不可廢也。夫天下之事有天焉，而非人力。天者自然也。倘違其自然而強為之，有所益于此，則必有所損於彼。稿窓茶話近世賀茂真淵，本居宣長之徒。於國學有復古之功。大崇奉我邦，神聖之教，而深斥異教之言。其志篤矣。可惜持論執拗，往往致疑於古聖人。湯武周公擅議之，無所忌憚。子曰：畏聖人之言，言且畏之，況事乎。彼則敢議，多見其不知量也。不獨彼輩為然，儒者亦有其人。喋喋聚訟，何喙之三尺，實名教之罪人也。

庶人之學，熟讀孝經小學而足矣。其有才性者，不在此限也。

蘇子瞻曰：士以氣為主。

文集李太白贊

黃魯直曰：學以識為主。

山谷題跋與韓瓊秀才書

予生陳慢，一切之物寡所嗜好。

唯有酒癖，習以成性。

欲止未能。

然年齒漸長，節而飲之，亦似

不甚害。要之在人不在酒也。

每誦汪遵詩：九醞松醪一曲歌。

本圖閑放養天和。

後人不識前賢意，破國亡家事甚多。深以為知言。

蜀志：諸葛孔明戒子曰：夫酒之設，合禮致情，適體歸性，禮終而退。此和之至。主意未殫，賓

有餘豪，可以至醉。無致於亂。此言可謂唯酒無量不及亂好註脚。

財色之二，人尤不可不慎。無老少賢不肖，諸禍罪之起，職是之由。常須存戒懼心。戒懼之法無他，宜須逆想後來之羞惡矣。

孟子曰：養心者，莫善於寡欲。莊子云：其嗜慾深者，天機淺。其意暗相符。

富人非有見焉，欲無與交。富人多愚，性慣驕逸，好狎侮人。富而好禮，古難其人。况後世乎。

呂與叔曰：貧與富交，強者必恃，弱者必求。斯言甚有理矣。

小兒戲謔，手抓腋下，令他不堪。曰：古曾波由我羅須。稗官雜書未覩此事。叩諸唐山之人，云名

弄聳。洪園先生話。

高田玄鶴翁話：寬政中越後四鄉屋海濱，漂着一小船，船舷刻端川李奉才耳舡七字。予按耳字借用。

猶鼎耳聳耳鞋耳之耳。乃側附之義耳。缸此謂天武麻之類也。玉堂閒話云。廣東新會縣蜆岡以南。瀕海人有蔬圃。乃淺水中積沙而成者。或為大風飄去。若浮筏然。我邦北越浮田甚類此。積土乎湫池上。則衆草蔓生。纏繞為一片地面。鋤為田。收穫無異。大雨水溢。亦或漾出。

農圃六書云。凡魚嘯子。必沿水痕。雖乾涸十年。遇水相生。其長甚易。嘯子時候以五月。銀魚膾殘魚嘯子於水。水解三日而即生也。予曩在越。親見鮭魚嘯子。枯堅如琥珀粒。土人云。此得水猶生。未知他魚果然否。

邦俗古來呼芻人為案山子。玄光之博洽。其記玄賓僧都事。謂此方之所名。近六如師詩話。遍舉草人草防禦等名。於案山子亦欠考據。曩有人檢出見示。出五燈會元中浩州雲居道膺禪師章。師上堂曰。孤迥迥峭巍巍。僧出問曰。某甲不會。師曰。面前案山子也不會。

阮孚蠟屐。補其缺齒也。蠟易粘看物。字借用。猶莊子杯膠之類。王愷以飴澳釜。聞唐山之人。作卓子筵。以飴塗釜底。煮鯉魚甚美。蓋澳釜之遺意。文選官者傳論。寺人掌女宮之戒。寺音侍。於義始叶。古文多省。丹鉛總錄

風俗通曰。城門失火。禍及池魚。舊說池仲魚。人姓名也。居宋城門。城門失火。延及其家。燒魚燒死。非也。此本出淮南子語。曰。楚王亡其猿而林木為之殘。宋君亡其珠而池魚為之殫。池魚

對林木。非姓名明矣。又東魏杜弼檄曰。但恐楚國亡猿。禍及林木。城門失火。殃及池中魚。蓋自淮南風俗來。

二老堂詩話云。白樂天為忠州刺史。有東坡種樹二詩。又有步東坡詩云。朝上東坡步。夕上東坡步。東坡何所愛。愛此新成樹。本朝蘇文忠公不輕許可。獨敬愛樂天。屢形詩篇。蓋其文章皆主辭達。忠厚好施。剛直盡言。與人有情。於物無著。大略相似。謫居黃州。始號東坡。其原必起於樂天忠州之作也。又容齋隨筆云。東坡慕樂天。因以為號。按南賓志。東坡西坡。皆白文公故跡。樊漢柄詩曰。忠黃江上兩東坡。二老遺跡凜不磨。人得矜誇知地勝。天教流落為才多。可證。

宋史。黃山谷遊灣皖山谷寺石牛洞。樂其勝。因自號山谷道人云。堅瓠八集云。謝枋得字君直。因蘇東坡有溪上青山三百疊之句。故號疊山。陸深春風堂隨筆云。趙文敏公號松雪。乃是一琴名。

猗覺寮雜記云。退之毛穎傳。吾子孫神明之後四字。子產獻陳捷於晉語也。退之為文。用古人語如已出。所以為奇。予謂退之祭十二郎文。彼蒼者天。曷其有極。自今已往。吾其無意於人世矣。其用詩語。亦如已出。退之平生務去陳言。而造語多類此。其妙在沒痕迹。若夫古文辭之弊。割截補綴。只艱深其文耳。雖工復何為。歸去來辭云。實迷塗之不遠。楚辭曰。迴朕車而復路。及迷塗之未遠。陶語蓋本此。故用實字。

東坡詩 天外黑風吹海立 浙東飛雨過江來 方萬里云 老杜朝獻大清宮賦 九天之雲下垂 四海之水皆立 本是奇語 摘海立二字用之 自坡始 予謂 方評固佳 然未盡 東坡此聯 分明胚胎杜風吹滄江樹 雨洗石壁來 而換用樹立字也 燕間錄云 樹樹立之樹 七修類藁云 王勃序文 世以為落霞與孤鶩齊飛 秋水共長天一色 古今奇句 昨讀困學紀聞 乃知變庚信馬射賦 苑花與芝蓋齊飛 楊柳共春旗一色之句

唐人尙文選 李邕李善俱註之 清魯超杜詩開序云 注書之最善者 無如李善父子之注文選 然善傳於事類 而邕精於意義 合之則雙美 離之則各有偏 五臣亦註之

姚莫西溪叢話云 李善文選 引證精博 五臣無不取也 丘光庭兼明書 王敬美藝圃雜錄 皆斥五臣為不足取也 杜子美有熟讀文選理之語 可以見也 其弊至士子專意此 奉為金科玉條 李德裕曰 吾家不畜文選 蓋激之也 宋人復尙文選 猶唐人 老學菴筆記曰 文選爛秀才半 又曰 文選熟秀才綠 可以見也 蘇子瞻罵文選云 小兒強作解事 馮時可

兩航雜錄云 昭明文選 枕席沈醉其間 而六經如甲乙簿矣 易奇而法 詩正而葩 韓子獨注心焉 所解 其文高一代 蓋矯之也 然文選竟不可廢 不特為文學之祖 亦可以為詩學之宗 學者不可不熟讀

元史楊載傳曰 詩當取材於漢魏 而音節則以唐為宗 按唐詩品彙評 亦載楊言云 取材於選 效法於唐

王阮亭帶經堂詩話云 唐詩主情 故多蘊藉 宋詩主氣 故多徑露 此其所以不及

空海文教秘府論云 凡作詩之人 皆自抄古今詩句精妙之處 為隨身卷子 以防苦思 作文興若不來

即須看隨身卷子以發興也

歐陽公曰 觀人題壁 而可知其文章 夢溪筆談

記事文工拙最易見 大抵欲簡短而實核 比列左國檀弓史漢等書 可以窺古文詳略各有典刑 而後通觀後世之文 施諸今日之用 其庶幾乎 稗官傳奇文 雖不可法 摸寫瑣末事情 時極妙 亦足以助筆端之步趨 旁讀不妨 傳奇小說 事多猥雜 易感人 不可不擇也 適得其事甚類 而書法大不相類之二例 以志此 初學輩就此類考其工拙 思過半矣 夢溪筆談載 往歲士人多尙對偶為文 穆脩張景輩始為平文 當時謂之古文 穆張嘗同造朝 待旦於東華門外 方論文 適見有奔馬踐死一犬 二人各記其事 以較工拙 穆張 馬逸 有黃犬 遇蹄而斃 張曰 一犬死奔馬之下 見聞紀訓載 歐陽文忠公在翰林曰 嘗與同院出遊 有奔馬斃犬於前 文忠顧曰 君試言其事 同院曰 有犬臥於通衢 逸馬蹄而殺之 文忠曰 使子修史 萬卷未已也 內翰以為何如 文忠曰 逸馬殺犬於道

子曰 飯蔬食飲水 曲肱枕之 樂亦在其中 富貴於我如浮雲 此樂天知命 固聖人之能事 而其言之高韻雅澹 一誦之 令人躁競之念頓息 稱以風流 雖言甚不倫 古今言風流者 又何以加焉

孟子謂子產 惠而不知政 是求備於賢者也 不可以疑子產之賢 夫子不云乎 有君子之道四焉

九

四者之外，尚多美事。舉其大者稱之耳。非大賢而何歟。三代以後之人物。吾以漢孔文學。宋歐陽永叔為傑出。文學有曾皙之風。永叔有子產之風。孔北海曰。坐上客常滿。樽中酒不多。歐陽公醉翁亭記曰。觥籌交錯。起坐而誼譁者。衆賓歡也。蒼顏白髮。頹乎其中間者。太守醉也。二語可味。實有少者懷之之氣象焉。余嘗謂。歐陽公學問文章。政事德行。宋朝第一等之人也。蘇子瞻題公集曰。歐陽子之所推韓愈孟子。以達於孔氏。著禮樂仁義之實。以合於天道。其言簡而明。信而通。引物連類。折之至理。以服人心。故天下翕然師尊之。自歐陽子出。天下爭自濯磨。以通經學。古為高。以救時行道為賢。以犯顏納諫為忠。至嘉祐末。號稱多士。歐陽子之功為多。宋史曰。唐之文涉五季而弊。至歐陽修振起之。挽百川之頹波。息千古之邪說。使斯文之正氣。可以羽翼大道。扶持人心。先輩景仰如此至矣。世徒以文人目之。不能知其人也。唯若於公之論繫辭周官。及論語三年無改之說。五代史以宋全忠例正統。此不慊人意者。余亦所不敢服也。孝經庶人章不引詩。古人多致疑焉。馬永卿懶真子載。溫公在洛。為人講孝經。有父老前問曰。自天子章以下皆引詩。庶人章獨無何也。溫公沈思良久曰。某平日見不及此。容思可以奉答。父老笑而去。謂人曰。今日難倒司馬端明。王阮亭池北偶談云。昨見東郡耿君隱之道見云。曾見古本。庶人章末引詩云。晝爾于茅。宵爾索綯。予謂。故自天子以下至於庶人。孝亡終始。而思不及者。

未之有也。此即總括語。不引詩固不足異。古文孝經以結語別為孝平一章。大失義理。故字無著落。子曰二字。亦後人之所加也。如古本庶人章。尤屬妄誕。古孝經通一篇。無分章。歸有光孝經叙錄序云。獨其章名乃梁皇甫侃之所撰。非漢時之所傳。王禕孝經集說序云。玄宗自為之注。用十八章為正。先是自天子至庶人章。唯皇侃標其目冠於章首。至是始用諸儒議。章各有名。如開宗明誼等類。又按匡衡上疏云。大雅無念爾祖。聿脩其德。孔子著之孝經首章。由此觀之。漢以前所傳皆引詩。其不引詩。唯庶人章而已。朱子刊誤以為後人附會。悉刪去之何哉。大學淇澳章。蓋總釋明德新民至善也。如切如磋。明明德也。即致知格物之義也。故曰道學也。如琢如磨。止至善也。即修身之業也。故曰身修也。恂慤者。誠意正心之狀也。威儀者。修身之狀也。斐君子者。修身之君子也。於戲前王不忘。因前節不可誼之意。申釋所以不誼之義也。先儒因有至善字為二章。以為至善之傳。恐不是。自邦畿千里惟民所止。至與國人交止於信。乃釋止至善之義也。此子獨得之見。而未敢必也。曩會友人高木厚之。反復辨論。厚之深以為然。朱文公於經。可謂勤矣。前儒曰。朱子集註於一字未安一語未順。覃思精慮。更易不置。置二句日而未已。用心如此。學者願以易心讀之。安能得聖賢之意哉。又曰。集注遍閱諸家說。雖一句一字。皆抄掇旋加磨剗。翦繁趨約。不啻數百遍。王應麟。朱子語略云。先生捐館前一月。以書與廖子明曰。大學又修得一番簡易平實。次第可以絕筆。朱子行狀及年譜皆云。文公易簣三日前。改

大學誠意章。嚮道之志。老病益堅。良工苦心。千載如見。誰其不欽慕哉。而文公自言。論孟集註後來改定處多。遂與或問不甚相應。又無功夫修得。或問故不曾傳出。今莫若且就正經上玩味。有未通處。參考集註。更自思索為佳。不可恃此未定之書。便以為是也。文集答張元德問又曰。熹於論孟大學中庸。一生用功。粗有成說。然近日讀之。一二十大節目處。猶有謬誤。不住修削。有時隨手又覺病生。以此觀之。此豈易事。若只恃一時聰明才氣。畧看一過。便謂事了。豈不輕脫自誤之甚耶。呂伯恭嘗云。道理無窮。學者先要不得有自足心。此至論也。幸試思之。文集答胡季隨書又曰。平日解經。最為守章句者。然亦多推衍文義。自做一片文字。非唯屋下架屋。說得意味淡薄。且是使人看者。將註與經。作兩項工夫做了。下稍看得支離。至於本旨不相照。以此方知漢侯廣說經者。不過只說訓詁。使人以此訓詁玩索經文。訓詁經文。不相離異。只做一道了。直是意味深長。文集答張敬夫書由此觀之。文公晚年猶覺其不盡乎此耶。將姑為是托退耶。其實何易測也。

歐陽公曰。經非一世之書也。其傳之謬。非一日之失也。其所以刊正補緝。亦非一人之能也。使學者各極其所見。而明者擇焉。十取其一二。百取其十。雖未能復六經於無失。而卓如日月之明。然聚衆人之善。以補緝之。庶幾不至於大謬。可以俟聖人之復生也。然則學者之於經。其可已哉。文集答宋成書善哉言。此可以為治經之法。余亦曰。學者治經之務。先須從事訓詁而通大意。大意既通。則博推遠尋。聚類徵例。誠虛吾襟。夷考前人之說。更就其長。極要穩當。如此數十百回。然後

悉除去諸家註解。直就本文求之。參伍錯綜。彼此相照。以索正旨之所在。則其庶幾於有得之矣。論語巧言令色鮮矣仁。此夫子歎世道陵遲。風俗偷薄。巧言令色相尚。少仁人也。子嘗曰。巧言令色足恭。左丘明耻之。丘亦耻之。與此章互相發。言世人皆巧令足恭。不知其可耻。唯左丘明與我耻之也。鮮猶希也。鮮矣多就世言之辭。如好犯上者鮮矣。惡而知其美者天下鮮矣。民鮮能久矣。是也。如此看。則極為穩貼。諸儒解不免鶻突。皇侃本仁上有有字。文理雖明白。不如無有字之含蓄也。

君子不重則不威。學則不固。此一章總就交際言。躬不自重。輕易交人。是為不威嚴。君子欲威嚴而威嚴或嫌於不親人。獨學固陋。學無由成焉。因曰。如於其學。則當廣交衆人而博聞見。曾子所謂以文會友。以友輔仁。學記所謂敬業樂群。是也。不固者。指示學問之方也。然其所交宜親近忠信之人。而無友不如己者。人不能無過。過而不改。則人亦不忠告其過。身陷於不義而終不悟。故曰。勿憚改。主尾相承。反覆丁寧。喻之至矣。先儒之說支離。俱不得章旨。或人云。曾子曰。以能問不能。以多問寡。子張云。我之大賢歟。於人何所不容。我之不賢。人將拒我。此與無友不如己者之言不相合何也。余曰。言各有要。二三之言。廣求進益之謂也。所謂察邇言及芻蕘之類也。如此章語學者之用心也。非拒絕不如己者。但平日親近者。非是人也。好學之稱。孔門尤重之。夫子謙謙之至。唯好學一事。自任弗疑。論語所記。特於顏子與文子。而

其餘七十子未嘗許之。今則亡。未見好學者之言。可以證也。文字事不據左氏說別具後世稱人。動輒以好學。雖大儒君子。似不知其過。甚至苟讀書屬文者。一切稱好學。大乖聖人之意。好學豈容易哉。温故而知新。可以為師矣。子夏曰。日知其所亡。月無忘其所能。可謂好學也已矣。可參看。三年學而不至於穀。不易得也。穀善也。安國註為優。然以不易得。為必無之謂非。學記云。三年比考。可試小成。三年學而不至於善。其業恐難成。欲學及時也。性者人生所稟天之質。人有斯形。則善善惡惡之心。生而具足。此即天之命我所然。中庸曰。天命之謂性是也。性雖人人異。監諸古今。通諸衆庶。則其情靡有弗善。善惡惡者。乃所謂善也。書曰。惟皇上帝。降衷于下民。若有恒性。詩曰。天生烝民。有物有則。民之秉彝。好斯懿德。恒性云。秉彝云。孟子所謂性善是也。性善之說。由來遠矣。然而孔子循循誘人。其雅言詩書執禮。其教文行忠信。性與天道。未嘗言也。非絕不言。非教之所先也。子貢曰。夫子之文章。可得而聞。夫子之言性與天道。不可得而聞。可以見也。及夫子之歿。微言絕。大義乖。諸子百家紛然興。各道其道。教其教。是非爭議終不已。道之不明。職是之由。子思有憂於此。乃作為中庸之書。首揭性道教三言。蓋所以明聖人之道。承天率性之道。而非如百家各道其道。教其教也。其旨微矣。降迨戰國。聖人之道愈衰。百家之言益盛。天下之人。皆徇功利之私。而不復知有仁義之美。其心卑陋。謂堯舜之聖。何敢可得企。聖人之道。何敢可得行。其視聖人。猶與我異類。夫如斯。

則無言之可入。無教之可施。孟子告人以性善者。所以使其知吾性之足為仁義。而始與聖人無異也。故曰。聖人與我同類者。又曰。人皆可以為堯舜。又曰。服堯之服。誦堯之言。行堯之行。是堯而已矣。引論啓迪。至矣盡矣。其教世道人心之弊。豈不大乎。告子在當時。鑿鑿爭辨。孟子辭而闢之。其說卒屈。若夫荀子性惡之論。欲反子思孟子而立一家言。矯激所然。誣人亦甚矣。其他若楊子說善惡混。韓子說上中下三品。皆捨大取小。逐末忘本。要未及通知思孟之意也。至濂洛諸賢輩出。大尊崇孟子。一以其言為準。漢唐以降。諸儒之陋。為之一洗。然其以談性命為學問之本務。已異乎夫子之教。而其說性。本然云。氣質云。復性復初云。浸淫於老佛不勘。遂曰。孔子之論性。氣質之性。孟子之論性。本然之性。陰若不足孔子言者。余於是不能無疑其學焉。退而求諸夫子之言。則平易正直。其義彰彰明矣。曰有教無類。言教以道之。則人皆可進善也。曰性相近也。習相遠也。所謂相近也者。衆人之性。彼與此同善而相近也。所謂相遠也者。習於善則為君子。習於不善則為小人。君子而習不已。則其終至堯舜極矣。小人而習不已。則其終至桀紂極矣。善不善之異途背馳。君子小人之所分也。其始也相近。其終也遠矣。蓋夫子言性。非教之所先也。特標揭之。示習之不可不慎也。子思之言性。釋道教之源。而拒百家之言也。孟子之言性。喻自暴自棄之人。而道諸仁義也。而孔子之言。簡而盡矣。子思孟子可謂能發揮孔子之旨無餘蘊矣。

鳴長明無名抄所載登蓮法師事。甚可喜。一日陰雨。客集二亭。話次及麻須保芒事。一老人曰。世所傳有麻須保。麻曾保。麻須宇三種芒。人不知其別。聞住渡邊僧某解之。渡邊攝津地名時登蓮法師在側。發語希。忽向主人曰。請借囊笠。詣彼質之。僉曰。胡爾急遽。盍待霽行。登蓮掉頭曰。人命危淺。朝不圖夕。何較霽雨。倘彼我一死。此事誰能傳之。拂衣而去。凡學道之人。用心如登蓮。則業之不成。多不足病焉。友人西村維祺贈予詩曰。人才相若孰名賢。機會應須在物先。解道遲回不及事。過人警策有登蓮。

昔吾家宗瑞入道。嘗召一講師讀七書。首聽三略夫主將之法務攬英雄之心句。斷然曰。吾已領略。其他不欲聞之。英豪之氣象。千載如生。而斯語也。實名言也。為將帥者。不可不服膺。朱文公曰。陶淵明。詩人皆說是平淡。看他自豪放得來。露出其本相者。是詠荆軻一篇。平淡底人。如何說這樣言語出來。語類此文公具眼之高。人不可企及處。其不能為五斗米折腰鄉里小兒。即日解綬去。雖云見機而作。不亦豪氣發出來者歟。方正學云。貧國有四。而荒凶不與焉。聚斂之臣貴。則國貧。勳戚任事。則國貧。上好征伐。則國貧。賄賂行於下。則國貧。富國有四。而理財不與焉。政平刑簡。民樂地闢。上下相親。昭儉尚德。此富國之本。遜志齋集陸梭之云。貴莫貴於為聖賢。富莫富於蓄道德。貧莫貧於未聞道。賤莫賤於不知耻。方蛟峯云。士能弘道曰達。士不安分曰窮。得志一時曰天。流芳百世曰壽。七修類稿

申涵光曰。真理學從五倫做起。大文章自六經分來。國朝詩人小傳皆格言也。可謂簡而盡矣。自古高明之士。往往有不羈卓犖。不拘世檢。或落魄無聊。姑為汗賤之流而不辭者。雖非中行。亦不可尋常繩尺度之也。其至翻然改過。則果敢剛毅。挽回宿習而不撓。如戴淵李邕。俱為刼海船賊。一旦改行。名高千古。徐庶少時事任俠。幾死人手。折節學問。至與武侯並稱。裴休韓熙載為歌姬院乞兒。後官俱至丞相。功業顯著。胡寅少時桀黠難制。安國閉之空閣。閣有段木。寅盡刻為人形。安國乃置書數十卷其中。年餘悉成誦。石曼卿為鬻私鹽惡少年。後以詩文名一世。人之不可輕視如此。其不可自棄亦如此。而世多鄉愿之徒。沾沾自喜。以為足儉一時譽。適值非常之人。視猶夷狄。其識趣之卑陋可憐。其實斗筲之材。鞭策不得前也。世間罕獨無聊最可憐。放逸無慚最可惡者。莫如乞丐。然而其中亦有一種好人。一概賤之。恐失其人。其人本非乞丐之流。身至窮厄失產。心有守不肯為機械闖他財。又不甘為奴隸俳優。不得不出於行乞之途。夫不受嗟來之食人。不止古見之。後世猶有之。以近世言之。如鳩巢先生駿臺雜話載。車善七管下乞人八兵衛。及加賀金澤播間乞兒是也。如鳩巢小說所載赤目新兵衛。真所謂大丈夫也。伏水桃山丐者。及京師牢谷乞婆龜事。收載畸人傳。膾炙人口。予欲編乞丐傳一書。茲不贅。頃涉獵諸書之次。採其尤可賞異者數件錄之。是可以為暖衣飽食恬然無媿者之針砭矣。湧幢小品載。詩丐者樂安人。李姓名興。生年六十七。患風癱。蘆條口箱。眼啣手攀。欲食則仆臥於地。

乃能下咽。欲言則畫作字。始達其意。然頗能詩。董時望未第時遇丐。僉令獻董詩。丐首肯須臾成句云。雕鶚直翔霄漢邊。龍泉高射斗牛光。清時早展為霖手。莫遣蒼生望八荒。成化甲辰。時望成進士。使養丐於官。辭以老母在。時望厚禮而遣之。又弘光末。南京失守。一丐題詩武定橋上。曰。三百年來養士朝。如何文武盡皆逃。綱常留在卑田院。乞丐羞存命一條。投秦淮河而死。都公談纂載。正統間有丐者。奉其父母。居蘇之南倉橋警館中。時父母俱以疾廢。丐者辰出而西歸。市中所得魚肉。必擇美者。躬自炊爨。暮則置酒跪拜於前。喧歌以進。必父母歡醉而後已。市人皆賢丐者。而樂施之。以故甘旨不缺。倭變錄載。丐者張二莫知所自出。善伏水中。能月餘不食。躡捷善走死地。嘉靖甲寅倭亂應募。方太守令調賊。數挾利器泗水。遇賊舟擊其底沈之。又時入倭巢偵其情形。斬倭首以獻太守。頒銀牌犒之不受。犒之以酒則受。賊平論功。應襲百戶郡縣。加以章服却之。惟願乞食。夜則臥嶽廟中。嬉嬉無愁色。竟莫解其誰何人也。隨園詩話載。金陵太平門外有乞丐。斃于道。官往相驗。懷中得詩一首。方伯閱公聞之。掩埋其棺。並建碑以表之。曰。通州詩丐之墓。其詩曰。賦性生來是野流。手持竹杖過通州。飯籃向曉迎殘月。歌板臨風唱晚秋。兩脚踏翻塵世路。一肩擔盡古今愁。而今不受嗟來食。村犬何須吠未休。若夫虞初新志所載吳六奇。亘代之偉人也。其不讀書識字。不至為丐也一言。可謂奇語矣。

孟子。知好色則慕少艾。趙注。艾幼好也。朱注。艾美好也。未明其義。程泰之考正編曰。徧思經

傳。無以艾為好之文。艾刈也。刪也。少則慕父母。知好色則慕少。滅于孺慕之時矣。此說甚鑿。艾嫩柔潔白之物。以形狀少年美貌耳。詩所謂手如柔荑。亦可類知。啜粥面深墨。謂其垢汚。喪不浴也。

人之易其言也。無責耳矣。朱子云。人所以輕易其言者。以其未遭失言之責故耳。說得不穩。故又疑其有為而言之。愚謂。易者平易之易。易言者。言不過行也。我不為過行之言。則人亦無來責言。欲言之願行也。

鄭樵六經輿論曰。仁宗朝。歐陽文忠公上言曰。自唐太宗詔名儒定九經正義。邇年來著為定論。不本正義者為異說。然所載既博。所擇不精。多引讖緯之說。以相雜亂。異乎正義之名。臣欲乞特賜詔諸臣儒學。悉取九經之疏。刪去讖緯之文。使經義純一無所駁雜。其用功至多。為益最大。使歐陽刪定正義。必有大可觀者。惜乎其不果行也。

開鶴山魏了翁九經要義。悉刪削緯書之說。憾余未見其書也。

十年前余在京師。一日從先師淇園先生遊東山。路由京極御門。過一縉紳家門。先生乃指示曰。此萬里小路氏也。又指示其西北隅之門曰。建武中中納言避世遁北山。微服從此出。其家哀慕其人。不忍出入其門。關鑰不肯啓。雖第邸變徙。舊制尚存。即此。余聞之。恍爾想像當時之艱。吁嗟不能已。爾後每過其側。未嘗不肅爾起敬矣。按太平記。藤房既知諫之不可行。特詣內廷拜帝。比退朝直赴北山。是或一傳也。公之立朝。儒雅風流。為一時之冠。眷寵優渥。常侍經筵。

奏對 嘗承旨進尚書 詞吐明暢 聞者竦聽 帝大悅云 四書集註初傳播我邦 垂水廣信崇信讀之 藤房從而受業 或云玄慧法師始講之 藤房玄慧同時與交 則其授受固當相通 元弘之變 從帝駕於南方 有殊勳焉 及帝之怠機務 盤遊無度 屢陳政事得失切諫 如龍馬對 勵詞直言 汲長孺殆不如也 精忠大節 無可間然矣 公掛冠之後 蹤跡杳渺 傳者不能無異說 師蠻高僧傳 高泉僧寶傳 皆云藤房夙歸佛乘 參大燈國師 既出家 嗣法關山 住妙心寺 名宗弼 號授翁 康曆二年三月二十八日寂 齡八十有五 聞雪江深妙心寺記 東陽朝授翁行狀 其說俱同 而異本太平記云 藤房遁世後號侃山子 漫遊四方 赴土州 時舟覆風濤而死 師蠻引此說 深斥其妄 吉野拾遺載 刑部卿新田義助從越前來 語予曰 吾在越前也 嘗見鷹巢山險可據 使畑六郎左衛門時義守 時義巡察地形 沿溪深入 忽見巖頭一葦蒼松葉 就而窺之 葉薦石案置法華八軸焉 須臾一老僧極清癯 手持花 步而來 掬于溪 入將緇經 時義前問所由 僧曰 問者何人 時義以實對 僧慨然曰 東國人耳 取經讀 時義無由言 反以告 其容宛似中納言藤房 翌日子伴一條少將 同往跡之 至則僧去矣 石上書歌曰 古古毛萬多字幾與乃比止能登比久禮婆 曾良由久久毛爾也杼茂登免天武 少將素識其手跡 因更尋覓 不知其去向 相與惆悵而返 語未畢 坐者皆歛泣下 因言藤房曾傳言於我 回憶其歲月 在鷹巢事後 其去越赴筑紫時乎 其後絕不得音耗 拾遺蓋當時朝臣與藤房善之人所錄 則其言可信 據去越赴筑紫之語 則異本太平記之說 亦

似可證 不可概斥也

吉野拾遺不著撰者名。余見一本。末有小題云。正平己戌之春。吉野草菴。雨夜滴花露。和墨書之。軫念亦甚。歎曰。隱士松翁。而不審爲何人也。

又聞江州三雲

鄉妙感寺村妙感寺 相傳爲藤房棲跡 有公遺像 圓顯衲衣 手持如意 遺詠一帖 即手書曰 與能宇佐乎與曾爾美久毛乃矩茂不加苦巨留津幾加解也萬受未乃止毛 村民井上島等姓氏 皆當時從亡者之後云 顧水雲生涯 來去自在 何地不可足 今以臆推之 三雲之棲 當在出北山之初 何以知之 以地相近且從者尙在也 鷹巢之事 在三雲之後 土佐之行 又在鷹巢之後 何以知之 以拾遺所言也 要之隱其名沒其跡 公之志也 不詳其確實何妨 公一朝辭君遠親 長逝不返 雖乖於名教 實出於不得已也 方外之徒 或云公少慕宗門向上事 常有出家之念 是害道之言 不知公者之論也 余嘗謂 南朝之臣 忠節之偉 可與補公伯仲者 公一人而已 景行仰止之餘 謹編錄異聞一二 以實巾箱 戊辰仲冬讓拜識

恨不得見原本。然片章隻辭。不可不尊重。因附此。

某氏所藏櫻雲記。卷端附藤房文詞一篇歌二首。云以藤房真跡摹之。不記誰家所藏。轉寫庸拙。大失其真。文詞數字殆不可證。

延文第三曆暮春天凶黨之遺風塵不和軍卒之雲霧彌寄爭於蝸牛之兩角待命於浮游之一夕可謂之□□佛教之滅期者歟而隣□雖□烟霞千行恨東嶺拜神尙哭期利物萬端之誓樂室之中冷然之餘述二二周之卑懷表一心之中腑而已遁倫隱士久毛爾布志阿良師爾於幾天氣布萬傳毛須女婆寸萬留留美爾乃伊保加奈加返留邊幾古師知乃也滿毛由幾布加師美彌古爾登萬禮波留乃加利賀彌

羅景倫鶴林玉露曰 余少年時 於鍾陵邂逅日本國一僧 名安覺 自言離其國已十年 欲盡記一部藏經乃歸 念誦甚苦 不舍晝夜 每有遺忘 則叩頭佛前 祈佛陰相 是時已記藏經一半矣 夷

狄之人。異教之徒。其立志堅苦不退轉。至於如此。朱文公言。今世學者讀書。尋行數墨。備禮六經語孟。不曾全記得三五枚。如此而望有成。亦已難矣。其視此僧。殆有愧色。偉哉覺。確乎不拔之操。勇猛奮迅。遂達其志。可謂強有力矣。當時名公舉歎艷稱。筆而傳之。豈無意哉。而覺之行事。本邦史籍無載。年代既移。世或至不能舉其名。如虎關鍊公。號稱叢林文學翹楚。然而其所著元亨釋書。不立覺傳。踈脫甚。又榮西傳中。一言不及覺。則實似不知有其人。嘻何固陋之至此。余因玉露所載。欲知其詳。遍搜索諸家筆記。所記率出於傳聞。未知其據。難遽適從。就中師蠻高僧傳。終始尤備。因取其傳。刪潤繁文。參注諸家所記。以便異日之考證。博聞之士。幸訂予之不逮。庶幾免使異人之跡。歸于茫昧云爾。

釋良祐號安覺。一名色定。

松下氏異稱日本傳云。經祐本名良祐。而色定作色條。謂其氏。筑前宗像記云。氏伯者。字良祐。名安覺。

建仁寺榮西禪師之弟也。

宗像記云。覺

吉備津宮大藤內之兄。又云。建仁寺開山榮西禪師之俗弟也。元亨釋書云。榮西備之中州吉備津宮人。其先賀陽氏。薩州刺史貞政孫。母田氏。

甫七歲歸釋氏。

學於良印學頭。強記明敏。

年未二十。博涉書史。嘗誦法華四功德之文。始發全藏書寫之志。葦華屹屹。造次不輟。功奔走四方。勸人施給紙墨。筑之吉源香椎箱崎。豐之彥山。淡之武島等地。足跡遍至。又航海入宋。經十寒暑。暗記一藏。歸止于田島香正寺。宗像記云。宗像氏國歸依安覺。為創建居焉。祈風志之速成。日詣孔大寺神。頸掛經案。雖行路間。莫不操筆。承元初年終業。凡經律論。其部六千三百三十八。其卷二千七百四十五。其帙二百五十八。日本傳云。覺嘗入宋。歸朝之後。止田島香正寺。汲彥之高根神泉。滴為硯水。

手寫一切經。承元元年十二月終其業。筆畫楷正。今猶存。宗像記云。覺以博多聖福寺所藏。榮西禪師自宋國齋來本寫之。經三十餘年而終功。東厓叢譚云。頃閱肆得一文字記覺事。甚詳。云筑前宗像祠座主。有色定房者。手寫大藏經。文治元年乙巳二月十九日起筆。至承元二年己巳二月十六日卒業。時年五十一。三月十六日供養。以葉上僧正榮西為導師。承元二年六十二而終。寫藏未終。入宋號安覺。右所記寬文年間。松浦侯侍暨西脇文安者傳之。華山藤公主管祠事。家藏社記。亦載覺事。述其著于玉露。蓋的是人也。羅氏生于宋末。適丁文治承元之間。片紙所遺。彼此符合。噫亦奇矣。蕉中禪師色定法師書經文跋曰。昔者色定法師手寫大藏經。都六千餘卷。此古今未曾有事也。于今納在筑前宗像神祠云。替代既久。闕損過半。間又散逸。長樂建禪師獲解節經八十五行於鼠咬蟬喰之餘。尊重珍敬。如藏摩尼。案文治三年丁未。法師年二十九。首業華嚴經。至安貞二年戊子。大藏既已成矣。中間四十二年。凡游歷所至。莫不操毫。或廡下或船底。皆有業之。而每卷記其地。題曰一切經一筆行人良祐。其跋華嚴經有曰。昔釋尊以三七日口之。今弟子以九十日筆之。說之與書雖異。開悟得脫是同。宗像記云。都合大乘經律論是流行者。摠六百三十八部。二千七百四十五卷。二百五十八帙。奉書外題斷金結緣。大宮司從五位下宗像朝臣氏國。承元元年十二月十六日書畢。執筆書寫比丘良祐。宗像氏國與祐雅好。捐財建庫于宗像神祠側藏之。覺手造自像。守護真典。於是鎮西地方香花輻輳。其年仲春覺告徒曰。望日吾逝矣。至期捨數珠。安坐念佛。又手當胸。辭衆

而寂。顏容如生。葬於高天陵。年七十三。臘若干夏矣。

以華嚴經跋。文治三年二十九。計享年七十三。則其示寂也。蓋寬喜三年辛卯二月十五日也。可三以補本傳之缺。

無量寺真榮阿闍梨。相傳生於大世古街酒谷氏家。既出家。結菴酒谷氏宅後而居焉。後徙越阪今地。享保七年九月七日遷化。齡八十有八。葬于北岡。有碑。子友北條子讓先。嘗事鳥羽內藤侯。及侯亡。提家隱子的屋。時此條省為北氏。或稱喜多。曾祖父道益弟。有了普禪師。傳以為榮公。而三箇所村棲雲菴。

了普所卜隱。有了普墓。碑陰書云。師寬保三年□月廿六日寂。二碑年月不合。則知真榮了普。的是兩人。而普公實為道益弟。則與榮公了不相涉。然而北條氏及土人至今傳。其先了普善書。當時稱無量寺。且其家元旦掛堂書曰。一天膏雨。千里仁風。即榮公真跡。及其墓域所建石經塔。亦皆為榮公書。又青峰山扁額有真榮款。其旁天女祠。了普所創。或疑了普學書於真榮。以其善書。世亦直稱無量寺也歟。而堂宇扁字。并當乞榮公書者矣。真榮初從菊潭顯證阿闍梨。受密教於舊御室。

夫密教者淺機所不契。世亦無刊本。不收大藏。如支那失其傳久矣。雖本邦秘密儀軌正本。獨藏本山。而兵燹之餘。簡編纔存。榮公深憫斯教之或泯。乃慨然自奮。手自書寫諸流儀軌。凡一千百九十本。一以藏御室。一以藏無量寺。藏無量寺者。西院流。保壽安井皆風。西院。皆真榮手書。其餘別人助寫間見。嗚呼功亦偉矣。力亦勤矣。法

運澆末。微榮公。斯教之廢。蓋亦尚矣。於是。賜以三杵。高野大師所請來。鑄作。今所賜是其一。及桂昌院殿所寄施大筆二枝。古硯一枚。任大僧都。在京師日。諸縉紳多賜問書簡。興源僧正寄書。皆極推獎道德。

晚立喜見菴棲息。地在無量寺園內。又酒谷氏宅後古井。當時稱榮公洗研水。今尚存焉。酒谷氏無後。今為他人所居。

寬文乙巳歲。榮公從龍熙近等。獻舊記於國史館。有紀行詩歌若干首。榮公學書於島澤先生。先生嘗受書法於徑山哲長老。以授榮公。榮公授某而傳絕。今茲己巳夏日。同子讓遊無量寺。泛覽書寫聖教。并得聞始末。子讓初欲自書榮公事。顧命子其撰。乃及詢訪諸方。榮普二公。其跡迷離。或是至人處處應現乃爾。則亦奚用疑為。西村維祺拜撰

歲華節物之推遷。人處其間。不能無感焉。况追憶數十年前數百里外。人有存亡。地非其地。幸而同鄉故舊時相過從。人事之不常。率多不似初。豈其無感乎。予生于勢之南鄙。長遊四方十餘年。其間所歷涉。今而顧之。人換地異。邈若隔世。歲華節物之感。亦不少。歲云莫矣。雨雪霏霏。爐坐無事。偶錄舊時係雪之事數條。彙以自慰。

南州冬溫。雪下多不至地。記二十年前。一冬多雪。予時髫髻。喜甚。乃與稚弟彥。就庭砌團雪。塑一箇布袋和尚。坐之盆內。愛翫竟日。旋復移置寢處。褥臥視之。其翌起問布袋和尚所在。已消釋盡矣。弟涕泣求再塑之不已。而雪不可得。母氏慰諭而止。後十餘年。彥罹疾沒。爾來每雪下。追憶當時之事。其聲音笑貌。垂髫之歲。綵衣之斑爛。宛然在耳目。併感及平生之志行。未嘗不愴然悲苗而不秀矣。彥字子彥。通稱內藏太郎。予次弟。寬政戊午遊學京師。師事友。人玫瑰源先生。翌年夏歸省在家。九月十九日沒。年十六歲。

寬政丁巳十二月。予出京赴鄉。會天陰風肅。比過山科村。微雪飄瞥。點綴翠竹碧松之梢。寒景蕭

散可愛。須臾愁雲四合，雪大如拳。積素滿徑，幾欲沒腰。顛仆踉蹌，走就鶴濱茶店。卸擔踞竈，以燎濕衣。少焉風止雲明，予推窓試觀，則天台比良三上諸峰，如白玉削成。園城寺之佛觀法塔，如瓊宇瑤臺湧出霄漢之間。湖面一帶，倒映搖蕩，宛若銀龍矯矯盤旋，令人心膽澄徹。坐作登仙之想，真奇觀也。至今一念其境，恍如身在其中。雖盛夏酷暑，煩悶之苦，堪頓忘矣。

予嘗居江戶數年，享和癸亥歲晚，河良佐池鄰哉來在府下。一日快雪初霽，予與二子乘輿出遊，遂列柳橋。命舟泛於墨水。兩岸人家，白玉合成。銀閣瑤樓出其上，左右映帶，一棹悠悠。舉酒賦詩，樂甚。鄰哉出所齎香爇爐，一縷烟出窓外，真如坐畫圖中舟。幽遠清澹之趣，迥與塵凡隔，實一時之勝事也。

文化乙丑十二月，予遊南總，寓湯江村法岸精舍十餘日。予與主僧二人而已。幽僻荒涼，除讀書外無一事。一日天寒雪飛，林岫皓然。予緩步遶庭園，俄而主僧溫濁酒一瓶，摘蔬爲羹，侑予。予喜而謝，細酌閑吟，頗得風致焉。蓋主僧憐予岑寂，倩村童遠賒得也。一枯禪山僧，能解人意如此，亦可嘉。

北越之地多雪，天下無比。雪一下，動輒三四尺至一二丈。大抵自十月之交至三四月，堆積不消。居人慣以爲常，絕無賞翫者。予之曾在彼也。以性畏寒甚，日擁爐襲裘，潛墊不出。是以無復其遊之可記。然有一不可忘者，去年仲春主茨曾根關根氏，一夕與主人飲于齋中，大杯滿酌，頽然

醉倒，不知主人起去。夜將半，渴甚，起視則篝燈熒熒，寂無人聲。啓戶窺庭，雪月爭輝，滿園之樹如爛銀。予不覺叫奇三聲，惟恨無同賞心者。因憶子猷山陰之興，誦招隱詩數回，取雪水煮茶，兀坐達旦。其襟抱之清，不言可知。戊辰晚冬記。

亡友木遠耻號小蓮，江戶人。芙蓉翁之子也。夙有才稱，十五善屬文，弱冠負笈西遊。予時在京師，相見定交，同筆硯殆半年。既而遠耻東歸，開業授徒，享和癸亥七月，病麻疹而沒。年纔二十五。府下識與不識，莫不悼惜者。親友輯其遺稿若干篇上木，予亦跋其後。小蓮殘香集是也。今摘集中予尤所愛詩數聯，可以見吉光之片毛矣。一年春已夏，憶昨事都非。紅藥顏何在，黃鶯語又稀。聞鶉歌曉枕，聽雨掩閑扉。真得吾廬好，何論輕與肥。初夏偶題桃李入新翠，清陰覆竹扉。鶯穿繁葉語，燕趁好風飛。處世須藏拙，觀生得息機。還恰晚來雨，灌圃幾蔬肥。同前風雨中雷雖不逝，曠原銜古鬼相依。桶間覽古命違玉帳縱橫歇，圍合雲騶遠近遮。粟津吊古極浦鳥飛悲帝子，孤村花落憶王孫。一谷懷古試尋百足別來狀，更見碧雲佳句新。客紀過藻洲上人房皆警策也。

廣岡子長諱元，號文臺，受學赤松滄洲翁。蚤歲繼先人之志，潛心長沙氏之書，日夜研究，手不釋卷。三十年一日矣。終大有所發揮，爲之註釋。家刻傷寒論是也。予年十八遊京師，初見先生，時時就質傷寒論之疑義。先生長予二十五歲，折輩行交予。遇我甚厚，每語人曰：夫人雖少，志氣不凡，必當有爲。居無幾，先生歸伊州。予亦雲遊四方數歲而歸鄉，爾來簡牘往來，比比不絕。先生數

促子命駕。子亦佇望已久矣。遂往訪。則云先生以本月朔病沒。今已六日。實文化七年三月也。夫知已相待之殷。以十三年睽離之久。期一見於二百里外。豈意其人既亡。臨之後事。即俾子此行纔在數日前。尙及其日未瞑也。嗚乎離合絲髮。逝者難追。蓋子平生薄福。過事失機。閱數十百。唯終身一大遺憾。亦未有甚於此。恨嘆彌日。歸來過山口聯玉家說其故。社友感愴以詩見吊。就中聯玉所贈詩并序。叙其始末至詳悉。字字實錄也。因錄于左。

廣岡文臺先生伊州人也。嘗在京洛。以醫爲業。鬱鬱不得志。久之歸鄉。吾友北條子讓寓都下之日。一見即爲知己。其後子讓浪遊四方。凡經八年南歸。先生數寄書慰問。率無虛月。今茲庚午三月。子讓往訪先生。視履交其門。以爲延客宴集。既通姓名。出迎者愁然云。先生罹疾奄逝。今已六日矣。子讓初聞爲妄爲夢。終乃悲而慟。蓋相別十有三年。訪之不遠二百里。欲一把臂吐其胸臆。而幽明一隔。無由再見。豈不悲乎。子讓此行。本期前月。余因事泥之。子讓亦遷延不發。卒致此死別。遺憾其謂之何。聞先生終身坎壈。數十年所讀。唯一部傷寒論。其所發明註成六卷。既梓行世。嗚乎如先生。安於貧篤於道。其用心積精之不可湮晦。所謂名傳後世者也。凡天下豎流飾貌銜技。悻悻然取快於一時之盛。或目先生爲愚爲狂。豈知百年而論定哉。子讓既竣後事。悵然歸來。遺子告故。子因子讓聞先生之名。傾慕已久。猶喪一良朋。雖無子讓之請。固將有所吊。况乎徵子辭之勤也。遂作長律一篇。以代菲薦。并叙始末云。

山城客到會君終。悲惋唯疑與夢同。幽火夜燃丹竈雨。落花春送素車風。張元伯墓今誰哭。阮步兵途昔獨窮。遺卷濟人新副墨。一生心血在斯中。

霞亭涉筆終

北條讓四郎著

假亭涉筆 二編

副刻

助字辨 一冊

已刻

假亭摘藁 一冊

已刻

皇都書林 梶川七郎兵衛
東都書林 須原犀伊八

抱關休暇漫筆

學志毅

抱關人 騰谷矢部保惠撰

詩云。淑人君子。其儀不忒。何爲不忒。惟有仁義而已矣。人間萬事。舉令篤此行義也。是任爲人者之行者。而各得而爲德者也。故行義德之實也。書云。唯天監下典厥義。又云。民有不若德。天信命正厥德。故以行其義爲德者。以道得衆也。傳云。公季修古公遺道。篤行義。諸侯順之。豈不德乎。嗚呼今學道者。何爲者哉。其不得于言。而誹謗前輩先哲。不得實而途說。而若其行乃鼻沒。見其文多可愧者。聞其言如嬰兒論曰。臆斷無正。實浮僞惑真也。後生雖偶有志者。群蛙亂聽。恍惚不辨真。一過一不及。遂使之不至道也。今夫讀書者。就師得解章句。爾後自務。經以發經。相照見。則思過半者多矣。嘗以論語孔子言。照看尙書。則如玉走盤。規規乎不出其中也。豈須推測煩濫之解乎。其持聖人未嘗言無定之說。而終身多不得聖意者也。抑余此論。於文則不免無師之謗也。然學者少附意焉。則可免岐路難辨之惑。而學道庶乎其不忒矣。

請業者解讀書。終欲得道。則就經溫其意。就經且恐失感。况持糟粕糠粃之浮說。多魯魚者。豈得真意乎。其只如詰訓者。可爲獲魚之筌也。書不言乎。惟狂克念作聖。其德且如斯。其餘豈有思不通者乎。惟不欽思耳。故能學者。經經相照相徵。罅隙不洩。而道自至焉。古聖君師。垂道於後裔。豈有勾棘難通者乎。是以可知而已矣。不學者姑舍是。

讀中庸

世多好奇不喜常者。人心之詭譎也。故導心可於微矣。世專言性理者。非與此人共之道。自一家之學也。然其徒超然厭禮義。出入不得其中也。適莫攻異端者塞路。或以之疑乎聖道也。於是子思子作爲之所起。所以警彼教此也。然後歷載邈矣。其書頗放失。僅存其一篇。猶足窺豹一斑。察其全牀奇紋矣。夫中庸爲書也。述所以天道與人道判焉。其理者天之神道也。制者聖人教人使之適其道。而理亦自不悖。所謂人道也。其理君子可自知之。不可以教化人。理以教人。則人道不立。人道不立。則上下不和。而理亦從悖焉。故聖人修立人之方。而其理自全矣。謂之以人治人。於是禮云義云。不理云。然則此書非初學者所先。唯所以抑過之者。使之知其中庸也。夫子曰。民可使由之。不可使知之。此之謂也。其禮義之制也者。脩之則理自全其中也。豈有初學窮理之教乎。其以窮理爲學者。乃不信聖人之言而施爭端。無法之罪亦甚矣。何則物有欲而不居。亦有惡而不避。其欲與惡理也。不居與不避義也。此之謂順天性以誼斷之。故書曰。欲敗度。縱敗禮。

以速戾于其身。若其專任理。則天人相亂。與禽獸相近。猶上古與夷狄。人無教。則儻然不知彝倫攸叙。故彼有禽獸之行。乃不知其非也。今世雖適知其理者。不知所以制節之道。而與人背行。大亂人倫。如是者豈謂全天理乎。且生知天性者。其唯聖者與。下愚豈窮之乎。是以理自然也。知之與不知之人也。故賢者知大者。不賢者知小者。有至焉。有不至焉。自有大小。其處也。而非各窮之成者。但不識不知。可順帝之則也。若人白首窮得之理。乃豈踰聖制之中如日月者乎。夫道者。所謂大德者必受命。繼天立極。制作之所在。而高者俯就之。卑者可企及之。於是人倫不相悖。豈非人性之靈者乎。余嘗云。欲學入道者。猶畫大馬之難。而欲窮天理者。猶畫鬼魅之易也。其只可學而已矣。庶幾君子就此書。而知道之所由。可以施中於民矣。

道德辨

道之本原出於天。一出。禮云義云。不理云也。我聞天生民。而聖人制其小大度。夫義先王制事之宜。而人行之分定也。禮行事之節。而以節制性情之道也。譬如恭而有禮則安。恭而無禮則勞。是以立禮易理行義。以制人心陷邪也。小大之事。莫不有禮。其禮人之行也。行者人之所履也。乃禮者義之與。而義者禮之實也。非禮之義。非義之禮。不足爲禮義。先哲有言。中者禮義之謂也。是大人小人之必由而履。人君率民之道也。然其道或大或小。所以共爲道者。則大人有大人之禮義。小人有小人之禮義。各履其禮義之名分也。論語云。恭寬信敏敬五者。好仁智信直勇剛之六言。皆